第二回日本結核病學會總會演說要旨

開會ノ辭

會長　醫學博士　佐多愛彦

從來本邦ニ於ケル結核研究ノ過程ハ一部ノ學者乃至實地家ニ放任セラレ、一般學會ヨリハ冷遇セラレタルノ形アリ、而シテ此趨勢ハ歐洲大戰後ノ結核研究ノ新機運ト合致セズ、吾結核病學會ハ斯ル內外ノ機運ニ乘ジテ生レタルモノナルガ、最初ハ本邦結核研究ノ形勢ニ鑑ミテ果シテ他ノ諸學會ト同樣ナル發達ヲ遂ゲ其業果ヲ國際醫學界ニ示スニ足ルベキカヲ疑ハレタリシモ、昨年ノ第一回ヲ終ハリ而シテ本年ノ第二回ヲ迎フルニ際シ、亦結核雜誌ノ發展ト會員ノ增加トニ鑑ミ、今ヤ其堅實ナル發達ヲ疑フノ餘地無キニ至リ、各學會ニ伍シテ更ニ遜色無キヲ認メ得ルニ近シ、本年第二回ノ「プログラム」ヲ案ズルニ其揭題多クハ結核研究ノ新機運ニ合致シ、略ボ本邦ニ於ケル斯學研究ノ趨勢ヲトスベク其結果必ズ見ルベキモノアラン。

斯ル新研究ノ結果必ズヤ亦其斷案ニ據リテ實際的施設ヲ變更スベキモノ尠カラザルベク、研究家ノ熱誠ハ轉テ亦實際運動ノ新機運ヲ成就スベキモノタルハ論無シト雖モ、眞ノ學術研究ト實際的社會運動トハ亦自ラ其趣ヲ異ニスル處アリ、嚴ニ之ヲ區別シテ混同雙退ニ陷ランコトハ之レヲ避ケザル可カラズ、幸ニ本學會ノ創立ニ際シ、此二大貢獻ヲ嚴界シ本會規則第二條ニ之ヲ明記セリ吾人ハ今後猶ホ此規定ヲ尊重シ研究ヲ以テ主眼トシ其研究ノ歸結ニ據ル實際運動ハ別ニ亦全會員ノ結束ヲ圖リテ結核豫防其他ノ實際的施設ニ關シ活動ヲ試ムルコトアルベシ。當市ニ本學會ヲ迎フルニ際シ、主催地ノ

同人ヲ代表シテ、吾等ノ斡旋至ラザルニ拘ハラズ會員諸君東京ヲ始メ東ハ北海道西ハ九州朝鮮等ヨリ斯ク多數ニ參加セラレタルノ同情ヲ感謝シ而シテ其協力ヲ冀フコト切也。

第一　肺結核患者ノ呈スルボテロ反應ノ意義

大阪市　渡邊三郎
紙野圭三

癌患者血清ノ呈スルト云フボテロ反應ハ肺結核患者血清ニモ現ハル、モノナリ。余等ハ他ノボ反應ヲ陽性ナラシム如キ合併症無キ肺結核患者ニ就キボ反應ヲ檢シ其ノ意義ノ存スル所ヲ論ズ。卽チボ反應ノ陽性度高マルニツレ該患者ノ一般狀態ハ險惡ニシテ其ノ豫後亦不良ニ傾ク、從ツテ局所所見ニノミ依ルツルバン、ゲルハルト時期分類法トハ一致セズ、シ而テボ反應陰性或ハ弱陽性(赤點壹或ハ貳)ナル者ハ停止性或ハ治癒結核ナル事多シ。

次ニ余等ノ變法トシテ余等ノ考案セル量計中ニテボ反應ヲ檢シタル後、猶過剩ノ沃度沃度加里液ヲ加ヘ最終沈澱ヲ求メ、之ヲ遠心器ニ裝ヒテ沈澱物沈降ノ遲速ヲ觀ル(一分間貳千回轉十分間)卽沈降遲ナルモノハ體積多ク現ハレ、速ナルモノハ寡ナリ此ノ沈澱物ノ多寡ガボテロ原法ト殆ド一致スルノミナラズ、ヨリ確實ニシテ興味アル結果ヲ示セリ。

外ニ余等ハボ反應原法及ビ變法ト赤血球沈降速測定、竝ニマテフイ反應ヲ同時ニ施行シ批判シタリ。卽ボテロ兩法ハ赤血球沈降及マ反應トハ必ズシモ一致セズ、是ボ反應陽性ノ本態ガ血清ノ「ヒブアルブミノーゼ」ニシテ赤血球沈速及マ反應ト本態ヲ異ニセルニ因ス。而シテ赤血球沈速及ビマテフイ反應ノ結果ハ相一致スル事ノ多キヲ見タリ。尤モ病狀最モ重ク一般狀態ノ甚シク險惡ナル患者ニ於テハ三反應トモ一致シテ强陽性ニ結果セリ。

惟フニ是等三反應ハ一度ノ採血(約五・〇—六・〇m)ニ依リテ施行シ得、綜合觀察ニ依リテ該患者ノ一般狀態ヲ窺ヒ豫後ヲ定メ治療方針ヲ樹ツル上ニ便多キヲ揚言ス。　(自抄)

第二　ボテロ反應ノ本體ニ就テ

大阪市　渡邊三郎
紙野圭三

演者等ハボテロ癌血清反應ノ本體ヲ攻究シ、其ノ反應ハ全ク一種ノ蛋白沈降反應ニシテ亦之ヲ肺結核患者血清ノ多數ニ證明シ、他ノ三四追試者ト同ジク此ノ反應ハ癌血清固有ナラザルヲ知レリ。而シテ可檢血清量ノ多寡ニ依リテ該反應成績ノ左右セラルヽ事ヨリ血清蛋白量ノ之ニ重大ノ關係ヲ有スル事ヲ悟リ、患者血清ノ蛋白含量ヲブルフリヒノ「レフラクトメーター」ニテ測リ、一方ボ反應ヲ施行セルニ、血清蛋白量七・五五%以下ノモノニ於テ反應陽性ナル事ヲ確知シ、ボ反應ノ本體ハ全ク「ピアルブミンノーゼ」ニ存シ、之ニヨリテ臨牀的ニ能ク「カヘキシー」發來ヲ早期ニ診定シ得可キヲ述ベ更ニ不溶解性ノ沈降物發來ノ點ヲ判定ノ目標ト爲スニ代フルニ、更ニ沃度液ヲ注加シテ沈降物量全ク一定トナリ上清ノ再ビ透明トナル點ヲ以テスル事ノ正確ナルヲ說キ、ソノ點ノ1,25 c.c.以下ノ沃度液注加ニ依リテ出現スル時ボ反應陽性ト爲ス可キヲ述ベタリ。（自抄）

第三　肺結核患者血壓ノ臨牀的觀察

大阪醫科大學病院肺癆科教室（主任佐多博士）
川上理作

近代血壓ナルモノガ素人間ニ迄モ普ク知レ亙リ、學術上ハ勿論ノコト、延テハ實際上ニモ重要視セラルヽニ至レリ。殊ニ一定ノ體質（中風性體質）ヲ有スル者ノ如キハ次第ニ老年トナルト共ニ其ノ血壓ノ上昇スルヲ恐ル。然レドモ結核ニ罹

リ易キ素質ヲ有スル人ハ之ニ反シテ假令老年ニ達スルモ血壓ノ上昇ヲ來タスコトナク、反ツテ血壓ノ低下スルコトハ一般ニ認メラル、事實ナルガ如シ。余ガ百二十餘人ノ重輕症、各期ニ亙ル肺結核患者ノ血壓ヲ測定シ、其ノ臨牀的所見ト比較研究シタル結果モ是等先人ノ成績ト殆ンド一致セリ、卽チ年齡、性ノ如何ヲ問ハズ、其ノ重症度ニ比例シテ血壓ノ低下セルヲ見タリ。如斯キ結核ニ罹リ易キ發育不全ノ體質ヲ有スルモノハ第一心臟及ビ血管モ亦發育不充分ニシテ、從ツテ其ノ血壓ノ低位ナルコトモ容易ニ想像シ得ル所ナルモ尙第二ニ結核菌毒素ガ心臟、血管、血管運動神經特ニ交感神經ヲ障碍シテ以テ血壓ノ低下ヲ來タスモノナルコトモ亦種々ナル事實ヨリ推測シ得ル所ナリ。此ノ方面ニ向ツテハ更ニ詳細ナル研究ヲ要スル所ナリトス。

上述ノ如ク肺結核患者ノ血壓ガ一般ニ低下セリト云フ外ニ尙結核臨牀上ニ必要ナルコトハ患者ノ有スル種々ナル症狀竝ニ合併症ニ依リ、血壓ノ一過性、或ハ持續性ノ變動ナリ。余ノ檢査セシ成績ニ依レバ患者ノ有スル體溫ノ變化特ニ其ノ上昇ニ伴ツテ血壓モ上昇シ、患者ノ體位ノ變動ニヨリテモ亦著明ナル變化ヲ來タスモノヽ如シ、卽チ余ノ檢査ニ依レバ一般ニ仰臥位ニ於テ血壓ハ最大ニシテ、坐位コレニ次ギ、直立ハ最小ナリ。又筋肉運動モ亦一過性ノ可ナリ甚ダシキ血壓ノ上昇ヲ招來シ、其他高度ノ呼吸困難、日光浴後等モ亦高血壓ヲ現ハスコトヲ認メタリ。

又肺結核患者ニ屢〻合併スル濕性肋膜炎、動脈硬變症、バセドー氏病、腎炎、糖尿病、其他一般ニ血壓ノ上昇ヲ伴フ疾患ヲ合併スル場合ニハ輕症及ビ中等度ノ患者ニハ血壓ノ持續的上昇ヲ現ハシ、重症ニハコレヲ認メザル場合多シ、

次ニ肺結核患者ニシテ比較的血壓ノ高位ニアルモノハ一般ニ喀血ヲ誘起シ易キモノナラント想像セラル、所ナルモ余ノ喀血患者ニ就テ檢査シタル成績ニ依レバ喀血患者ハ必ズシモ高血壓ヲ有スルモノニアラズシテ、反ツテ血壓ノ低下セルモノニ屢〻頑固ナル喀血ヲ見ルコト多シ、惟フニ血壓ノ高位ナルモノハ一般ニ所謂初期喀血ニシテ豫後可良ナルヲ常トス、之ニ反シテ血壓ノ低位ナルモノハ心臟衰弱ノ結果、肺ニ鬱血ヲ來タシタル爲メナルベク概シテ豫後不良ナリ。

最後ニ結核ニ屢〻應用セラル、「クロールカルチウム」溶液ノ靜脈內注射ガ血壓竝ニ喀血ニ如何ナル影響ヲ及ボスカハ先人ノ深ク論及サレタル所ナルモ、余モ亦コレニ追試ヲ行ヒ以テ次ノ如キ成績ヲ得タリ。卽チ約三十餘名ノ患者ニ五%「ク

ロールカルチウム」溶液二〇瓩ヲ約二分內外ノ速度ヲ以テ靜脈內注射ヲ行ヒタルニ、タダ一過性ノ最高壓ノ上昇、最低壓ノ下降、卽チ脈壓ノ增加ヲ見タリ、此レト同時ニ脈數ノ減少ヲ認メタリ。此ノ場合脈壓ノ增加ニヨリテ比較的血速度係數モ一時的ニ增加ヲ見タリ。尙我ガ肺癆科敎室ニアリテハ多年ニ亙リ多クノ喀血患者ニ「カルチウム」注射ヲ行ヒ未ダ一例ダニモコレガ爲メニ喀血セシ例ヲ見ズト云フ、コレヲ以テコレヲ見レバ「カルチウム」注射ニ依リテ起ル一過性ノ而モ大循環系ノ血壓ノ上昇ガ比較的藥物ニ對シテ不感性ナル小循環系ノ血壓ヲ高メ以テ喀血ヲ誘起シ得ルモノナルヤ更ニ考慮ヲ要スル所ナリトス。

尙結核患者ノ血壓ハ一般ニ百以下ノ低位ニ位スルモノハ豫後不良ニシテ、適當ナル治療ニヨリテ血壓ノ上昇スルハ豫後可良ナリ、反對ニ比較的高血壓ヲ有セル患者モ次第ニ血壓ノ低下ヲ示スモノハ豫後良ナラズ、故ニ血壓測定ニ依リテ免疫ノ發現ノ消長ヲ窺知シ得ルガ如シ、尙是等ノ間ニ於ケル關係ヲ研究スルコトハ更ニ興味アル問題ナリト信ズ。（自抄）

第四　肺結核患者ノ血壓ニ就イテ

東京市療養所
鈴木左內

演者ハ肺結核患者、四百六十二名ノ男子ノミノ血壓ヲ檢シ次ノ各項ニ關シテ報告セリ、

第一、四百六十二名ノ患者ヲ椅子ニヨル坐位ト、仰臥位トニ分チテ測定時ノ體位ニテ別ニナシ平均價ヲ求メタリ。

第二、年齡及病期ニテ分類シ、略ボ規則的ノ昇降アルヲ見タリ。

第三、肺結核以外ニ結核性ノ合併症アル者等ヲ比較セリ。

第四、盜汗及皮膚細小血管擴張ノ有無ニテ差異アルカヲ檢セリ。

第五、最近ノ既往症ニ於ケル喀血ノ有無ニテ血壓ニ差異ナキカヲ見タリ。
第六、發熱ノ有無及其程度ニテ血壓ニ著シキ昇降ノアルヲ見タリ。
第七、體重ノ大小ニシテ血壓ニ高低ノ可成リ大ナルヲ見タリ。
第八、死亡時期トノ關係ヲ見テ其ノ時期ニテ相當ノ差アルヲ見タリ。
第九、食事ノ影響ニ就イテ調査セリ。
第十、七日間連續シ同時刻ニ同要約ニテ測定シ日ニヨリテ可成リノ高低アルヲ認メタリ。
第十一、一日中ニ於ケル血壓昇降ノ程度ヲ見タリ。
第十二、入浴前後ニ於ケル關係ヲ觀察セリ。
第十三、赤血球沈降速度ト比較シ、速度大ナル者程血壓ノ低位ナルヲ認メタリ。
第十四、「クロールカルチューム」靜脈內注射ノ影響ヲ觀察シ、人ニヨリ、時期ニヨリ昇降ノ有ルヲ見、其程度ヲ示セリ。
（自抄）

第三及第四對スル附議

渡邊三郎

一、

余ハリバロッチ血壓計ヲ用ヒ「マンセット」12糎ノモノニヨリ、中食後絕對安靜、午後四時ト五時ノ間ニ於テ橫臥ノマヽ、血壓ヲ測定シ、患者二百六十四名ヨリ得タル結果ニ於テ最低血壓ノミ下降スル患者ノ九〇％ニ於テ、脚氣ノ既往症及ビ現症ヲ證明セリ。脚氣ハ肺結核治療上恐ル可キ合併症ノ一ツナリ。シカモ脚氣ニ於テ最低血壓下降ハ原發的ニシテ、治療ニ於テ又最後迄殘留スル症候ナルヲ以テ、若シコノ點ニ於ケル關係ヲ進ンデ明ニセンニハ或ハ肺結核患者治療ニ際シ早期ニ脚氣ヲテ豫防シ又ハ診定スル方法ヲ簡單ナル血壓測定ノ上ニ求ムル事ヲ得可シ。（自抄）

二、

醫學博士　有馬英二

先刻渡邊君ガ結核患者ノ最低血壓ノ降下ニ付テ御述ベニナリ、之レガ脚氣ノ爲メノ樣ナ御話デアリマシタ。私モ至極同感デハアリマスルガ、先日內科學會デ追加ヲ致シテオキマシタ樣ニ、此ノ最低血壓ガ果シテ脚氣ノ結果デアルカドウカト云フコトハ尙考慮ノ餘地ガアルト思フモノデアリマス。（自抄）

三、

高龜良樹

喀血ト血壓ノ上昇トノ間ニ於テ特殊ノ關係ナキモノヽ如キ演者ノ御意見ニハ遺憾ナガラ共鳴シ得ザル所ナリ。又血壓低キ患者ニシテ喀血ヲ來スモノアルハ余モ又屢次實驗セル所ナレドモ當該患者ガ元來血壓低下セルモノナルトキハ喀血時ニ血壓ノ上昇ヲ來スコトアリトモ平均血壓ニ比シ尙遙ニ低下セル場合アルヲ以テ標準血壓ト比較シテ立論スルトキハ誤認ヲ來スコトナキヲ保セズ、チェルニー氏ノ實驗セル如ク睡眠時ニ於テハ一般ニ血壓ノ著シキ低下ヲ來スモノニシテ覺醒時ニハ急ニ上昇ヲ來スモノナリ。第二次—第三次喀血ガ睡眠時ヨリ覺醒時ニ移行スル瞬間ニ於テ惹起セラルヽコト屢次ナル事實ハ最モ雄辯ニ這般ノ關係ヲ證明スルモノナリ。

尙「クロールカルチウム」靜脈內注射ヲ喀血ニ應用スルコトノ可否ニ關スル演者ノ議論ニ對シテ余ハ考慮ノ餘地ヲ充分ニ存スルモノト信ズ、「クロールカルチウム」ハ血壓ノ上昇ヲ來スノ外小循環系ノ鬱滯ヲ來シ肺ニ鬱血ヲ來スノ作用アルコトハ動物實驗ノ上ニ於テモ明ナル事ニシテ、余ハ理論ノ如何ニ拘ラズ肺出血ニ際シテ肺ニ鬱血ヲ來サシムル如キ作用ヲ有スル藥物ノ注射ハ臨牀家トシテ充分ナル考慮ヲ要スベキ問題ナリト信ズルモノナリ。（自抄）

四、

醫學博士　近藤乾郎

余ハ一定量ノ「デギタリス」劑ガ喀血患者ニ有效ナルヲ認ムルモノデアルガ「クロールカルチューム」ノ應用モ喀血豫防ノ

意味ニ於テ一定ノ效果アルヲ認ム。余ハ此ノ意味ニ就テ「アトキシール」ヲ用ユルニ際シ「クロールカルチューム」ヲ使用スルノデアル。（自抄）

五、

永井勇

近來喀血患者ニ對シ「カルチユム」ノ靜脈內注射ヲ盛ニ使用セラル、ガ余ハ多數喀血患者ニ使用スルモ却テ一過性ニ血壓ヲ高メ喀血ヲ促ス樣思ハル、故一寸追加シテ置キマス。

六、

田中實

一、「クロールカルシウム」溶液ノ靜脈內注射ガ一過性ニ血壓ヲ高ムルノ故ヲ以テ之レヲ喀血患者ニ應用スルハ却ツテ喀血ヲ促スモノナリトナスモ「クロールカルシウム」溶液靜脈內注射ニヨリテ起ル血壓上昇ハ一過性ノモノニシテ一〇內外ノ上昇ヲ來ス。吾人ハ肺結核患者ノ血壓ヲ時々測定スルニ一日中ニ一〇乃至一五內外ノ上下アルモノニシテ又精神的作用ニテモ時々上下スルコトハ屢〻目擊スル處ニシテ此ノ一過性ノ僅少ナル血壓上昇ノ爲メニ喀血ヲ促進スルガ如キコトハ無カル可ク、又吾人ガ十數年來ノ經驗ニ依ルニ、之レガ爲メニ一回モ喀血ヲ促シタル如キ例ニ遭遇セズ、又注射ニ當リ充分ナル注意ヲ拂ヒ徐々ニ行フ時ハ血壓ノ上昇モ亦從ツテ低シ、故ニ喀血患者竝ニ其傾向アルモノニハ愼重ナル注意ノ下ニ注射ヲ行フ可キナリ。

二、吾人ガ「クロールカルシウム」ヲ喀血患者ニ應用スルハ「クロールカルシウム」ガ血液ノ凝固作用ヲ高ムルモノナルガ故ニ其作用ヲ利用シテ止血機轉ヲ促進セントスルニアリテ卽チ喀血ヲ豫防スル意味ニ於テ試用スルモノニシテ卽座ニ其ノ效ヲ收メントスルモノニアラズ。（自抄）

七、

高龜良樹

「クロールカルチウム」ノ血液凝固作用ニ基キ喀血豫防ノ意味ニ於テ之ガ使用ヲナサントスル田中氏ノ立論ニ對シテ共鳴スルモノナリ。余ガ喀血ニ對スル「クロールカルチウム」注射ヲ戒ムルハ喀血ヲ見テ應急手當トシテ直チニ之ヲ注射スルコトナリ。（自抄）

第五、肺結核患者ノ血液像

大阪醫科大學病院肺癆科教室（主任佐多博士）
横井弓雄

從來結核殊ニ肺結核患者ノ血液像檢査ハ屢〻行ハレタルガ二樣ノ意義アリ。一ツハ結核菌ノ毒素ニヨリ起ル貧血作用ノ測定、他ハ結核菌ニ對スル人體ノ反抗作用卽免疫機轉ノ發生ガ一部之レニ依リ推測サレルコト、卽チ退行的ノ關係ト漸進的關係トヲ共ニ血液像ニヨリ稍〻推測サル、如ク考ヘラル、卽チ赤血球血色素量ハ前者ヲ推定シ白血球ハ稍〻後者ヲ推定サレ得ルナリ、然ルニ右肺結核患者ノ血液像檢査ノ成績ハ內外學者間ニ可ナリ多數ニ存スレ共、各自多少ノ相違アリテ何レヲ夫レト定メ難シ、依テ余ハ我ガ科ノ患者數十名ニヨリ右檢査ヲナシ次ノ如キ成績ヲ得タリ。卽チ

一、赤血球數及ビ血色素量ハ病期ノ進ムト共ニ著シキ減少ヲ示ス。

二、白血球數ハ一般ニ增加シ末期ニ於テ稍〻著シ。

三、中性多型核白血球%數ハ期ノ進行ト平行シテ增加ス。

四、淋巴細胞%數及ビ「エオジン」嗜好性白血球%數ハ病期ノ進行ト共ニ減少シ中性多型核白血球%數ト全ク反對ノ狀態ヲ示ス。

五、移行型及ビ大單核白血球%數ハ全期ニ於テ稍〻增加セル如ク末期ニ於テ甚ダシ。

六、鹽基性嗜好細胞%數ハ全期ヲ通ジ減少セルモノ、如シ。

右檢査成績ニ於テ見ル如ク、赤血球數ト血色素量ハ病的機轉ト共ニ貧血狀態ヲ示スガ、仔細ニ臨牀上ノ所見ニ比較スレバ其間喀血ニヨリ貧血狀態ガ進ム結果ト見ル他ニ肺及ビ外觀ト比較シテ多少ノ意義ヲ獲得スルコトアリト考フ、殊ニ之レヲ「ツベルクリン」反應ノ程度ト比較スレバ一層ノ興味アリトス。

白血球ニ就キテハ其著明ナル現象トシテハ一般的ニ白血球增多ヲ表ハシ、其中中性多型核白血球ガ最モ多ク、淋巴細胞ハ却テ減ズル、且ツ大單核白血球ガ稍〻增加ノ度ニアルハ注目スベキ現象ナリ、最近ノ研究ノ結果ニヨレバ結核菌ノ免疫發生ハ網狀內皮細胞ニ關係セルコト明ナリ、從テ結核ノ感染機轉ト免疫ノ發生ト大單核細胞、中性多型核白血球及ビ淋巴細胞、「エオジン」嗜好細胞ノ增減トハ將來更ニ研究ヲ要ス、卽チ一定ノ連鎖的關係ヲ有スルモノト認ム、コトニ大單核白血球ノ關係ヲ一層深ク考究シ「ツベルクリン」反應ノ程度ト比較スレバ興味深キ事ト考フ。（自抄）

第五ニ對スル附議

醫學博士　永井秀太

血液像檢査ニ際シテハ其患者當時ノ病勢傾向卽チ輕快シツヽアルカ增惡シツヽアルカニ多大ノ注意ヲ拂フ必要アリ。

第六、硅酸鹽靜脈內注射ノ肺癆患者ニ及ボス影響（其一）

大阪醫科大學病院肺癆科教室（主任佐多博士）
田中實

結核治療ノ方針ハ滲出性機轉ヲ抑壓スルコトヽ、纖維性增殖催進トノ二點ニアルコトハ云フマデモナシ、吾人ハ既ニ十數年來「カルシウム」療法ヲ遂行シ、實驗上又臨牀上結核ノ滲出性機轉ヲ抑壓スルコトヲ證明發表シ、其效果今ヤ疑ヒナ

シト認ム。然ルニ第二ノ治療目的卽チ纖維性增殖ニ對シ最新劑ノ實行ニ堪ユルモノアランニハ結核治療上大ナル效果ヲ收メ得ルモノト信ズ。惟フニ Kobert ガ硅酸鹽類ノ制炎作用及ビ纖維性增殖作用ヲ實驗報告セルハ一千九百十八年ニシテ Kühn ガ更ニ之ヲ研究報告セシハ一千九百十九年ナリ爾來之ニ關スル研究增加シ Frank, Düll 等ノ研究アリテ實驗的纖維性增殖作用ハ今日ニテハ稍〻證明サレタルガ如クナルモ、之ヲ確定スルニハ尙ホ多大ノ實驗ヲ要スルモノト信ゼラル』。殊ニ近來恩師佐多博士ノ意見ニヨリ、結核免疫觀ノ進步ト肺癆發生觀ノ發展ニヨリ佐多博士ノ所謂結核第三期感染期ニ於ケル纖維性素質ノ發現ニ關スル觀念一進シ從テ此素質ヲ亢進セシムルコトハ既ニ甚端緒ヲ發シタル肺癆發生ノ治癒的傾向ヲ增進スル所以ナルコト疑ヒナシ、故ニ吾人ハ此ノ纖維增殖性最新劑ヲ應用シテ肺癆ノ治癒的機轉ヲ促進スルコトハ最モ必要ナルコト、信ズルヲ以テ昨年來二樣ノ方針ヲ立テ本劑ノ研究ニ著手シツヽアリ。卽チ研究ノ第一段ハ健康獸ニ硅酸鹽類ヲ注射シ長期ニ亙リテ其諸臟器ニ果シテ纖維性增殖ヲ催起シ得ル力アリヤ否ヤ、モシ之アリトスレバ如何ナル臟器ノ結締織ニ於テ著明ナルカヲ組織的ニ確定シ、更ニ進ミテ結核感染動物ニ本劑ヲ連續應用シテ既ニ起リタル結核病變ニ對照動物ヨリモ顯著ナル高度ノ結締織增殖及ビ治癒的傾向ヲ確認シ得ルカヲ觀察セントスルニアリ。研究ノ第二段ハ Kobert 及 Kühn 以來ノ研究ヲ稍〻確實ナルモノト認メ直ニ人結核ニ試用スルノ手段方法ヲ講ズルニアリ。此ノ研究ハ臨牀的觀察ニヨリテ報イラル可キモノトス。

前段ノ實驗的研究ハ目下尙ホ研究中ニ屬シ他日別ニ發表セラル可キモ後段ノ研究ハ余ノ擔任スル處ニシテ昨年來之レニ著手シ今ヤ觀察ノ半ニ達セルモ未ダ全ク完結スルニ至ラザルガ故ニ、今唯ダ其大要ヲ報告セントスルモノナリ。余ハ此ノ目的ニ向テ直ニ人體ニ應用スルコトヲ避ケ先ヅ家兎ニ就テ愼重ナル豫備的實驗ヲ遂行セリ。

先ヅ第一ニ種々ノ%ノ硅酸「ナトリウム」溶液ガ家兎血球ニ對スル溶血作用ヲ實驗シ其一%溶液ハ家兎ノ靜脈內注射ニ堪ユルモノナルコトヲ確メ次ニ種々ノ%溶液ノ種々ノ量ヲ二千五百瓦內外ノ家兎ノ耳靜脈內ニ注射シ其直後反應ヲ觀察シ、一%溶液一〇・〇瓩、二%溶液五・〇瓩ニテ反應ナキコトヲ確認シ、更ニ二千五百瓦內外ノ六頭ノ家兎ヲ二頭ヅヽ、三組ニ分チ第一組ニ一%溶液三・〇瓩、第二組ニ一%溶液五・〇瓩、第三組ニ二%溶液二・五瓩ヅヽ、每日靜脈內ニ注射シ三十日

間ニ亙リ食慾、體重及尿等ヲ檢査シタルニ食慾、尿量ニ異狀ヲ認メザルモ第二組ノ一頭ト第三組ノ二頭ハ注射開始後十二三日目ヨリ尿中蛋白痕跡ヲ認メタルモ圓壔ヲ認メズ、又尿量ニ異狀ナク體重ハ稍〻減少セリ、然ルニ第一組ノ二頭ト第二組ノ一頭ハ何等異狀ヲ認メズ、體重モ漸次增加セリ、此ノ實驗ニ依テ一%硅酸「ナトリウム」溶液三・〇瓩ヲ毎日持續シテ二千五百瓦內外ノ家兎ノ靜脈內ニ注射スルモ障碍ナキコトヲ確認シ、肺結核患者十一名ノ承諾ノ下ニ、始メ一%溶液二・〇瓩、三・〇瓩、五・〇瓩、七・〇瓩、一〇・〇瓩ト增加シツヽ、連續靜脈內ニ注射シ約四十日ニ及ベリ其間時々尿ノ檢査血壓測定ヲ行ヒ又臨牀的觀察ヲ行ヒタルモ大ナル障碍ヲ認メズ、該注射ノ效果ト認ム可キモノハ今尙日淺クシテ斷言スル能ハザルモ肺結核特有ノ速脈ノ減退熱下降ノ傾向、食慾增進及ビ體重增加等ナルガ如シ尙ホ一層長時期ニ亙リテ之ヲ觀察センニハ或ハ其效果ヲ確認ス可キモノアランカ。（自抄）

第六ニ對スル附議

醫學博士　佐多愛彥

吾等ハ十五六年來盛ニ「カルシウム」療法ヲ鼓吹シテ、余ノ所謂結核性滲出素質ニ因スル滲出性炎ノ防壓及血液凝固性ノ增進組織抗力ノ催進等ニ向テ一定ノ效果ヲ贏チ得タリト信ズ。然ルニ本療法開始ノ往時ヲ回顧スレバ初メ〇・五乃至一・〇%ノ「クロールカルシウム」皮下注射ヨリ血管內注射ニ及ビ、更ニ二%—三%—五%ノ五・〇乃至一〇・〇ノ血管內注射ニ進ミ、其五%ノ「クロールカルシウム」一〇・〇乃至二〇・〇ノ血管內注射ヲ毎日數十回反復スルモ更ニ患害無キヲ確メ安ンジテ數ケ月ノ連用ヲ爲シ得ルノ今日ニ至ル迄ヲ如何ニ苦心シタルカ殆ンド名狀ス可ラズ其間殆ンド今昔ノ感アリ。然ルニ吾人結核療法ノ二大方針タル滲出性炎ノ防壓ニ稍〻成功シ、今ヤ進ンデ纖維性素質ノ催進ニ向テ更ニ採ルベキ手段ヲ講ゼンコトノ切要ヲ感ジツヽアリ。余等ハ此方針ニ向テ數年來コーベルト及キューン等ガ主唱シツヽアル硅酸療法ヲ以テ或ハ多少ノ曙光ヲ發見センコトヲ期シ、昨年其具體的研究ニ著手スルノ案ヲ立テ、一面動物ニ就テ其果シテ纖維

増殖機能促進ヲ確認スベキカヲ證明センコトヲ期シ、一面亦人體ニ向テ如何ナル程度ニ於テ本鹽類ヲ應用シ得ルカヲ測定センコトヲ期シ、田中學士ヲシテ其觀察ニ著手セシメタリ。

氏ガ臨牀的觀察ノ結果ハ、例之バ硅酸「ナトリウム」ニ就テ一％液一・〇ノ血管内注射毎日或ハ隔日反復十回以上ニ至ルノ程度ハ、更ニ其％ノ濃度ヲ高メ而シテ一回ノ注射料ヲ二・〇乃至三・〇ニ高メ以テ十回以上延長スルノ差支ヘ無キヲ知リ得タリ、余等ハ此觀察ヲ更ニ延長シテ硅酸「ナトリウム」ノ血管内注射ハ人體ニ向テ(一)幾％迄差支ヘ無キヤ、(二)一回何瓦迄用ヒ得ルヤ、(三)毎日或ハ隔日幾日間繼續シ得ルヤ、(四)臨牀上如何ナル即時反應ヲ認メ得ルヤ、(五)肺癆ノ症狀ニ如何ナル反響ヲ惹起スベキヤ、等ヲ觀察シ、以テ一面動物實驗ノ成績ト對照シテ其效果ヲ決定セント欲スルモノナリ。

第七、肺結核症ニ於ケル赤血球沈降速度ニ就テ

大阪石神研究所
枚田官三郎

演者ハ先ヅ同問題ニ關スル諸家ノ研究ノ述べ、次デ自己ノ檢査方法ヲ說明シテ曰ク、内徑一糎、長サ一〇糎、管底ハ特ニ水平ノ狀態ニ作リ試驗管ノ底ヨリ上方五糎ノ高サ迄正確ニ度盛ヲ刻セル特製ノ試驗管ヲ用フ。

枸櫞酸「ナトリユーム」　五・〇
〇・八五％食鹽水　一〇〇・〇　ヲ豫メ製造シ保存ス。

此枸櫞酸「ナトリユーム」加食鹽液一瓩ヲ取リ、之ニ患者血液三瓩ヲ入レ輕ク「ゴム」栓ヲナシ三―四回靜カニ泡沫ヲ作ラザル範圍ニ於テ、上下ニ振動シ、後「ゴム」栓ヲ除外シ試驗管臺上ニ直立セシム。

攝取セル食物ノ影響セザルヤヲ恐レシタメ、血液採取時間ハ常ニ朝食後三時間乃至四時間ヲ標準トセリ。

尙、溫度ノ此赤血球沈降速度ニ影響スル事ハ既ニ知悉セラレタル事實ナル故試驗血液ハ常ニ攝氏二十五度ノ溫度ノ室內ニ保存セリ。尙血液採取後、三十分、一時間、二時間、三時間、二十四時間ト時間ヲ隔テ、其血球ノ沈降シテ透明トナレル血漿極ノ高サヲ測定セルモノナリ。

而シテ演者ハ肺結核竝ニ肋膜炎患者百七十名ニ就キテ觀察シ左ノ如キ結論ニ到達セリ。

一。肺結核症ニ於テハ輕症患者ハ赤血球沈降速度遲ク、之ニ反シ重症患者ハ沈降速度著シク促進セラル。卽チ之ヲ時間的ニ觀察スルニ輕症患者ハ血液採取後、三十分、一時間、二時間、三時間、四時間ト徐々ニ其沈降ヲ終了スルモノナレ共、重症患者ノ血球ハ三十分乃至一時間以內ニ於テ既ニ大部分ノ沈降ヲ終ルモノナリ。

二。進行性肺結核症ニ於テハ既ニ其病症ノ初期ヨリ血球沈降速度早シ。

三。潛伏性肺結核患者ニ於テハ其赤血球沈降速度、健康者ヨリモ速カナリ。

四。肺結核症ニ於テ若シ病症ノ良經過ヲ呈セル時ハ血球沈降速度促進セシモノ、遲クナルモノ多シ。但シ病症ノ良經過ニ向ヘルニモ拘ラズ沈降速度ニ影響セザル例モアリ。尙、第三期症ノ如キニ於テハ例ヘ一時良經過ヲ見ルモ其血球沈降速度ハ遲クナラズ。

五。肺結核症ニ於テハ發熱アルモノハ無熱ノモノニ比シ血球沈降速度早キモノ多シ。但シ病症ノ進行セルモノニ於テハ熱ノ有熱ニ拘ラズ、赤血球沈降速度促進セラル。

六。健康者ニ於ケルガ如ク肺結核症ニ於テモ、女子ハ男子ヨリモ血球沈降速度促進セルモノ多シ、但シ病症著シク進行セルモノニ於テハ兩者餘リニ其差異ヲ認メザル事多シ。

七。三十分以內ニ於テ血漿柱ノ高サ二糎以上ニ達スルモノハ男女共ニ病症ノ進行セル事ヲ意味セルモノナリ。

八。肋膜炎ニ於テハ乾性、濕性肋膜炎共ニ其血球沈降速度增進スルモノナルモ、若シ炎症ノ消退スル時ハ又沈降速度モ鈍クナルモノ多シ。

九。肺結核症ニ於テピルケー反應强陽性ヲ呈スルモノ、血球沈降速度ハ鈍シ。ピルケー反應、陽性度ヲ減少スルニ從ヒ

血球沈降速度ハ促進セラル。ピルケー氏反應陰性ヲ呈スルモノハ赤血球沈降速度ハ著シク增進セルモノ多シ。

一〇。肺結核症ニ於テ、「ヂアツオ」反應、「ウロクロモーゲン」反應共ニ陽性ヲ呈スルモノハ赤血球沈降速度ハ著シク促進セリ。但シ血球沈降速度促進セルモノ必ズシモ、「ヂアツオ」反應、「ウロクロモーゲン」反應陽性ヲ呈スルモノニハアラザルナリ。

第七ニ對スル附議

渡邊三郎

赤血球沈降速度ノ判定ニ於テ、時間的ニ如何ナル點ヲトルカハ問題デアリマス、我等モ赤血球沈降速度ヲ肺結核患者ノ多數ニ於テ測リ、其ノ結果ヲ曲線ニシテ見マスト、初メ五乃至十分ニ於テハ遲ク、ソレヨリ三十分迄ハ非常ニ早ク、三十分ヨリ一時間ニ於テ再ビ遲クナリマス、三十分ノ點ニ於テ差異ガ著明デアルモノガ一時間ノ點ニ於テハ相接近シマスカラ若シコノ點ヲ以テ判斷スレバ兩方同一ナル値ニ見ラレマス。カヽル場合ニ三十分ノ點ヲ顧ミテソノモノヽ間ニ差ヲ見出ス事ガ出來マス、カヽル關係上三十分ト一時間ノ二點ヲ判斷ノ點トスルヲ好都合ダロウト考ヘマス。（自抄）

特別講演（一）

小兒結核ニ對スル施設ニ就キテ

佐藤秀三

演者ハ緒論トシテ救濟事業ト慈善事業トノ別ヨリ說キ、各自生キム爲メノ努力トシテ社會救濟ノ實ヲ擧ゲザルベカラズ

結核豫防ノ事ハ社會救濟事業ノ中最モ重要ナルモノニシテ、就中小兒結核ノ豫防ハ結核豫防事業中ニモ主要ナル地位ヲ占ムベキヲ論ジ、尚小兒ノ結核豫防ニハ結核診療所相談所巡回看護婦制度ノ設置ヲ前提トナス故ヲ以テ速ニ是等ノ施設ノ普及センコトヲ希望シ。

次イデ基礎的考察トシテ、小兒結核ノ發生機轉ヲ論ジ、小兒ノ結核比較的多數ナルコト、小兒結核ノ大人結核ニ比シ經過ノ急性ナルコト、豫後ノ極メテ不良ナルコトヲ述べ、小兒ノ結核ノ發生ハ結核病母ニヨリテ哺育セラレタル時ニ於テ傳染ニヨルモノ最モ多キヲ占メ、開放性ノ結核母ト非開放性ノモノトノ乳兒ヘノ傳染率ノ比較ヲナシ、後者ノ傳染例ノ皆無ナルニ反シ前者ニ於テハ八〇%以上罹病セル事例ヲ表ヲ以テ示シ、尚牛乳ノ小兒結核發生ノ根源トナルコトノ比較的少ナキコトヲ併セ述べ、斯クシテ日常見ル結核家族ヲ生ズルハ、勿論結核病症ノ遺傳ニヨルモノニモアラズ、尚舊來信ゼラレシ、結核症ニ感受性强キ體質遺傳モ所謂肺癆性體質ナルモノハ現今ノ結核ニ對スル見地ヨリスレバ寧ロ潛伏性結核ヲ有スル幼兒ノ發育狀態ト看做スベキモノ多ク、主トシテ母子乃至父子間ノ傳染ニヨルベキヲ力說シテ、乳兒幼兒ノ結核處女體ニ對スル結核豫防ノ本義ハ傳染徑路ノ遮斷ヲ以テセザルベカラザルヲ論ジ、就學兒童ニ近キ比較的生長セル小兒ノ結核豫防トハ全ク道ヲ異ニスベキヲ述べテ考案ヲ終ヘ、

次イデ小兒結核ニ對スル施設ノ細ニ入リ施設ヲ大別シテ乳兒幼兒ノ結核豫防ト就學兒童豫防ノ二トナシ、乳兒幼兒ノ豫防法トシテハ家庭ニ於テハ母子ノ接觸ニ注意ヲナシ、母若シ開放性結核症ヲ有セバ、乳母依托養育、里子等ノ方法ヲ以テ母子間ノ隔離ヲ企テ、止ムヲ得ザル時ハ「マスク」、消毒衣使用等ノ注意ヲ希望シ、是等ノ敎育ニハ巡回看護婦ノ力擧ツテ效アルベキヲ述べ、社會的救濟施設トシテハ極メテ幼弱ナル乳兒ノ隔離保育ニハ特別ノ設備ヲ有スル乳兒ノ依托保育ヲ實行スルモノヲ造リ、稍〻生長シテ比較的育テ易キ齡ニ達セバ、之レヲ或ハ集合的幼兒隔離保育所ニ或ハ散在的ニ田園健康家庭ニ依托保育セシムルノ方法ヲトルヲヨシトスベク、幼兒ノ健康保持、道德的竝ニ感情的敎育ニハ後者ヲ選ブベキヲ論ジ、佛國グランシェ氏事業ノ例ヲ示シ、之レニ依レバ二十年間、二千五百名ノ幼兒ヲ田園ノ家庭ニ依托保育セシメタル結果、病母ノ哺育ニ委セバ六〇%ノ罹病率四〇%ノ死亡率ヲ幼兒ニ見ルモノガ、〇・三%ノ罹病率〇・一%ノ

死亡率ヲ依托兒童ニ見タルニ過ギザル好成績ヲ得タリト報告シ、此ノ種ノ事業ノ我邦ニモ實施セラレンコトヲ希望シ。尙就學兒童ニハ所謂虛弱兒童ノ保健ト敎育ノ併施ハ豫防ノ眼目ニシテ、之レガ爲メニハ小兒療養所、林間學校、田園學校、海岸學校ノ施設ヲ完備スベク、又短期ノ保健ヲ目的トスル休暇療養團ノ如キ施設モ必要トスベキヲ論ジ。結論トシテ舊來信ゼラレタル體質遺傳ノ說ヲ過重視スルコトナク、結核病親ノ子タリトモ之レヲ隔離保育スレバ健全ナル兒童乃至成年ヲ得ベキ自信ヲ以テ豫防ノ施設ノ實行セラレンコトヲ希望シテ講演ヲ終ヘタリ。（自抄）

第八、喀血ニ就イテ

醫學博士　楢林兵三郎

演者ハ主トシテ肺結核症ニ於ケル喀血ノ所置ニ對シ古來ノ文獻ヲ批判シ、氏ノ經驗上ヨリ眞ニ有效ト認メラレタルモノトシテ「エメチン」ノ皮下注射、「アナプトールゲラチン」ノ靜脈內注射等ヲ擧ゲ、更ニ大喀血ニ由ル窒息死ノ急救療法ニ關シ氏ガ最近實行シ而モ非常ノ良效果ヲ得タル症例ヲ報告セリ、ソハ卽チ窒息嬰兒蘇生法ニ於ケルガ如ク患者ノ頭部ヲ下位ニ吊リ下ゲ前後ニ振動スルニアリト。（自抄）

（氣管內閉塞凝血供覽、太サ指頭大、長サ二四・〇糎）。

第九、結核患者ノ月經ニ關スル統計的觀察

東京市療養所　佐々虎雄

演者ハ東京市療養所婦人患者三五七名ノ月經ニ就テ調査シ左ノ點ニ關シ統計的觀察ヲナシタリ。

(1)三五七名中十三歳以上ニシテ尚月經ヲ見ザル者四九名アリ。

(2)初潮年齢ハ最低十三歳、最高二十歳ニシテ平均年齢ハ一五・八五歳トナリ、各期患者ニ就テハ一期患者一五・九三歳、二期患者一六歳、三期患者一五・七三歳ニシテ、コレヲ健康婦人一三五名ノ平均初潮年齢一六・一四歳ト比スルニ三期患者及全患者ノ平均年齢ハ稍〻少ナキヤウナレドモ、A. Scherer 氏ノ統計ニアラハレタルガ如キ者ハ健康者及患者ノ間ニ於テハ認メズ、唯患者ニ於テ十三歳及十四歳ニテ初潮ヲ見シ者ヨリ多キ傾キアリ。

(3)家族的ニ結核素質ヲ有セル患者五五名ノ初潮年齢平均ハ一五・八歳ニシテ、前記健康者ニ比シ僅カニ少ナキヤウナレドコレモ Scherer ノ如キ甚シキ差ヲ認メズ。

(4)豫後不良(死亡)ノ患者一一六名ノ平均初潮年齢ハ一五・九歳ニシテ、豫後可良ノ患者五九名ニ於テハ一五・六歳ナリコレハ Scherer 氏ノ統計トハ反對ノ結果ヲ示ス。

(5)無月經ハ三期患者ホド其ノ例多キハ當然ノ事ナルベシ。

(6)コノ外月經過多モ結核ノ惡徵ト云ハレオルモ余ノ患者ニ於テハ一例モナカリキ。(自抄)

第十、肺結核患者ノ尿中ニ現ハル、糖及ビ蛋白ニ就テ(第一回報告)

東京市療養所(所長　田澤博士)
寺尾殿治

東京市療養所ニ於テ普通糖尿ヲ起ス病狀ナキ肺結核患者男子三五一名、女子八九名ノ早朝第一回尿、及ビ朝食後二時間目ノ尿ニ就キ、ベ子ディクト氏試驗法ニヨリ尿中ノ糖ヲ檢査シ、ツルバン、ゲルハルト氏分類法ニ從ヒ各患者ヲ區別シテ尿糖出現ノ率ヲ見タリ。之ニヨレバ、四四〇名中五一名卽、一一・六%ニ糖陽性ナルヲ見第一期患者一一九名中六名、

卽五・〇％第二期八三名中七名、卽八・四％第三期二三八名中三八名、卽一五・九％ニ糖陽性ナルヲ見タリ。又之ヲ熱度ト比較シテ便宜上三七度以下八一名中七名卽八・六％、三七度五分以下一二八名中七名卽五・五％、三八度以下七〇名中一〇名卽一四・二％、三八度五分以下六五名中一二名卽一八・四％、其以上四四名中八名卽一八・一％ノ率ヲ示セリ、各期ヲ通ジテ男子三〇七名中三四名、卽一一・一％、女八一名中一〇名卽一二・三％ノ糖陽性ヲ見タリ。

尿中蛋白ヲ檢査セシハ男子三三四名ニシテ二〇％ノ「ズルフォザリチール」酸ヲ以テ檢定シ陽性ノモノハ總テ檢鏡セリ男子三三四名中一六〇名卽四八％ニ蛋白尿ヲ見、內蛋白ノミノモノ六五名卽一九・四％、圓柱尿四五名卽一三・四％、細胞類八二名卽チ二四・五％ヲ示シ、且ツ各病期ニ就キソノ率ハ次第ニ增加セルヲ見タリ。熱度ト蛋白尿トニ關スル成績ヲ見ルニ、前記熱度分類ニヨリ二四・五％、三六・二％、五〇％、五八・五％、六五・七％ノ率ヲ得タリ之ヲ要スルニ

(一)我國ノ結核患者ニ對シテ尿中糖ノ出現スル事ヲ見ントセル余ノ試驗成績ハ陽性一一・六％トナレリ。

(二)肺結核患者ノ尿中ニ糖ノ現ハル、率ハ病熱進行スルト共ニ高マルモノナリ。

(三)熱度ヨリ之ヲ見ルニ各期ヲ通ジテ大體輕熱ヨリ中等度高熱トナルニ從ヒ糖排泄ノ率多クナルモノトスベシ。

(四)男女間ニ於テハ糖排泄ニ僅少ノ差違ヲ生ゼシモ、コハ比較總數ニ著シキ差アルタメニシテ、實際ハ特ニ差異ナキモノ、如シ。

(五)肺結核患者ノ尿中約半數ハ蛋白アリ。

(六)尿中ニ現ハル、圓柱ハ硝子樣圓柱ヲ最多トシ、少數ニ顆粒圓柱稀ニ上皮圓柱ヲ見ルモ、何レモソノ數ハ少數ナリ。

(七)尿中ニ現ハル、細胞類中赤血球ノ混ゼル場合多シ。

(八)肺結核患者ノ病勢進行ト共ニ蛋白尿ノ率ハ增加ス。

(九)肺結核患者ノ蛋白尿ノ率ハ熱ノ上昇スルト共ニ著シク增加セリ。

(一〇)肺結核患者ノ尿中ニ糖及ビ蛋白質ノ出現スルハ固ヨリ豫後ニ惡影響アルベキモ、ソハ上記ノ病期別熱度別ノ觀察

ヨリモ推定スルコトヲ得。（自抄）

第十一、肺結核患者ノ血清ノウィダール氏反應ニ就テ（第一回報告）

東京市療養所
佐々虎雄
鈴木左内

昨年大震災後災害地ニ於テ各種傳染病ノ流行ヲ來セシ際、吾ガ東京市療養所ニ於テハ肺結核ニ「チフス」合併セルモノ、又ハ「チフス」ニ氣管枝「カタル」併發セルタメ肺結核ト誤診セラレタル者等ノ送院ヲウケシ事再三ニ止マラザリシ故ニ、疑ヒアル患者ニ於テハ其ノ血清ニヨリウィダール氏反應試驗ヲ行フコトニツトメタリ。

シカルニ現在「チフス」ニアラザル肺結核患者血清ニ於テモコノ反應陽性ニアラハル、コト稀レナラズトノ文獻ニ接シタル故ニ、其ノ間ノ關係ヲ鮮明セント欲シ著者等ハ更ニ一般肺結核患者ニ於テ檢索ヲナシ左ノ成績ヲ得タリ。

(1)今日マデノ被檢患者百八十五名中二時間後成績ニ於テ著明ニ百倍以上ノ凝集ヲ起シタルモノ二十二名アリ。

(2)全患者中「チフス」ノ既往症ヲ有スルハ十七名ニシテコノ中前記陽性結果ヲ示シタルハ五名。又嘗テ「チフス」豫防注射ヲウケシ患者ハ十名アリテ其ノ中ニテ五名ガ前記陽性結果ヲ示シタリ。

コレニヨリテ見ルニ前記二十二名中十名ハ「チフス」ノ既往症ヲ有スルカ又ハ既往ニ於テ「チフス」豫防注射ヲウケシ者ナル故、コレニ依リ其ノ陽性結果ヲ示セシ原因ハ說明シ得ルモ殘リ十二名ニ就テハ如何ニ說明スベキカ、勿論「チフス」ニアラザルコト細菌學的ニ認定シ得シモ、シカラバ果シテ文獻ノ如クナルカ又ハ他ニ原因ノ存スルカ。コレ等ニツキテハ前記成績ノミニテハニワカニ斷定シ能ハザルヲ以テ著者等ハ其ノ點ニ關シ今後尙檢索ヲツヾケントス。（自抄）

第十二、結核患者ニ行ヒタル種痘ニ就テ

東京市療養所
熊谷安正
境野賢
高橋進

余等ハ大正十三年一月東京地方ニ天然痘ノ流行アリシ際、東京市療養所收容結核患者六三〇名ニ種痘ヲ施行シタリ、今ソノ成績及臨牀上影響スル所ヲ觀察シテ、結核患者ニモ必要ナル場合ニハ種痘ヲ施行シテ殆ド顧慮スベキ不良ノ影響ヲ見ズ、且ツ末期患者ト雖モヨク善感スル者多數ナルヲ以テ、場合ニヨリテ之ニ種痘ヲ强制スルヲ妨ゲザルモノナリトノ見解ヲ得タリ。（自抄）

特別講演（二）

結核ノ「レントゲン」放射治療

醫學博士　藤浪剛一

結核ノ「レントゲン」治療知識ハ最近ニ到リ漸ク闡明トナリ、「レントゲン」治療ハ結核ノ自然治癒ノ補助機關ニシテ放射ニヨリ其轉機ヲ迅速ナラシムルモ、決シテ結核ニ對スル特殊治療法ニ非ラズ、而シテ局所治療ノミナラズ、全身榮養ニモ注意シ殊ニ放射ノ適應症ヲ嚴守スルコトハ頗ル緊要ノ事項ニシテ苟クモ結核ノ放射治療ニ嚴守スベキ點ナリ、放射量ハ

刺戟量トシ決シテ大量ヲ施スベカラズ。結核ノ「レントゲン」放射治療ニハ微妙ノ點多ク周到ノ注意、經驗ノ豐富、適應ノ選擇ノ如何ニ由リテ成績ノ良否ヲ現スナリ、而シテ一方ニハ日光浴紫外線ヲ兼テ全身榮養ヲ充分ニナスコトハ最モ意義アル補助法ナリ。

肺結核

結核性結節ハ「レントゲン」線ニ對シ感受强キモノナリ、「レントゲン」感受强キ上皮樣細胞ハ刺戟セラレテ結締織化ヲ多カラシム、卽チ「レントゲン」放射治療ハ刺戟治療ナリトハステッワンガ說キシ所ニシテ、フレンケルガ刺戟量(小量)ヲ確定シテ實行セリ、更ニフ氏ハ脾ヲ同時ニ放射シテ全身ノ免疫力ヲ增加シ、全身療法ヲ補ハントセリ。爾來肺結核ヲ「レントゲン」放射セシニ一樣ノ成績ヲ得ザリシハ一ニ其治療適當症ヲ選定セザリシニ原因ス、粟粒性、滲出性ノ病型ニハ之ヲ禁忌ス、混合型ノモノ亦同樣ニ不良ナリ、之ニ反シ硬固性及ビ硬化性ノモノコソ實ニ治療良成績ヲ占ム、モリーノ實驗ハ此適應ヲ誤リタル結果却テ不良トナリシ適例ナリ。

癌腫治療ニ比シ結核治療ニハ一定ノ規準ヲ擧ゲザル程個性及ビ環境ヲ顧ミザル可ラズ。

咽頭及ビ喉頭ノ結核

一般ニ「レントゲン」放射ヲ行フ機會少シ、多クハ一時性ノ治療ヲ求メ得ベキモ根治ノモノニ非ラズ。放射ニ由リ結核性潰瘍ハ瘢痕ヲ形成シ、多少ノ嗄聲ヲ殘ス、喉頭鏡ヲ用ヒテ對照セザル可ラズ。

頸腺結核

バイシュノ分類ニ由ル病型ハ「レントゲン」治療ニモ應用シテ成績ヲ收メ得一般ニ腺ノ增殖性腫大ノモノニハ良好ナリ、乾酪化膿セシモノニハヤヽ不良ナリ。美容上ニ鑑ミテ醜キ瘢痕(萎縮)ヲ作ラザル樣注意スレバ、「レントゲン」放射治療ハ理想的ノ方法ニシテ、好成績ヲ收ム、其他鼠蹊腺、肺門腺ニモ治療效果ヲ收ム。

結核性腹膜炎

慢性ノモノ亞急性ノモノニ治療適應ヲ定ム、但シ體溫ノ昇騰、肺結核ヲ兼有スル場合ハ禁忌ス。一般ニ小量ノ放射ヲ以

テ長時日ニ渉リテ放射スベキモノナリ。往々ニシテ放射ノ副作用ヲ發スルモ一時性ナリ。

骨及關節ノ結核

小兒及ビ年小者ノ結核ハ大人ノモノヨリモ治療成績可良ナリ、混合傳染セシモノニハ容易ニ成績ヲ擧ゲ難キ場合アリ、骨關節ヲ放射スルモ發育障碍ヲ來サズ。小骨又ハ小關節ノモノハ大骨又ハ大關節ヨリモ成績良シ。

腎、睾丸及ビ膀胱ノ結核

睾丸ヲ除キテハ放射應用範圍ガ廣カラズ、最近田村春吉博士ハ腎臓ニ深部放射シテ良成績ヲ收メタリ。泌尿器系ニテハ多クハ症候ノ可良ヲ催スモ根治的ニハ困難ナリ。

皮膚ノ結核

尋常性狼瘡ヲ除クノ他「レントゲン」放射成績ヲ收メ得狼瘡ニハ「フィンゼン」放射ノ豫備放射ニ過ギズ。（自抄）

第十三、ワッセルマン氏結核血清診斷法ニ就テ

神戸市
醫學博士　天兒民惠

從來結核ノ血清診斷法ハ種々アルモ、就中近時注目セラレタルモノハベスレドカ氏ノ卵黄培地ニ培養セシ結核菌ヲ「アンチゲーン」トシタル血清診斷法ナリ、ワッセルマン氏ハベスレドカ其他ノ學者ノ研究ヨリ推究シテ、結核血清ノ「リポイド」嗜好性强キコトニ著目シ、先ヅ結核菌ノ「リポイド」、蠟、脂肪等ヲ除去シ、更ニ新ニ「リポイド」ヲ吸著セシメタル「アンチゲン」ヲ製シ、之レヲ以テ結核血清ニテ補體結合試驗ヲ行ヒ試驗セシニ、ベスレドカ氏「アンチゲーン」ノ如ク微毒ニモ反應ヲ呈スルガ如キコトナク、全ク結核ニ對シ特異ニ反應スルコトヲ確メ、此反應陽性ノ場合ニハ活動性結核ヲ有スルモノナリト斷定スルニ至レリ、此報告ハ非常ノ興味ヲ以テ學界ニ迎ヘラル、ニ至レリ。

ワ氏ハ結核菌ヲ「テトラリン」Tetra-hydriertes Naphtalin ヲ以テ長日月間所置シテ脱脂シ之レニ「レチチン」ヲ吸著セシメタルモノヲ「アンチゲン」トセリ。

余ハワ氏ノ此試驗ニ興味ヲ起シ、獨逸ヨリワ氏「アンチゲン」用ノ「テトラリン」脱脂結核菌ノ分與ヲ受ケ、試驗ヲ行ヒタリ、然レドモワ氏記載ノ如キ多數ノ%ニ於テ陽性ニ現ハレズ、漸ク少數ノ結核患者ニ反應ヲ呈スルニ過ギズ、故ニ余ハ氏ノ法ヲ種々「モヂフヰチーレン」シ「リポイド」吸著ノ時間、溫度、量等ヲ種々變更シテ試驗ヲナセシモ豫期ノ結果ヲ得ズ依テワ氏ノ使用セシ「レチチン」ノ使用ヲ止メ、之レニ代ハルベキ種々ノ「リポイド」ヲ以テ試驗セシニ、結核菌ヲ「アルコホル」ヲ以テ浸出シテ得タル「リポイド」最良好ナルコトヲ認メタリ、此「リポイド」ヲワッセルマンノ方法ヲ以テワ氏「テトラリン」脱脂菌ニ吸著セシメタルモノヲ「アンチゲーン」トシテ結核患者血清ヲ以テ補體結合試驗ヲ試ミルニ、殆ンドワ氏ノ記載ト同樣ノ成績ヲ得タリ、即四十八名ノ肺結核患者血清中陽性三十九名(八一%)ノ成績ヲ得タリ。

黴毒反應トノ鑑別。結核「アンチゲーン」ハ結核ニ對シテ補體結合ヲ現ハスト同時ニ黴毒ニ對シテモ結合ヲ現ハス場合屢アリ、殊ニベスレドカノ「アンチゲーン」ノ如キ多量ノ卵黄「リポイド」ヲ含有セルモノハ黴毒ニ對シ同樣ニ反應ヲ呈シ結核トノ鑑別ヲ困難ナラシム、ワ氏ノ方法ハベ氏ノ缺點ヲ除キタル結核特異反應ナリト稱セルモ、尚少數ニ於テ黴毒ニモ反應ヲ呈ス、余ハ之ヲ鑑別セント欲シ種々ノ試驗ヲ經タルガワ氏脱脂菌ノ結核「アンチケルペル」吸收作用ヲ利用スルヲ便利ナリト考ヘ、之レニヨリ結核「アンチケルペル」ヲ先ヅ結核血清ヨリ除ケバ殘餘ノ血清ハ最早ワ氏脱脂菌ニ對シ補體結合作用ヲ失フニ至ルヲ以テ、此モノヲ以テ結核、黴毒兩方ノ試驗ヲ行フニ、初メ兩者共陽性ナリシモノ後ニハ黴毒ニノミ陽性トナルヲ認メタリ、之レヨリ兩者ノ鑑別ヲナスヲ得ベシ、尚多數ノ實驗ヲ經タル上重子テ報告スベシ。

(自抄)

第十四、結核治療ニ就テノ小實驗

石神研究所
醫學博士　松田　毅

一、結核ヲ豫防シ又ハ治療スルニ免疫ノ必要ナルハ既知ノ事ナルモ事實ニ於テ確實ナルシカモ「コンスタント」ノ成績ニ達セルモ少ナキガ如シ。

一、ソレハ結核免疫ナルモノハ元來困難ナルモノニシテソウ容易ニ出來ルモノデナイカラデアル、例之「ツベルクリン」ヲ注射スレバ抗「ツベルクリン」ヲ發生シ又ハ其他ノ「バルチアル、アンチゲン」ニテ前處置ヲ施セバ部分的ニ免疫ヲ發生スルケレドモ遂ニ結核病ヲ豫防シ又ハ治療スルノ完全免疫ニ達セナイノデアル、間々完全免疫ノ發生ヲ報告セルモノナキニ非ルモ人多クハ之ヲ信ゼザルヲ常トス、最近ニテハ結核免疫ヲ確實ニ且ツ有效的ニ發生セシメンニハ必ズヤ菌シカモ生菌ガ體中ニ存在スルヲ必要トスルニ至ツタ、或ハ存在スル丈ケニテハ尙ホ不充分ナリ宜シク結核病竈ヲ作ラザル可ラズト爲ス迄ニ進メテ來タノデアル。

一、右ノ樣ナ場合ニ今カラ十年前自分ハ一ツノ考案ヲ立テタ、ソレハ安靜療養ガ肺結核療養ニ必要ナル所以ヲ考ヘテ立案シタモノデ、安靜ニ依リ運動止ム時ナキ肺臟心臟等ヲ平穩ニ保ツ許リデナク、結核病竈ヨリ流出シ來ル結核毒素ヲ平穩ニ血流ヲ通ジテ分配スルノ結果トシテ組織ハ毒ノ爲メニ苦シメラル、ヨリモ却テ免疫スルニ良好ナル狀況トナルノデアル、卽チ此自然ガ示シテ居ル所ニ依レバ患者ガ所有シテ居ル處ノ結核毒ヲ以テ免疫スルノガ最良ノ免疫方法デアル如ク見ユル、況ンヤ結核ニ罹ツテ居ル人又ハ動物體中ニハ既ニ多數ノ生活結核菌ガ居テ病竈ヲ作ツタリ又ハ血流中ヲ流レタリシテ居ルノニ、更ラニ生菌ヲ人工的ニ注入スルト云フコトハ其分量ニ於テ又其方法ニ於テ困難ナ譯デアルカラ寧ロ患者ノ所有スル生結核菌ソノモノヲ免疫原トシテ使用スルノ方法ヲ最自然トナスト云フノデアル。

又タ一方ニハ生菌同樣ノ死菌ガ或取扱ヒ方法ニテ得ラル、カモ知レナイ、若シ然ラバ之ヲ使用シテ免疫ヲ得ルコトハ理想的デアル。

一、此目的ヲ以テ先ヅ藥物方面ニ向ヒテ得タノガ大正五年ニ報告シタ沃度「チアン」及ビ沃度「ビルリビン」ノ二劑デアルコノ二劑ハ動物試驗ニテ大ニ目的ニ副フ處ノ性質ヲ持ツテ居ルケレドモ、甲ハ毒性强烈ナル爲メニ乙ハ分解シ易キ性質アル爲メニ人體ニ應用スルコト少クシテ止ミタリ。

一、次ニ今度ハ出來ル丈ケ自然ニ近イ方法ニテ患者體中ノ結核菌ヲ殺シタリ又ハ減毒シタリスルコトノ出來ル物質ヲ得タイト思ツテ立案實行シタノガ今回ノ報告デアツテ、ソノ考ヘト云フノハコウデアル。卽チ結核菌體中ニハ平素カラ互ニ結合狀態ニテ或種ノモノガアル。之ヲ或ル方法ニテ分離スレバ其物ハ再ビ結核菌ニ出逢フテ或ハ之ヲ殺シ又ハ減毒スル作用ガアルノデアルマイカ。

一、コノ目的ノ爲メニ結核菌培養ヲ乾燥シ空氣ヲ遮斷シタル裝置ニテ種々ノ溫度ヲ作用セシメ大別二種ノ或物ヲ得タリ。

(甲)ハ微ニ溷濁アル液狀體ニシテ水及ビ油類ニ溶解シ。

(乙)ハ「テール」狀ニシテ油類ニノミ溶解ス。

一、本劑ハ大體左ノ如キ性質ヲ有ス。

(イ)微ニ「アルカリ」性ヲ有シ家兎及ビ「モルモット」ニ有毒作用ナク、皮下又ハ靜脈注射ニ役立ツ。

(ロ)之ヲ「ツベルクリン」ト混合シ結核動物ニ注射スルニ「ツベルクリン」毒ヲ中和スルノ作用アリ。

(ハ)本劑ヲ結核菌ニ觸接セシムルニ形態的ニ變化ヲ認メザル短時間ニテ殺菌ス(動物試驗及ビ培養試驗)。

コノ殺菌サレタル結核菌ヲ家兎又ハ「モルモット」ノ腹腔ニ注射スルニ始メ稍〻膨大シ漸次溶解スルヲ見ル。

(ニ)本劑ヲ直接結核潰瘍ニ塗布スルニ其治效アルヲ目擊セラル、喉頭結核ノ浸潤又ハ結節ヘ直接塗布スルニ腫脹減退、疼痛緩解、聲音嗄嗄恢復ノ效果アリ。

(ホ)本劑ヲ結核動物ニ注射スルニ好ンデ結核病竈ヘ沈著滯在ス。

(ヘ)家兎又ハ「モルモット」ニ本劑ヲ前注射シテ然ル後ニ生菌ヲ送ルカ又ハ反對ニ之ヲ行フ中ニ豫防又ハ發育制止ノ效アリ、又結核動物ニ注射シテ其動物臟器中ノ結核菌ガ死滅セリヤヲ檢スルニ一頓ニ大量ノ結核菌ガ死セリトハ證明シガタキモ其目的丈ケハ達シ居ルヲ見ル。

一、但シ本劑ハ油ニノミ溶解スル部分モアルヲ以テ之ハ油類ニ溶カシ注射(皮下又ハ靜脈)スルコトヽナル、故ニ又タ結核ノ油療法トモ稱シ得ベシ。

油劑ノ皮下注射ハ人體ニ應用シテ效力アルヲ認メタレドモ之ガ靜脈注射ハ未ダ人體ニ行ハズ、動物ニテハ「プロキロ」〇・二倍迄ニ安全ナレドモ既ニ「プロキロ」〇・五ハ危險ナリ。

一、本日迄人體ニ應用シタルハ水ニ溶解スル部分ト油ニ溶解スル部分トニテ多クハ皮下注射ニテ效力アルヲ見ル。

(自抄)

第十五、「AO」治驗ノ統計的觀察

大阪市立刀根山療養所
太繩壽郎

大阪市立刀根山療養所開所以來七ケ年ノ年報上ニ見タル患者ノ轉歸ニ就キ調査シタルニ、「AO」ヲ治療上ニ使用シタル第四年以後ニ於テ急ニ治療成績ノ佳良ニ赴クコトノ結果ヲ得タリ。卽チ第四年以後ニ入所セシ患者ハ其ノ以前ニ比シ、第一期患者ハ僅ニ增加シ第二期患者ハ減少シ第三期患者增加シ、條件不良ノ傾向アルニ拘ハラズ第四年以後ハ治癒退所率增加シ死亡率減少シ、中途任意退所率降下シ、且ツ次年ニ遺殘患者率著シク增加シ、治癒成績ノ向上ヲ見ルハ、勿論他ニ歸因スルコトアルベシト雖亦「AO」活動ノ一端ヲ窺ハルヽモノト信ズルナリ。

第十六、「AO」治療應用ノ體重ニ對スル影響

大阪市立刀根山療養所
辻川健次

大阪市立刀根山療養所收容患者ニツキテソノ體重ノ增加ヲ統計的ニ觀察セシニ、全部ニ亙リAO治療ヲ施セル大正十三年三月末日在所者ニ於テソノ體重增加ノ割合（全患者數ニ對スル體重增加患者數ノ比及ビ各患者ノ體重增加ノ速サ）ハ、之ヲ毫モAO治療ヲ施行セザリシ大正八年三月末在所者ニ比シテ著明ニ良好ナルヲ見タリ。

第十七、肺結核ノ熱ニ對スル「AO」ノ影響

大阪市立刀根山療養所
エル、フデセック

演者ハ結核患者ニ「AO」ノ注射ヲ試ミタル成績ニ就テ曰ク、其治療的效果ハ殊ニ初期患者ニ於テ著シク、食慾ノ昂進、體重ノ增加、解熱作用及病竈ノ縮小乃至消失ヲ見ルト、而シテ其解熱ノ狀況ニツキテハ興味アル溫度表ヲ種々示說スル處アリタリ。

第十八、興味アル「A、O」治驗二例

大阪市立刀根山療養所
辻川健次

顏面播種狀粟粒性狼瘡ノ「AO」注射ニヨリ治癒セル一例ト、泌尿器結核症ノ「AO」注射ニヨリ發熱ニ對シテ良好ナル又尿頻數ニ對シテモ幾分良好ト思ハル、影響ヲ認メシモ、患者(○十九年)ノ不攝生ニヨリテ持久的ノ良好ナル狀態ヲ來スヲ得ザリシト考フベキ一例トヲ報告セリ。

第十九、「AO」治驗拾遺

大阪市立刀根山療養所長
醫學博士　有馬賴吉

『AO』ヲ治療上ニ應用シテ起リ來ル現象ニ就テハ既ニ記載シタモノ、外其後ノ經驗ニヨリテ大約次ニ揭グル如キコトニナルト思フ。

『AO』治療的接種ニ由テ起ル諸象

一、一過性現象。
　一、早發反應。
　　イ、接種部ノ炎衝。
　　ロ、全身反應、稀ニ竈反應。
　　ハ、急解熱。
　　ニ、精神爽快。
　二、晩發反應。
　　イ、接種部ノ硬結(化膿若クハ潰瘍形成)。
二、持續性現象。

一、早發反應。

イ、病竈ノ消失(水泡音、痰、刺戟性咳嗽、眼、粘膜、皮膚等ノ結核性炎症及病變ノ減退及ビ消失)。

ロ、持續的精神爽快。

二、晩發反應。

イ、解熱。

ロ、皮膚過敏性ノ增强ト發現。

ハ、食慾增進、體重增加。

ニ、精神爽快。

ホ、病變ノ縮小及ヒ消失(腺、肺病竈ノ縮小消失、痰ノ減少消失、レ線ノ改善等)。

以上ノ現象ノ由來ニ關スル理論ハ全般ノ免疫現象ノ理論ガ充分明カデハナイト等シク亦明カデハナイガ、

一、生物學的臨牀的現象　トシテ、

イ、細胞原形質振興作用　ト言表ハシタラバ最モ都合好ク思ハレル、卽チ之ヲ免疫增强ト看ルナラバソレニモ當リ隱匿サレテアツタ免疫性ガ誘發サレルヤウニモ見エルコトガアル。

ロ、特殊誘導作用　表中ニ出タ早發反應ノ大部分ハ之ニ由テ生スルモノ、若クハ之ヲ發生セシムルモノデアルラシイ。

ハ、皮膚過敏性ノ增强ト發現　此現象ハ之ヲ直チニ免疫反應ト見ルカ、免疫ノ隨伴現像ト見ルカハ議論ノアル所デアリ、之ノ生ズルコトガ其生體ニ取リテ利益デアルヤ否ヤサヘ未ダ判然シナイモノデハアルガ、兎ニ角面白イ現象デハアル。

二、病理解剖學的現象　デアルガ、之ハ、

病竈ノ消炎(稀ニハ一過性ニ炎症ヲ增スコトガアルガ)ガ主ナルモノデアツテ、前表ニ揭ゲタ人體ニ好都合ナ諸種ノ現象

ハ殆ンド皆ナ此病竈ノ消炎作用アルニ由テ生スルモノデアルト言ツテ差支ナイホドデアル。此消炎ニ次デ色々善性ノ組織反應ヲ起シ來ルモノデアロウガ、ソレハ今後ニ確カナ研究ヲナス積デアル。

茲ニ一言附加シテオキタイコトハ、『AO』ニ由ル消炎作用ノ結果トシテ病竈ニ分界線ヲ生ズルコトアリヤ否ヤデアル。炎性病竈ニ分界線ヲ生スルコトハ內臟殊ニ肺以外ノ體部デハ最モ喜ブベキ經過デアルガ、肺ニ在テハ必スシモ喜ブベキ結果ヲ生スルト限ラズ、事ニヨレバ多少ノ危險ヲ生スルコト無シトモ言ハレナイコトデアツテ、將來ハ此點ニモ大ニ注意シタイト思ツテ居ル。（自抄）

第十五乃至第十九ニ對スル附議

一、

醫學博士　近藤乾郎

肺結核ヲ治療スルニ當リ體重ノ增加ハ大ニ喜ブベキ現象ノ一ツデアル、而シ極端ナル體重ノ增加ハ時ニ本患者ノ下熱セザル唯一ノ原因デアルコトガアル、加之茲ニ尤モ注意ス可キハ糖尿病ヲ起サシムルコトノアルコトデアル。次ノ二例ハ何レモ初期ノ肺結核デ一名ハ喀痰中菌陽性ノ患者デアリ約一年半ノ間ニ兩者共體重約二貫目ヲ增加シ肺結核ノ症候ハ自他的ニ全ク消失セルノデアルガ、兩人共尿中ニ糖ヲ證明セル故、私ノ病院ノ心腎科ノ久野義麿博士ニ精細ナル血糖ノ檢査ヲ願フタトコロ左ニ示ス如ク二人共眞正糖尿病ナルコトガ判明シタ、今ソノ重要ナル部分ノミヲ示スト。

一　[redacted]某（男）二十七歳。

診斷　左肺尖加答兒及右輕症乾性肋膜炎、結核菌陰性。

朝食前血糖＝0.060％　尿中糖＝（－）

試驗食後一時間血糖＝0.245％　同　＝（＋）1.56％

同　一時間半＝0.243％　同　＝(＋)2.27％

一　[redacted]某(男)三十二歳。

診斷　左上部加答兒及右陳舊性肺尖浸潤及貧血結核菌陽性。

朝食前血糖＝0.070％　尿中糖＝(－)

試驗食後一時間血糖＝0.192％　同　＝(＋)1.25％

二、

醫學博士　渡邊義政

辻川君ノ御話シデハ「AO」ハ生テ居ル結核菌「ワクチン」トノ事デスガ、實際人ニ使ッタ當時菌ガイキテ居リシカ死ンデ居リシカヲ伺ヒ度イ。

三、

醫學博士　近藤乾郎

合計三十三例ノ患者ニ就テ今日迄ノ余ノ實驗ニ由レバ本劑注射ハ反應ヲシテ多少ノ發熱アル外、本劑ガ確實ニ解熱的作用アリタルヲ認ムル一例ニダモ相遇セシコト無シ、但シ中等症ニシテ長期間有熱ノ某婦人患者ニ「AO」第二號ヲ注射シ翌日ヨリ解熱シタルコトアルモ、一週間後第三號ヲ用ヰタルニ忽チ發熱シ其後以前ノ有熱狀態トナリ加之一時消失セル水泡音再發シ來リ其後ノ經過佳良ナラズ困難シ居レリ。今日迄長クテモ八十日間短カキハ三週間ノ此短時日ノ間ニ、本病ノ如キ治療ノ效果ヲ云々スルニ困難ナル疾患ニ對シ「AO」ノ治療ノ效果如何ヲ云々スルニハ非ラザルモ、今日迄自分ガ試用シタ成績ノ大體ノミヲ公表シ置ク事ハ決シテ無用ノコトデナイト信ズル、卽チ自分ハ外來二十二名入院十一名合計三十三名ノ重輕症者ニ就テ本劑ヲ試用シタノデアルガ、外來デ極ク輕症ノ患者ニノミ多少滿足ノ結果ヲ得タカノ感アッタ外ハ比較的重病患者ニ對シテハ寧ロ惡シキ結果ヲ得タ。卽チ一名ノ餘後佳良ヲ信ゼシ結核性腹膜炎患者ノ既ニ他ノ療法ニ因リ解熱佳良ニ向ヒシ者ニ本劑ヲ試ミタルニ、腹膜ニ刺戟症狀ヲ發シ發熱嘔氣嘔吐劇シキ腹痛ヲ發シ再ビ腹水ヲ生ジ

來リ腸狹窄症樣症狀ヲ發シ來リ、外科ノ近藤博士モ腸狹窄トノ診斷ナリシ故大學ヘ入院セシメタルモ手術ヲ行ハズシテ腹痛消失、再ビ余ノ病院ニ入院目下治療中其後經過良好治癒ノ見込ナルモ本劑ガ腹膜ニ一定ノ刺戟ヲ與ヘタルハ事實ナルガ如シ。其他ノ一例ハ右肺尖浸潤後輕度同側ノ肋膜炎ニテ時々輕度ノ腹痛ヲ訴ヘ居レル患者ニテ解熱一般症候佳良トナリタル後患者ノ望ミニ因リ本劑ヲ試用セルニ、數日後腹膜炎ノ症候ヲ發シ次デ原因不明ノ腸出血ヲ來タシ出血ハ一定ノ處置ニ因リ治シタルモ其後腹水益〻增加シ定型的腹膜炎ノ症候著明トナリ遂ニ鬼籍ニ登リマシタ。第三例ハ左上部ニ加答兒兼浸潤ヲ有スル患者ニシテ注射二回後ヨリ發熱咳嗽增加シ同時ニ食機不良惡心嘔吐不眠等起リ之レ等症候容易ニ消失シ難ク全身症狀モ不良トナリ非常ノ困難ヲ感ジタリ。第四例ハ三回ノ注射迄寧ロ良好ノ經過ナリシニ第三回注射後急ニ病機增惡シ一時危篤ニ陷リタル後恢復シ來レルモ目下モ可良ナラズ。其他輕症ノ喀血ヲ有スル青年患者ニテ注射二回共輕度ノ盲腸炎ノ症狀ヲ呈セシ者モアリタリ。ソレヲ要スルニ注射後食機不良嘔心嘔吐下痢腹痛等胃腸ノ症候ヲ發シタ例此外數例アリタリ。又喀痰中血液ヲ混ズル患者又血痰無キ患者ニモ注射後血痰ヲ見タル者十例ヲ數ヘタリ、故ニ胃腸症候アルモノ喀血ノ傾向アル患者ニ本劑ノ試用ハ特ニ注意ヲ要ス、又咳嗽ニ對シテハ外來一例ニ於テ好結果アリタルガ如キモ、一名ノ外來一名ノ入院者ニハ寧ロ惡影響アルヲ見タリ。體重ニ一名確實ニ增加セシ外著變ヲ認メズ。水泡音ニ對シテハ確實ナル影響ヲ認ムルコトヲ得ズ。一般狀態體重增加ヲ認メタル患者一名ニノミ佳良ヲ認メタル外著變ヲ認メズ但シ一例ノ寒性膿瘍ヲ有シ種々ノ治療ニ抵抗シ困難ナリシ者本劑ノ試用ニ因リ分泌物頓ニ減少濃厚トナリ好結果ヲ得タル感アルハ大ニ注意ス可キ價値アリト信ズ。

要スルニ本劑ノ使用ハ無危險ト稱スルコトヲ得ザル可ク其使用法、使用量等今後大ニ改善研究ヲ要ス可キモノト信ズ。

四、

一、近藤君ノ討論ニ對シテハ謹デオ禮ヲ申シマス。

醫學博士　有馬賴吉

二、渡邊君ノ質問「AO」中ニ生キタル結核菌アリヤ否ヤハ既ニ屢〻言明シタル如ク繁殖性ヲ有スル生菌ガソノ中ニ含マレテアリマス。ガ併シ、菌全部ガ生キテ繁殖性ヲ有ツテ居ルコトハアリ得ナイコトデスカラ、其一部分若クハ大部分ガ繁殖性ヲ失ツテ居ルヤモ知レズ、但シ菌體成分卽チ免疫元トシテノ菌蛋白體ハ其自然性ヲ保チテ其中ニ含マレアルモノト思ヒ、私共ノ重キヲ置ク點ハ菌ノ繁殖性ノ有無ニ在ラズシテ、菌蛋白體ノ自然性ヲ損ハザルニ在ルノデアリマス。

（自抄）

第二十、結核ノ化學的療法ノ研究

大阪　岩佐大治郎

曩ニ余ハ結核羅患「モルモット」ニ銅劑ヲ皮下ニ注射シ銅劑ノ結核ニ對スル治療的效果ノ有無ヲ試驗シ其ノ成績ヲ發表セリ。更ニ進ンデ銅劑ヲ結核羅患動物ノ血管內ニ注射シテ其ノ治療的效果ヲ試驗セント欲シ家兎ヲ用ヒテ豫メ其ノ睾丸ノ實質內ニ結核菌乳劑ヲ注射シ三週間ヲ經過シタル時治療ヲ開始シ、一年一ケ月內外ニ亙リ每週一回宛銅劑ヲ家兎ノ耳靜脈內ニ注射セリ。而シテ對照動物ノ內二頭ハ早期ニ於テ結核ノ爲メ斃死シタレドモ他ノ試驗動物ハ何レモ撲殺スル迄生存シ、且ツ對照動物ノ三頭ヲ除ク以外ノ動物ハ著シキ體重ヲ增加シ治療試驗動物ト對照試驗動物トノ間ニ體重ニ關シテハ著シキ差違ヲ認ムル能ハザリキ。然ルニ此等ノ試驗動物ヲ撲殺シテ結核病變ノ程度ヲ比較スルニ及ンデ對照試驗動物ト銅劑ヲ以テ治療シタル試驗動物トノ間ニ著明ナル病變ノ差ヲ檢出セリ。其ノ成績ヲ概括スレバ、

一、睾丸ハ大多數ノ動物ニ於テハ小豆大以下ノ瘢痕性硬結ヲ止メテ治癒シ好ンデ副睾丸、輸精管、攝護腺及ビ精囊ヲ侵シ來ル。然レドモ銅劑ヲ以テ治療シタル動物ノ病變ハ概シテ對照動物ノ病變ニ比シ輕度ナルカ又ハ全然結核ニ罹患セズ。

一、肺臓ノ病變程度ハ對照動物ノ病變ニ比シ多少輕度ナルモ特記スベキ差違ヲ見ズ。
一、腎臓ノ病變程度ハ何レモ極メテ輕度ニシテ對照動物ノ病變ニ比シ差違ヲ認メズ。
一、肝脾其ノ他ノ部分ニ結核病變ヲ認ムル能ハザリキ。
一、膠樣性銅鹽ハ膠樣性ニアラザル銅鹽ヨリモ治療成績遙カニ優良ナリ。且ツ膠樣性銅鹽モ其ノ銅鹽ノ種類ニヨリテ結核羅患動物ニ對スル治療的價値等シカラズ。（自抄）

第二十ニ對スル附議

一、　久保郁藏

只今銅療法ニ就テオ話アリ結局未ダ確實ニ奏效スルヤ否ヤハ未定ノ樣ニ拜承シマシタガ、私ニ於テハ永年ノ臨牀實驗上著明ノ功能アルモノト信ジマス。抑モ銅療法ノ創案者ハリンデン伯夫人トセラレ古賀氏液トナリ又「チアノクプロール」ト變名シ大正四年末ヨリ五年初ニ當リ大ニ功否ニ就テ論戰アリマシタガ、同五年二月私ハ大阪醫師會報ニ演舌筆記アリ次テ醫學中央雜誌第二百三十四號ニ轉載セル通リ、全ク私ノ發明ニテリンデン伯夫人ニ先ツコト十一ケ年半、即チ明治三十四年ヨリ內服藥トシテ結核患者ニ應用シタルコトハ證據品即チ處方錄ヲ示シマシタ、且ツ此發明ニハ學問的ノ根據ヲ有スルガ、茲デハ時間ガナイカラ遺憾ナガラ詳述出來マセンガ、既往二十年餘約七百例ニ對シテ、確實有效ナル治驗ヲ收メルコトヲ得マシタ。（自抄）

二、　大村定吉

銅ノ化學療法ニ付テハ演者モリンデン氏等ノ主張スル如ク Kuperaffinität ト云フ事ニ根據ヲ置テノ御說ナラバ御一考ヲ煩ハシ度トイ思フ。余ハ前年銅劑ヲ健康及結核家兎ニ數月ニ亙リ多量ニ注射シテ體內ニ相當量ノ銅ヲ蓄積シタルヲ見

テ、之ヲ撲殺シ各臓器ヲ定量分析セシニ結核菌カ銅劑ト親和スルトノ證跡ヲ得ル事能ハズ、結核結節ノ適當數存在シ傍ラ治癒機能ノ起リ居ル肺組織ニ在テモ他ノ健康組織ヨリ多量ニ檢出スル事能ハズ乾酪變性部分ノ如キハ却テ健康部ヨリモ少キ現象ヲ見タリ。此成績ニ鑑ミテ古賀博士ハ其「チノクプロール」ノ治癒機轉ノ説明ヲ「ヘモテラピー」ニアラズ寧ロ喰菌現象ト云フ事ニ變更セシ事アリ、若シ演者モ Kupferaffinität ヲ根據トシテノ御考ナレバ此點ヲ御一考アラン事ヲ望ム。

（自抄）

三、

岩佐大治郎

余ノ用ヒタル銅劑ガ結核ニ對シ眞ノ化學的療法ノ意味ニ於テ卽チ「バクテリオトロープ」ノ意味ニ於テ有效ナルモノナルヤ或ハ組織球性細胞ニ一定度ノ機能的變化ヲ起サシムルコトニヨリテ間接的ニ結核ニ作用スルモノナリヤハ未ダ斷言スルヲ得ズ。然レドモ余ノ用ヒタル膠樣性銅鹽ハ前後二回ノ治療試驗成績ヨリ推考スレバ一定度ノ治效作用アルモノ、如シ。然レドモ此レ等ノ問題ハ尙ホ幾多ノ動物實驗ヲ重ネテ將來ニ於テ確定セントス。

（自抄）

第二十一、家兎結核感染ト尿中「エーテル」硫酸量トノ關係ニ就テ

竹尾結核研究所（所長佐多博士）
宮崎正一

腸內ニ於ケル醱酵現象旺盛ナルニ際シ、又ハ體內ニ、一定ノ非生理的物質ヲ輸入スルカ或ハ一定ノ毒物生成セラル、ニ際シテ、是等物質ハ體內ノ硫酸ト抱合シテ、所謂「エーテル」硫酸ヲ形成シ、無毒或ハ毒性減弱セラレテ尿中ニ排泄セラル、モノナルコトハ周知ノ事ニ屬ス、從ツテ尿中ニ於ケル「エーテル」硫酸量ノ增減ヲ觀察スルコトニ依ツテ、腸內ニ於ケル醱酵現象ノ强弱或ハ體內ニ於テ生成セラレタル毒物ノ如何ヲ、或ハ其量的關係ヲ、略〻窺ヒ知ルコトヲ得ベシ。

人及ヒ動物ノ結核病ニ就テ、其尿中ニ於ケル「エーテル」硫酸量ヲ檢セシ成績ハ甚ダ少ナシ、殊ニ比較的長期ニ亙ル結核病機ノ經過ヲ追フテ、其尿中ニ於ケル總硫酸「エーテル」硫酸量及ビ其相互的關係其他ヲ精細ニ檢査セシ成績ハ、余ノ寡聞未ダナキモノヽ如シ、依ツテ余ハ是等ヲ檢査センコトヲ欲シ、先ヅ結核ヲ感染セシメタル家兎十數匹ニツイテ、長キハ八ケ月短キハ二ケ月ニ亙リテ精細ニ是等ヲ檢査セシニ一定ノ成績ヲ得タレバ、今茲ニ報告セントス。

實驗動物タル家兎ハ全部雄性ヲ用ヰタリ、食餌トシテハ一定量ノ野菜ト豆腐糟トヲ與ヘ、何レモ健康ト認メタルモノニシテ尿中異狀性分ヲ證明セズ、略一定ノ間隔日ヲ置キ「カテーテル」插入ニ依リ定時採尿ス、尿中總硫酸及「エーテル」硫酸ノ定量ハ一般ノ方法ニ依ル實驗ニ際シ家兎ノ食慾狀態ニハ特ニ注意ヲ拂ヒ、下痢ヲ起セルモノハ除外シ、又剖檢上腸ニ著シキ變化ヲ認メタルモノハ成績ヨリ除外セリ、常ニ各家兎ハ結核ニ感染セシムルニ先チ數回採尿シ、其家兎ニ對スル正常値ヲ檢査シ置キテ後、佐多結核菌AI苗ノ一定量ヲ耳靜脈內ニ注入セリ。

實驗成績ヲ通覽スルニ結核家兎ノ體重次第ニ減少シタル數例ニ於テハ、總硫酸竝ニ「エーテル」硫酸量ハ共ニ增加シ、殊ニ後者ハ前者ニ比シ增加ノ度著シク、結核家兎ノ體重減少ヲ來サズ或ハ却ツテ增加シタル數例ニ於テハ、總硫酸竝ニ「エーテル」硫酸量ハ共ニ著シキ變化ヲ認メズ、依ツテ若シ只單ニ饑餓ナル一條件ガ、「エーテル」硫酸量ノ消長ニ影響ヲ與フルヤ否ヤヲ檢セント欲シ、家兎ヲ饑餓ニ陷レシメ其尿中「エーテル」硫酸量ヲ檢セシニ殆ンド變化ヲ認メズ。

以上ノ實驗成績ヨリ次ノ如ク結論シ得。

一、家兎ノ結核感染後次第ニ體重ノ減少ヲ來ス例ニ於テハ、尿中總硫酸竝ニ「エーテル」硫酸量ハ共ニ增加ス、而シテ後者ハ前者ニ比シ增加ノ度著シク兩者ノ比ハ小トナル。

二、家兎ノ結核感染後體重ノ減少ヲ來サズ或ハ却ツテ增加シタル例ニ於テハ、總硫酸竝ニ「エーテル」硫酸量ハ殆ンド變化ナキカ、又ハ兩者共多少ハ增加スルモ其比ハ殆ンド變化ヲ來サズ。

三、家兎ニ於テ尿中著シキ、「エーテル」硫酸量ノ增加ハ、該家兎ヲ饑餓ニ陷レシムルコトニ依ツテ影響セラルヽコト少ナキモノヽ如シ。

以上ノ成績ニ依リテ結核ノ感染ト尿中「エーテル」硫酸量ノ增加トハ深甚ノ關係アルモノ、如シ、然ラバ其「エーテル」硫酸量ノ增加ヲ來ス所以ノ本態ハ、果シテ何者ナルカハ目下研究中ニ屬スレバ追ツテ報告スルトコロアルベシ。(自抄)

第二十二、「ヴィタミン」Aノ結核「モルモット」ニ及ボス實驗的研究

(第一回報告)

慶應醫科大學病理細菌學教室

絲川角次郎

實驗ニ著手スルニ先ダチ、余ハ特ニ左ノ四項ニ注意セリ。

(一)「ヴィタミン」Aハ結核菌其物ニ對シ直接作用セザルモノ、如シ。

(二)「ヴィタミン」Aハ一種ノ榮養素ニ非ズンバ新陳代謝ニ働ク刺戟素ニ過ギザルヲ以テ、之ヲ良ク持續シテ使用スルニ非ザレバ一定ノ效果ヲ收ムルコト難カルベシ、故ニ結核「モルモット」ヲシテ可及的慢性ノ經過ヲ辿ラシムル必要アリ。

(三)「ヴィタミン」Aノ缺亡セルトキハ、勿論動物體ニ對シ一定ノ障碍ヲ惹起スルト同ジク、其大量卽チ過量ヲ持續シテ與フル時ハ、又動物ヲ死ニ致スモノナルヲ以テ、「ヴィタミン」Aニハ一定ノ適量ナカルベカラズ。

(四)「モルモット」其物ノ個性ニヨリテ、實驗上差違ヲ生ズルコトアルベシ。

實驗方法

普通食物ヲ以テ飼養セル體重三百瓦內外ノ「モルモット」三十頭ヲ選出シ、十頭宛三列ニ分チ、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ列トナシ各列各頭ニ、比較的弱毒ニ屬スル人型結核菌〇・一瓩ヲ腹腔內ニ注射セリ、而シテⅠ列ニハ菌注射前二十日ヨリ、Ⅱ例ニハ菌注射後十日ヨリ、各「ヴィタミン」A(理化學研究所ニ於テ特ニ製造シテ惠與セラレシモノニシテ所謂「ビオステリン」ヲ二%ノ割合ニ「オレーフ」油ニ溶解シタルモノ)〇・一宛、初メ二ケ月間ハ隔日ニ、夫レ以後ハ三日乃至四日ノ間隔ヲ以テ

口腔ヨリ注射筒ニヨリ與ヘ、正確ヲ期スル爲メ、其嚥下セルヲ見テ放ツヲ例トセリ、Ⅲ列ハ「ヴィタミン」Aヲ與フルコトナクシテⅠ、Ⅱ列ト同樣ニ飼養ス而シテ各一週間毎ニ體重ヲ計測シ其經過ヲ觀察セリ。

結　果

體重。對照動物ハ殆ンド常ニ四百瓦ヲ超ユルコトナカリシニ「ヴィタミン」Aヲ與ヘシⅠ、Ⅱ列ハ共ニ十三四週頃ヨリ增量シ、二十五週ヲ經過セルモノニシテ特別疾病ノアルモノヲ除キ六百瓦內外ヲ往來セリ。

生存日數。Ⅰ、Ⅱ列ハ菌接種後十週ヨリ十五週ノ間ニ於テ其半數以上斃死シタルモ、殘存セルモノニ於テハ健康狀態佳良ニシテ、餘病ニヨリ死亡セルモノヽ外ハヨク生存シ、三十八週ヲ以テ其三頭ヲ撲殺セリ、之ニ反シ對照動物ハ盛夏ノ候三頭ヲ失ヘルノミナルニ、發育遲々トシテ進マズ、憔悴骨立ノ觀アリ、三十三週以內ニ全部斃死ス。

解剖的所見。約三ケ月以內ニ斃死セルモノニ於テハ各列共大差ナキモ、ソレ以後ニ於テ斃死セル對照動物ノ全部卽チ七頭ニ於テ肺臟ニ乾酪性肺炎ヲ認ムルカ、否ラザルモノハ他ノ臟器ニ大ナル乾酪竈ヲ藏セルヲ認ムルモ「ヴィタミン」Aヲ與ヘシⅠ、Ⅱ列ニ於テハ餘病ノ下ニ斃死セルト認メシ一例ノ外ハ大ナル乾酪竈ヲ證明セズ、併シテ時ニ二三「モルモット」ノ淋巴腺著シク硬度鞏靭ナルヲ認ム。

組織的所見。主トシテ、肺、肝脾、脾臟及ビ淋巴腺ニ就テ檢ス。

第三表　「ヴィタミン」Aヲ作用セシメタル結核「モルモット」ノ解剖學的及ビ組織學的成績表

列＼番號	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計
Ⅰ	P	H	P	H	P	S	P	H	P	P	P＝6 S＝1 H＝3
Ⅱ	P	P	P	P	H	P	H	P	S	P	P＝7 S＝1 H＝2
Ⅲ	P	S	P	P	P	S	F	P	P	P	P＝8 S＝2 H＝0

P＝進行性　S＝停止性　H治癒性

第四表　「ヴィタミン」Aヲ作用セシメタル結核「モルモット」ノ各臓器ニ於ケル病竈程度表

臓器 / 病竈程度	肺			肝臓			脾臓			淋巴腺			計		
	H	S	P	N	H	S	P	N	H	S	P	H	S	P	N
I	1	2	6	1	4	0	6	0	1	3	6	3	0	7	9	5	25	1
II	1	2	7	0	2	2	5	1	1	2	7	3	0	7	7	6	26	1
III	0	0	0	0	2	4	4	0	0	3	7	1	2	7	3	9	28	0

P＝進行性　S＝停止性　H＝治癒性　N＝尋常

表中、余ノ便宜上假リニ進行性、停止性、治癒性ト稱セシハ左ノ分類法ニ基クモノナリ。

(P)進行性。結節中央部乾酪變性ヲ營ミ結核菌多數ナルモノ。

(S)停止性。結節中央部乾酪變性ノ有無ニ關セズ其周圍及ビ內部ニ結締織增殖シ、將ニ纖維化セントスルガ如キ態度ヲ示スモノニシテ、結核菌ノ少數ナルモノ。

(H)治癒性。結節ハ纖維化シ乾酪竈ナク結核菌ヲ證明セザルモノ。

第三表ニヨリ、各臓器ニ於ケル病竈ノ種度ヲ通覽スルニ、肝臓ハ最モ治癒率多ク、次ハ淋巴腺ニシテ、肺臓及ビ脾臓ハ殆ンド相等シキヲ知ル。

又第四表ニヨリテ各列トモ皆一樣ニ結核ニ罹患セルニ拘ラズ「ヴィタミン」Aヲ與ヘシI、II列ニ於テ特ニ治癒率ノ多キハ注目ニ値スルモノナリ。

結論

少ナクモ「ヴィタミン」Aヲ三ケ月以上與ヘタル結核「モルモット」ニ於テハ、對照動物ニ比シ體重著シク增加シ榮養佳良トナリ抵抗力ヲ增進シ以テ天然治癒ニ對シ好影響ヲ及ボシ從ツテ其アルモノニ於テハ生命ノ延長ヲモ來シ得ルモノニ非ザルカ。

尙余ハ本實驗ノ不足ヲ補ヒ且ツ之ヲ確カメンガ爲ニ種々ノ方法ヲ以テ更ニ實驗ヲ重ネツヽアリ。（自抄）

第二十二ニ對スル附議

醫學博士　近藤乾郎

「ヴィタミン」Aガ刺戟的ニ働キタルトノ御考ヘナルカ或ハ部分的饑餓ニ對スル效果ナリト信ンゼラルヽヤ、御試用ノ食餌ニシテ若シ「ヴィタミン」Aノ缺乏アリトスレバ御試驗ノ結果ハ當然ニシテ敢テ本劑ト結核ト直接關係アリタリト認ムルコトヲ得ザルハ勿論ナリ。

第二十三、家兎結核感染ト血中「ヒヨレステリン」量トノ關係ニ就テ

竹尾結核研究所（所長佐多博士）

醫學博士　池口武夫

宮井茂吉

「ヒヨレステリン」ガ特殊ノ解毒作用及赤血球崩壞防禦作用ヲ有スル事實ヨリ、動物體內ニ於テ病菌發育ニ因リテ生成セラル可キ有毒產物、竝ニ體細胞ノ退行變性產物ノ生成等ト血中「ヒヨレステリン」物質ノ消長トノ關係ハ頗ル興味アル研究領域タリ。

現今迄ニ發表セラレタル諸種ノ成績ヲ綜合觀察スレバ、急性傳染病ニ於テ殊ニヨク其間ノ消息ヲ明示セラレタルヲ認ム可シ、例之ハ窒扶斯、肺炎ノ如キ、其病機進行時ニ於テハ血中「ヒヨステリン」量ハ甚シク減少シ、恢復時ニ至リテ增量ヲ示スガ如キコレナリ。其他慢性疾患ナル新陳代謝病、腎臟疾患、肝臟疾患及貧血等ニ於ケル血中「ヒヨレステリン」物

質量ノ消長ニ就テハ研究セラレタルモノ尠シトセザレドモ結核病ニ關シテハ其研究今猶充分ナラズ、惡液質ニ陷リタルモノ及腸結核ニ於テ一般ニ血中「ヒヨレステリン」ノ減少ヲ表ハスコトヲ證セラレタルノミニシテ、多クハ新陳代謝盛ナル場合ハ「ヒヨレステリン」量減少スベシトノ想像ノ下ニ一般ニ結核病ニ於テハ「ヒヨレステリン」量減少スト稱セラルノミナリ。猶且ツ今日迄ニ施行セラレタル研究ハ結核患者ニ就テ唯數回ノ檢血結果ヲ報告セシニ止リ、比較的長期ニ亙リ其病勢ヲ追及シテ「ヒヨレステリン」物質量ヲ測定シタルモノナシ。ヨリテ余等ハ結核病機ヲ追フテ此ト「ヒヨレステリン」量トノ關係ヲ檢セント欲シ此研究ヲ企圖セル所以ナリ。

實驗ニハ家兎數十疋ヲ使用シ、コレ等ヲ各別個ノ家兎容器中ニ於テ一定ノ食餌ヲ以テ飼養シ置キ、佐多A結核菌株ノ一定量ヲ生理的食鹽水ヲ以テ乳化體トナシテ耳靜脈內ニ注入シテ結核ニ罹ラシム。「ヒヨレステリン」物質量ノ測定ニハ余等ノ考案ニ係ルブルワー氏改良方法ヲ以テシ、結核菌注入前數回採血檢査ヲ行ヒテ其家兎ニ對スル正常値ヲ檢出シ置キ、注入後ハ短キハ一ケ月長キハ約四ケ月ニ亙リテ、一定ノ間隔日ヲ以テ採血測定セリ、更ニ他方ニ於テ結核病ト淋巴白血球ト密接ノ關係ノ存在セルコトヽ、急性傳染病ニ於テハ白血球ト血中「ヒヨレステリン」量トガ大ナル關係ヲ有スル事實ヲ顧慮シ、同時ニザリー氏法ニヨリ淋巴白血球數ヲモ測定セリ。而シテ得タル成績ヲ綜合スレバ次ノ如シ。

一、結核菌ノ比較的多量ヲ注入シ、注入後二週日位ニ於テ斃死セル家兎ニ於テハ各例トモニ注入後血中「ヒヨレステリン」物質量ハ一般ニ減少ス。

二、結核菌ノ比較的少量ヲ注入シ、長時日生命ヲ持續セルモノ、殊ニ體重ノ減少、食慾ノ減退ヲ示サヾリシモノニ於テハ、注入直後或ハ數日後血中「ヒヨレステリン」物質量ノ一時的減少ヲ見ルト雖モ健康對照家兎ニ於テモ亦カヽル一時的減少ヲ見ルコト尠ナカラザルヲ以テ明瞭ナル判斷ヲ下スコト得ハザレドモ恐クハ正常ト大差ナキガ如シ。

三、第二ニ示セル如キ家兎ノ狀態ニ於テハ、血中「ヒヨレステリン」物質量ト淋巴白血球數トノ關係ハ多クノ場合互ニ相反スルモノヽ如シ。

四、第二ニ示セル如キ家兎ノ狀態ニ於テハ血中「ヒヨレステリン」物質量ハ體重ノ增加ト殆ンド相反スルガ如シ。（自抄）

第二十三ニ對スル附議

一、

醫學博士　松波兎逸

自分ノ研究室デハ十數年前ニ加答兒性黃疸ヲ併發セル肺結核患者ノ經過ガ良好トナレル事實ヲ認メタ事數十例デ、十年前ヨリ其理由ノ研究ニ著手シ先ヅ人工黃疸ヲ起ス事ニ就テ輸膽管ノ結紮、「トルイレンヂアミン」注射、次デ膽汁ノ注射ヲ行ヒ實驗セルモ著明ナル效果ヲ認メズ、又犬ニ「トルイレンヂアミン」黃疸ヲ起サセ其血清ヲ以テ結核「モルモット」ヲ處置セルモ期待ノ成績ヲ得ズ、要スルニ膽汁其者トシテハ結核ニ對シテ特異ノ效ヲ奏スルニ非ルヲ知リ黃疸ノ場合ニ於ケル血清中ノ含有成分ノ變化ニ注目シ黃疸血清中ニ多量ニ含有セラル、「コレステリン」ガ何等カノ關係ヲ有スルニアラザルカヲ思ヒ、人工的ニ或ル手段ヲ以テ試驗動物ノ血中「コレステリン」增量ヲ企テタノデ、其方法トシテハ膽汁酸「ナトリユーム」(Choleinsaures Natium) 卽乾燥膽汁ノ注射ニヨッテ過「コレステリン」血清狀態ヲ發生セシメ、之レガ結核ニ及ボス影響如何ヲ研究中ナルガ、(一)池口宮井御兩君ノ成績ヲ承リ(二)又米國フート氏ガ剔脾家兎ノ結核傳染試驗ニ於テ該動物ノ肺ニ「コレステリン」沈著ノ多量ヲ認メ又其病竈變化ノ比較的輕度ナルヲ認メタリトノ事ナルガ、我研究室加藤芳治君ハ剔脾セル家兎ノ血清ニハ「コレステリン」量ガ增加スル事ヲ證明セル點(三)竝ニ結核患者ノ血球沈降反應ハ一般ニ病症ノ輕重ニヨリ遲速ヲ生ズルモノト認メラレオリ、又一方ニハ結核患者血清ノ「コレステリン」量ハ病症ノ輕重ニヨリ變化アリトセラレオルガ加藤君ハ血清中「コレステリン」含有量如何ハ其表面張力ニ影響ヲ及ボス事ヲ「スタラグモメトリッシュ」ニ實驗證明セル事、而シテ表面張力ハ血球沈降反應ヲ左右スル因子ヲナストノ說ヨリ見レバ、結核患者ノ血球沈降反應ニハ「コレステリン」含有量ノ如何モ亦關與スルト稱シ得ベシト思ハル、事等ヨリ見テ結核ト「コレステリン」トノ關係ハ興味アル研究項目ナラント思考ス。

(自抄)

二、

醫學博士　池口武夫

松波君ノ御追加ニ對シテ感謝イタシマス、私モ餘程以前カラ「コレステリン」ガ結核ノ治癒ニ好影響ヲ與フ可シト考ヘテ案ジラ居リマシタガ、最近ノ雜誌ニ矢張リ治療ニ應用セント企テル人モアリマス、吾々モ此方面ニ今後研究ノ歩ヲ向ケタイト思イマス。（自抄）

三、

醫學博士　清野　謙　二

結核ト「コレステリン」ノ關係ハ興味アル問題ト思ヒマス、「コレステリン」ト「ヒスチオチーテン」、「ヒスチオチーテン」ト免疫作用等ノ關係ヲ思フトキ、私ハ卵黄ノ「コレステリン」ニ富メル事實ヲ結核治療上何等カ意味アルモノ、如ク思ハザルコトヲ得マセン、唯單ニ「カロリー」ニ富メル食品ト云フノミデナク、此「コレステリン」含量ノ點ニ於テモ大關係ヲ有スルノデナイカト考ヘマス。

第二十四、余ガ結核診斷液ニ就テ

淡輪療病院

醫學博士　川村六郎

結核菌ノ「ホモゲヲクルツール」新法、及ビ該法ニヨリテ得タル結核菌「ホモゲヲクルツール」ノ免疫元性極メテ特異ナルノ事實ハ昨年ノ本學會ニ於テ之ヲ報告シタリ。爾來余ハ專ラ之ノ「ホモゲヲクルツール」ヲ臨牀上ニ應用シテ、結核ノ診斷及ビ治療ニ之ヲ試ミツヽアリ。卽チ今日迄得タル診斷的應用ノ一端ヲ茲ニ報告セントス。

余ガ昨年報告シタル結核診斷液ハ人型結核菌「ホモヲクルツール」ヲ余ノ所謂卵黄蛋白水ニ培養シタルモノナリシモ、近時更ニ「ホモゲヲクルツール」ノ塞天培養ヲ加味シテ稍〻完全ナルモノヲ得タリ、卽チ全液全ク平等ニ溷濁セル液體ニシテ、「チフス」診斷液ト外觀全ク同樣ナリ、從ツテ其檢査方法又ウィダール氏反應檢査法ト同一ナリトス。

余ハ本液ヲ用ヒテ健康人殊ニ小兒血清ノ檢査ヲ希望セルモ未ダ其機ヲ得ル能ハズ、茲ニハ唯結核患者血清ノ試驗成績ヲ報告スルニ止ム。卽チ余ガ診療ノ患者中血清ヲ採取シ得タルモノ九十名ニツキ、其檢査成績ヲ表示セバ次ノ如シ。

結核患者血清凝集反應一覽表

病期	病勢＼成績	陰性	陽性 十倍	二十倍	四十倍	八十倍	百六十倍	計
第一期患者	活動性	一	一三	一一	八	六	一	一三
	非活動性	三	三五	三二	二一	九	二	三八
第二期患者	活動性	二	九	五	四	一	一	一一
	非活動性	一	九	八	三	三	一	九
第三期患者	活動性	二	九	七	五	一	一	一一
	非活動性	一	八	七	四	一	一	八
計		七	八三	六九	四五	二一	五	九〇

右ノ成績ニ其他ノ事實ヲ綜合シテ、

一、肺結核患者第一期ノ血清ハ凝集反應陽性最モ多ク(九四%)、シカモ非活動性ノモノ(九二%)ヨリ活動性ノモノ(一〇〇%)ノ方多ク、且ツ反應度著明ナリ、但シ右ノ表中非活動性ノモノ三人反應陰性トアルモ、實際コノ三人ハ何レモ單ニ肺尖ノ呼氣延長アルノミニシテ他ニ何等結核ヲ表徵スルモノナク、寧ロ非結核ノ診斷ヲ下スヲ適當トスルモノナリ。

一、第二期患者血清ハ約九〇%ニ陽性ニシテ第一期ノモノニ反シ、活動性(八二%)ヨリモ非活動性(一〇〇%)ノ方ニ多ク、且ツ著明ナリ。

一、第三期患者血清ハ陽性最モ少ク(八九%)第二期ト等シク活動性(八二%)ヨリモ非活動性(一〇〇%)ニ多ク、且ツ反

應高度ナリ。

一、結核患者血清ノ凝集反應ハ一般ニピルケー氏皮膚反應ノ强度ト一致ス。

一、一定期間「カルチウム」注射ヲ行フトキハ患者血清ノ凝集反應一般ニ增强スルモノヽ如シ。

以上ノ所見ニヨリテ余ガ結核診斷液ハ結核患者ノ免疫力ヲ推定シ豫後ノ判定ニ資スル所アルヲ信ズ。（自抄）

第二十五、直射光線ノ結核菌感染力減殺作用

竹尾結核研究所（所長佐多博士）

宮木　茂

太陽光線ノ衞生學上將又疫學上意義アル事ハレウマンノ比諭ニヨリテモ窺ハレ殊ニ特種ノ抵抗力アル結核菌ニ對シテハ學問的ニモ實際上ニモ興味アリ必要アル所ナルモ彼我ノ狀況ニヨリ甚ダ錯綜セル關係ヲナシ。一八九〇年コッホノ研究以來幾人カノ追究者ヲ出セシモ、未ダ色々ナル强度ノ日光ガ色々ナル時間ニ於テ色々ナル菌ノ狀態ニ何程度迄感染力ヲ侵害スルヤ精密ニ比較スルモノ少ナク殊ニ斯ノ如ク感染力ヲ減殺脫失セル結核菌ガ免疫原トシテ何ニ免疫ヲ惹起スルヤヲ觀測セルモノ尙僅少ニシテ先キニ我ガ竹尾研究所ノ清野博士ガ同ジ考ヘノ下ニ研究シ一定ノ成績ヲ報告シ又近年他ノ方面ニ於テモ同樣ノ研究ヲ發表セルモノアルモ、猶一層精密ニ確實ニ且ツ比較的ニ報告スルノ必要アルベシト之レガ研究ニ從事セリ。

本研究ハソノ傳染力ヲ測定セル一種ノ結核菌ヲ用ヒ其寒天培養ヲ剝離シテ、

（一）塊狀ノ儘濕潤狀態ノモノ（二）乾燥狀態ニ於ケルモノ（三）其寒天培養ヲ壓榨シ薄層ニシテ濕潤狀態ニ置ケルモノ（四）充分乾燥シ壓榨シ薄層粉狀トナセルモノ。

以上四種狀態ノ菌種ヲ十五分及三十分間日光ニ直射シ、然ル後之レヲ健康海猪ニ腹部皮下接種ヲ施シ、其經過、反應、

病變ヲ比較觀察セリ。而シテ日光ノ直射試驗ニ際シテハ、同時ニソノ氣溫其他ヲ研究シ、比較參考スルノ要アルヲ以テ嚴密ニ自家及大阪測候所芝野技師之レガ測定ヲナセリ。

第一試驗　大正十二年九月二十六日正午ヨリ三十分間

平均直射氣溫　三六・三C
平均直射濕度　五二・七%
同　木蔭氣溫　二七・C
同　氣　壓　七五八・七粍
同　風　速　二・四米(西北西)
同　雲　量　十分ノ一

第二試驗　大正十二年八月十四日正午ヨリ三十分間

平均直射氣溫　四九・四C
同　同　濕度　四七・九%
同　木蔭氣溫　三三・C
同　氣　壓　七六〇・二粍
平均　風　速　四・八米(南西)
同　雲　量　十分ノ五

本氣溫ニヨル照射菌ハ日光ノ影響ト共ニ稍〻高溫度ノ影響ヲ受ケタルモノトモ認メザルベカラズ

第三試驗　大正十二年九月十九日正午ヨリ三十分間

平均直射氣溫　三八・四C
同　同　濕度　四七・七%
同　木蔭氣溫　三〇・C
同　氣　壓　七六六・九粍

同風　速　五・五米(東南東)
平均雲　量　十分ノ三

菌量ハ第一試驗ハ各菌種ヲ試獸一頭ニ二瓩宛第二試驗及第三試驗ハ濕潤狀態各菌種ハ二瓩宛乾燥狀態各菌種ハ八瓩宛投與セリ。

之レガ對照トシテハ、

(一)無照射生結核菌ノ夫、同量ノ濕潤狀態ト乾燥狀態。

(二)夫ト同量ノ死菌ヲ用ヒタリ。

モト本試驗ハ甚ダ複雜セルヲ以テ途中ノ反應經過ヲ省略シ本試驗ニ於ケル結果ノ或ル部分ヲノミヲ發表ス。

〔一〕塊狀濕潤狀態、塊狀乾燥狀態、壓榨薄層濕潤狀態、(所謂)粉狀乾燥狀態ノ四種菌ヲ三十分及十五分間直射光線三六・三度。三八・四度。四九・四度時況ニ照射セル各種照射菌ノ間ニハ格段ナル感染力ノ差異ヲ認メタルニ、

〔二〕對照無照射生菌ニ於テハ其濕潤狀態ト乾燥狀態トノ菌ノ感染試驗ハ殆ンド同一ノ結果ヲ見タリ。

〔三〕直射氣溫三六・三度時況照射菌ハ、

1、塊狀濕潤狀態及塊狀乾燥狀態ノ直射三十分及十五分間菌種ハ共ニ殆ンド侵害作用ヲ認メズ。

2、壓榨薄層濕潤狀態ノ直射三十分及十五分間菌種ハ共ニ多少ノ直射日光ノ減殺作用ヲ見ルモ大ナル影響ナシ。

3、(所謂)粉狀乾燥狀態ノ直射三十分及十五分間菌種ハ共ニ全ク死滅シ本試驗中意義アルモノナリ。

〔四〕直射光線四九・四度時況照對菌ハ、

1、塊狀濕潤狀態ノ直射三十分及十五分間菌種ハ共ニ多少直射ノ侵害作用ヲ見ルモ大ナル影響ナシ。

2、塊狀乾燥狀態ハ直射十五分間菌種ハ大部分死滅シ同直射三十分間菌種ハ殆ンド死滅ニ近ク本試驗中興味アル菌種ナリ。

3、壓榨薄層濕潤狀態及(所謂)粉狀乾燥狀態ノ直射三十分及十五分間菌種ノ何レモ全ク死滅ス。

〔五〕直射氣溫三八・四度時況照射菌ハ、

1、塊狀濕潤狀態ノ直射三十分間菌種ハ共ニ日光ノ影響ヲ認メズ。

2、塊狀乾燥狀態ノ直射三十分及十五分間菌種ハ共ニ多少ノ影響ヲ見殊ニ照射三十分間照射菌ハ夫レノ十五分間照射菌ニ比シ、ヨリ多クノ滅殺作用ヲ認ム。

3、壓榨薄層濕潤狀態ノ直射十五分間菌種ハ大部分死滅シ同直射三十分間菌種ハ殆ンド死滅ニ近ク本研究中興味アル菌種ナリ。

4、(所謂)粉狀乾燥狀態ノ直射三十分及十五分間菌種ハ共ニ全ク死滅ス。

但シ全ク死滅セル菌種モ多少淋巴腺ノ腫脹セルヲ見タルモノアルモ、コハ本試驗附隨ノ死菌感染試驗ニ於テモ見ル所ナリ。

以上三氣溫時況ノ下ニ、八菌種ヲ直射シ殆ンド何等ノ日光ノ影響ヲ認メザルモノヨリ死滅ニ近キモノ、全ク死滅セルモノ迄色々ノ感染力ヲ有スル菌種ヲ得タレバ茲ニ氣溫三八・四度ノモノニハ二萬瓩氣溫四九・四度ノモノニハ二百瓩ノ生菌ヲ以テ之レガ感染試驗ヲ行ヒタリ卽其、

〔六〕免疫試驗トシテハ、

1、直射光線ニヨリ障碍ヲ受クル事僅少ナルモノ卽チ氣溫三八・四度ノ塊狀濕潤及乾燥狀態菌種氣溫四九・四度ノ塊狀濕潤狀態菌種等ハ本試驗附隨ノ生菌大量免疫試驗ト同樣何等免疫的意義ヲ認メズ。

2、直射光線ニヨリ全ク死滅セル照射菌卽チ氣溫三八・四度ノ(所謂)粉狀乾燥菌種。直溫四九・四度ノ壓榨薄層濕潤狀態及(所謂)粉狀乾燥狀態菌種等ノ如キハ淋巴腺、脾臟ノ病變甚シキモ肺臟ノ變化割リニ輕度ナル所謂過敏性ヲ示シ本試驗附隨、死菌免疫試驗ト約相似ノ形ヲ認メタリ。

3、直射光線ニヨリ大部分死滅セルモノ卽チ氣溫四九・四度ノ塊狀乾燥狀態直射十五分間菌種ノ如キハ不完全ナガラ免疫ノ附與サレタルガ如シ。

4、直射光線ニヨリ殆ンド死滅ニ近キモノ卽チ氣溫三八・四度ノ壓榨薄層濕潤狀態直射三十分間菌種氣溫四九・四度ノ塊狀乾燥狀態直射三十分間菌種ノ如キハ完全ニ近キ免疫ノ成立ヲ認メタリ。

猶免疫原トシテ日光照射菌ヲ用ヒシモノニ先キニレウベンスタイン清野氏等ハ終ニ成功ヲ見ズシテ終リ多少ノ抵抗ヲ認メタリト云フヂ、ドンナモ一回ノ試驗ノミニテ再度ノ復試驗ヲ見ザルモ演者ハ幸ニ上述ノ如キ毒力ノ色々ナル菌種ヲ得茲ニ二回ノ試驗ニ於テ割リニ良結果ヲ得タリ、勿論之レハ本試驗ノ成績ヲノミ述ベシモノニシテ以テ全般ニ及ボサンニハ猶多大ノ研究ヲ要スル事ト思考ス。(自抄)

第二十五ニ對スル附議

醫學博士　有馬　賴吉

戸外生活ヲナス年齡ニ達シタル都會地住人ガ塵埃吸入ニ由リテ結核感染ヲ受ケ發病スルテフ學說ノ價値ナキコトヲ永ラク私ハ思フテ居リマス。併シ戸外塵埃中ニモ結核菌ガ無イト思フノデハアリマセン、結核菌ハアリ、併シ之ニヨリテ戸外生活ヲナスニ至リタル年齡ノ都人士ガ感染發病スルモノトハ信セズ、卽チ之ヲ信スベキ證明ナク、之レナシト觀ルベキ實證ハ無數ニアリマス。ソレハ普通生活ヲナス結核患者以外ノオ互人間デアリマス。卽チ日光ニ曝サレ、空氣中ニ乾燥シタル少數ノ空中結核菌ハ幼乳兒以上ノ年齡ニ在ル都會人ニ對シテハ感染ノ危險アリトハ認メ難イノデアリマス。宮木君ノ研究ニヨリテ直射光線ニ比較的短時間曝シタル結核菌ガ「モルモット」ニ對シテスラ其毒性ノ著シク減ジ、容易ニハ全身感染ヲ起サザルノ傾向ヲ示スハ如上ノ主張ニ有力ナル基礎ヲ與フルモノデアルト思ヒ愉快ヲ感ズルト共ニ、結核豫防法講究ノ基礎的知識ヲ與フル爲メニ極メテ有益ナル業績デアルト信ジマス。

私ノ考ヲ以テスレバ日光ニ曝サレ、若クハ空氣ニ乾キタル空中菌ハ人結核感染發病ノ原因トナル場合ハ甚ダ多カラズ若クハ殆ンド之レ無クシテ、寧ロ却テ人體ニ免疫ト過敏性ヲ賦與シテ强力ノ感染ヲ豫防スルノ役目ヲ勤ムルモノデアルト

思フノデアリマス。（自抄）

第二十六、結核菌ノ生物學的研究

大阪市立刀根山療養所
太繩壽郎

余等ハ既ニ多年、「サポニーン」含有無蛋白培養基ニ結核菌ヲ培養スル時ハ、結核菌ハ特異ノ發育狀態ヲ取リ、且ツ其生物學的性質變化スルコトヲ報告セリ。余ハ斯ノ如クシテ得タル菌ヲ、更ニ「サポニーン」含有無蛋白培養液ヲ基質トシタル寒天培養ニ移植シタルニ、菌ハ更ニ特異ノ發育狀態ヲトリ濕潤光澤アル圓形膨隆セル「コロニー」ヲ作リ、其「コロニー」ヲ採リ食鹽水ニ混ズル時ハ、容易ニ平等乳劑ヲ得、該菌ハ一層確實ニチールチールセン氏染色法ニヨリ脫色シ、容易ニメチーレンブラウニテ染色スルヲ認ム、且ツ此ノ菌液ハ直チニ凝集反應又ハ補體結合試驗ノ「アンチーゲン」トシテ使用スルニ足リ、尙ホ又斯カル培養菌ハ結核患者治療竝ニ動物ノ感染豫防試驗ニ、效果アルコトハ余等ノ屢〻報告セル所ナリ。然ルニ「サポニーン」ヲ加ヘタル培養基ニ培養シタル結核菌ハ、斯ノ如ク特異ノ發育狀態ヲ取リ、又ハ其生物學的性質大ニ異ナル所以ハ明カナラズ、故ニ此ノ生物學的研究ハ極メテ興味アル必要ナル事實ナルコトヲ述ベタリ。

（自抄）

第二十七、無患子「サポニン」加「味ノ素」培養ニヨリ得タル變性結核菌ニ就テ

東京市療養所
故矢部辰三郎

原著トシテ本誌ニ掲載セル故演說ノ抄錄ヲ省略ス。（柴田正名、代演）

第二十八、「サポニン」加「味ノ素」培養ニヨル結核菌殊ニ TY_1 TY_2 ニ關スル研究

東京市療養所
故 矢部辰三郎
柴田正名
熊谷安正
小林吉人

著者等ハ矢部ノ無患子「サポニン」加「味ノ素」培養ニヨリ完全ニ抗酸性ヲ失ヒタル結核菌、TY_1 TY_2 ノ外ニ更ニ殆ド完全ニ抗酸性ヲ失ヒタル菌ノ數株ヲ得タリ。

TY_1 TY_2 ニ關シテハ形態染色培養及動物ニ對スル毒力ニ就テ實驗シ左ノ結論ヲ得タリ。

一、TY_1 TY_2 ハ眞正ノ分枝ヲ有スル絲狀菌ノ形態ヲ有ス。

二、TY_1 TY_2 ハチールガベット氏染色ニヨリ青染ス。

三、TY_1 TY_2 ハムッフ氏法色ニヨリ濃紫色ニ著色スル部分ト二次染色ニヨリ著色スル部分トアリ。

四、TY_1 TY_2 ハ普通寒天普通肉汁等ニヨク發育ス。

五、TY_1 TY_2 ヲペトロロフ氏培養基ニ移植スルニ時日ヲ經テ抗酸性ヲ恢復ス。

六、TY_1 TY_2 ハ之ヲ「モルモット」ニ注射スルニ其少量ニテハ明ナル病變ヲ惹起セズ。其大量ニテハ局所、肺、脾、肝等

ニ病變ヲ起スモ定型的ノ結核性病竈ヲ見ズ。

七、ペトロフ氏培養基ニヨリ抗酸性ヲ恢復シタルモノハ普通結核菌ノ形態ヲ有シソノ毒力亦舊ニ復シ家兎並ニ「モルモット」ニ典型的結核性病變ヲ惹起ス。

（自抄）

第二十七及第二十八ニ對スル附議

醫學博士　有馬賴吉

一、

先以テ故矢部先生ノ靈ニ對シテ敬意ヲ表シ、私共ノ小業ニ興味ヲ持タレテ之ヲ長年ニ亙リテ追試シテ下サレ私共ノ未ダ達シ得ナイ點ニマデ詳細ノ研究ヲナサレタル御好意ヲ感謝スルト同時ニ今回此席ニ於テオ目ニカヽルコトノ出來ナイノヲ悲シミマス。以下故人ノ業績ニ敬意ヲ表スル意味ニ於テ二三ノ愚見ヲ述ベマス。

一、結核菌ノ多數ノ中ニハ「サポニーン」培養ニヨッテ比較的容易ク抗酸性ヲ失フモノト、之ヲ失ヒニクイモノトガアルコトハ私共モ申シテ居ル所デリ、矢部先生ニ於テモ多數ノ菌株ノ中カラ僅ニ二若クハ三株ガ全ク抗酸性ヲ失フニ至ツタト申サレタコトハ私共ノ考ト一致シテ居リマス。

二、「サポニーン」加培養ニヨッテ此變性ヲナスコトハ私共ノ考デハ既ニ記載シタル理由ニヨッテ蠟樣物ヲ溶解スルニ由ルモノデアラウト思ッテ居ルノデスガ、矢部先生ノオ考デハ、之ル溶カスモノデハナクシテ、唯ダ「サポニーン」ノ存在ガ結核菌ニ此ノ變性ヲ與フルモノデアルヤウデアリマス。此問題ハ大局ニハ關係ノ薄イ枝葉ノ問題デハアリマスガ、私共ハ矢張リ「サポニーン」デハ蠟樣物ヲ溶解シ、「リパーゼ」デハ脂肪體ヲ分解シテ菌ノ抗酸性ヲ失フニ至ラシムルモノデアルト存ジマス。併シ尙ホ研究ヲ致シマセウ。

三、一旦變性シタルモノハ之ヲ普通ノ培養基ニ移スニ容易ニハ還元シナイデ幾代モ其マヽデ移植シ得ル、トサル、點ハ私共ニハ經驗ガ無イノデ、私共ノデハ一代ニテ還元スルノデアリマス。尙ホ之ニ關聯シテ、變性菌ハ「グリセリン」ヲ加

ヘザル普通ノ塞天培養基ニモ發育シ、四八時間ニシテ肉眼ニ觸ル、聚落ヲ形成シ且ツ此培養基ニ傳代ヲ重ヌルコトガ出來ルト言ハレタ點モ私共ニハ經驗ガナク、私共ノ菌ハ普通寒天培養基ニハ發育シナイノデアリマス。此二點ハ私共ノ成績ト矢部先生ノ成績トノ最モ異ナツタ所デアリマス。素ヨリ人型結核菌ニハ屢〻申シマスル通リ病原性ニ甚ダシキ差等アルト同ジク、隨分性質ノ異ナツタモノガアリマシテ「サポニーン」ニヨツテモ比較的容易ニ其ノ抗酸性ヲ失フモノト、容易ナラザルモノトアル如キモ亦性質的差異ノ一デアリ、未ダ私共ノ知ラナイ範圍ニ於テモ此性質的差異ガアルデアリマセウカラ、矢部先生ノ成績ヲ疑フ意味デハ決シテアリマセン。

四、「サポニーン」培養ニヨツテ得タル一菌株刀根第二五號デハ同株ノ普通培養ニ比シテ約千分ノ一以下ニ其毒性ガ減ジタルコトハ豫テ報告致シタコトデアリマシテ、詰リ著シク毒性ガ減弱サル、コトハ實地應用上ニ大ナル便益ヲ與フルモノデ私共ノ研究ノ主眼ノ一デアリマスガ、矢部先生ノ變性菌ニ於テモ毒性減弱ヲ實證サレタルコトハ愉快ニ堪エナイ所デアリマス。但シ原菌株ハ家兎ニ對シテモ強イ毒性ヲ有ツモノデアルニ、ソレヨリ生ジタル變性菌ハ一〇・〇瓩靜脈內注射ニヨリテ家兎ニ全然病變ヲ起サナカツタトアルハ其病原性減弱ノ程度ガ餘リニ大ナルニ驚キマス。私共ノ第二五號株デハ其「サポニーン」培養一・〇瓩以下ニ於テモ之ヲ家兎ノ血管內ニ注射スレバ屢〻肺ニ限局シテ他ニ移行セズ家兎ノ生存ヲ妨ゲザル結節性ノ病變ヲ呈シ、免疫性ヲ生ズルコト既ニ記述シタ所デアリマス。併シ之モ菌株ニヨル程度的ノ差異デアリマセウ乎。私共モ尙ホ種々ノ菌株ニツイテ試驗ヲ致シテ見マセウ。

兎ニ角此種ノ研究最後ノ目的ハ之ニ依テ人工免疫ヲ達成シ得ルヤ否ヤノ一點ニ在ルノデ、柴田、熊谷、小林ノ諸兄ニ於テモ故矢部先生ノ遺志ヲ繼ガレテ此唯一ノ目的ニ向テ研究ヲ續行サル、コトヲ此機會ニ於テ切ニオ願致シマス。

（自抄）

二、

熊谷安正

「サポニン」加培養ノ原著者ノ一人有馬氏ヨリ御高見ヲ承リマシテ甚光榮ニ存ジマス、今御答ヘヲ申上ゲ樣ト致シマシテ

其演說二十七ニ對スル分ニ就テハ故人ノ意見ヲ忖度スル樣デ差出ガマシイ嫌モアリマスガ、ソレハタヾ私ノ知ツテ居ル範圍ニ於テト云フコトヲ豫メオ斷リ致シテオキマス。

一、多數菌株ノ中デ最モ完全ニ變性シタルモノハ今日發表サレタ二株デアリマスガ、尙コノ他程度ノ差コソアレ兎モ角モ變性ノ道程ニアルモノ今日迄ニ九株ヲ見、變性菌ハ都合十一株ニナツテ居リマスノデ、之ハ最初實驗ニ供サレテ今日迄傳代サレテキル菌株ノ全部十七株ニ對シテハ相當ノ數ナリト存ゼラレマスコノ事ハ何レ觀察ヲ續ケタ上更メテ報告致スコトニ致シマス。

二、「サポニン」加培養ニ於ケル「サポニン」ノ使命ガ結核菌ノ蠟樣物ヲ溶解スルニアルト云フ有馬氏等ノ推定ニハ矢部先生ハ疑義ヲ抱イテ居ラレマシタ寧ロ環境ニヨル生活要約ノ或變化ニ重キヲ置カウトサレタ、必ズシモ「サポニン」ヲ要セズシテ矢張如斯變性菌ガ得ラルヽデアラウト云フ考ヘヲ有ツテ居ラレタ樣デアリマス、演說ニモアリマシタ通リ初メ佐藤株鈴木株ノ各ニ就キソノ同一「サポニン」加培養基上ニ一ハ正規ノモノ一ハ變性ノモノト同時ニ二種ノ「コロニー」ヲ生ジ來リコノ兩者ヲ分離スルコトヲ出來タノデ、カクシテ佐藤菌株鈴木菌株ヨリ現ニ昔ノ通リ變性シナイモノト及ビ TY₁ 或ハ TY₂ ト名ヅクル變性シタルモノトヲ別々ニ傳代シテ居ルノデアリマス（標本別室）ガ、コノ事實ガ卽チ矢部先生ノ推定ニ對シテ有力ナル根據ヲ與フルモノデアラウト信ジマス。

三、一旦變性シタルモノガ還元致シマス場合及ビ變性菌ヲ普通寒天ニ移植スル場合ニ就テ有馬氏等ノ成績ガ我々ノ夫レト一致シナイトノ仰セニ就キマシテハ勿論菌株ノ個性ト云フコトモ問題ニナリマセウガ、但シ其後者ノ場合ニ就キテハ私ハ重大ナル相違ノ出發點ハ寧ロ所謂「リバーゼ」ノ一項ニ存スルノデナイカト存ジマス私共ノ今日申上ゲタ成績ハ「サポニン」加培養ニヨリ得タト云フ點ハ有馬氏等ト同樣デアリマスガ同氏等ハ「サポニン」培養ニヨリ殆ド抗酸性ヲ失ヒタルモノニ更ニ「リバーゼ」ヲ加ヘテ云々ト申サレテ居マス私共ノモノハ未ダ何等カクノ如キ操作ヲ加ヘナイ所ノモノデアリマスカラ其點ヲ明ニ區別サレテ頂キタイト存ジマス、尙又變性シタル結核菌ガ普通寒天ニ及普通肉汁ニ發育シ得ルコトハ「サポニン」培養ノ場合ニ限ラズ日常多數ノ結核菌ヲ取扱ツテ居ル者ガ屢〻見ル所デアリマスガ、只今

コヽニ御覽ニナル樣ナ全ク絲狀菌ト見ルベキ圖ヲ揭ゲテ、而モ普通寒天ニ二日デ生ヱル等云フコトヲ申シマスト、誰方モ恐ラク先ヅ或ハ何カ混リ物デモ見テヰルデハナイカト疑念ヲ挾マレルカモ知レマセン、私共自ラモ初メ TY_1 ダケヲ見マシタトキハ自分ノ眼ヲ疑ツタ樣ナコトモアリマシタ、シカシ次ニ TY_2 ヲ得次第ニ同樣ナ經路ヲトツテキル數株ヲ見、而モ TY_1 TY_2 ガ正規ノ結核菌ニ還ル所マデ確メタノデ安心シテ今日發表シタ次第デアリマス。

四、免疫ノ問題ニ就テハ今日ノ所何等申上グベキコトヲ有チマセン、恩師ノ遺志ヲ繼イデ今後引續キ研究ヲ進メタイト存ジテ居マス。

（自抄）

三、

醫學博士　有馬賴吉

寔ニ不束ナコトヲ申シマシテ何トモ申譯ガアリマセン。諸君ノ御研究中ニ「リバーゼ」ハオ用ヒニナラナカツタノデ之ヲ申出ヅル筈デハナカツタノニ、ツイ之ニ及ビマシタコトハ不都合デアリマスカラ謹デ「リバーゼ」ニ就テノ前言ヲ取消シマス。

序デニ誠ニ厚顏イシ話デスガ、何故私ガ先程「リバーゼ」ニ言及シタカト云フ裏情ヲ此機會ニ於テ附加サセテ戴キマス。

卽チ、

私共ハ稍〻多數ノ結核菌株ヲ取扱ヒ居ル內、良免疫元タリ得ル結核菌株ハ餘リ多クハ無イ、卽チ特別ナル天才的菌株アルコト恰カモ「ヂフテリア」菌ニ特別ナル天才的毒產生菌株アルト似カヨツタモノガアルラシイ。而シテ此菌株ノ選擇ヲ遂グルコトニヨツテ初メテ實用上ノ價値ガ大ナルヲ得ルモノデアラウト思ヒ詰メテ居ル次第デアリマス。乃デ私共ノ現ニ有ツテ居ル菌株中二若クハ三株ガソレニ近イモノデアルラシク、殊ニ現ニ專ラ使用シテ居ル二十五號トイフ一株ガ此點デ特ニ圖拔ケテ居ルト思ツテ居リマス。此菌株ガ若シモ矢部先生達ノ菌株ノ如クニ「サポニーン」加培養ノミニヨツテ完全ニ抗酸性ヲ失フモノナリセバ「リバーゼ」ヲ聯想スルニハ至ラナイノデアリマスガ、不幸ニモ此菌株ハ「サポニーン」培養ノミヲ以テハ抗酸性ヲ完全ニハ失ハナイノデ、更ニ「リバーゼ」ノ作用ヲ借リテ初メテ完全ニ抗酸性ヲ失ハシムル

コトガ出來ルノデアリマス。此ノヤウナ關係デ、重キヲ特別ナル菌株ニ置クノ考ニ囚ハレテ、ツイ「リバーゼ」ニ及ンダノデアリマシテ、不惡オ宥シヲ願ヒマス。（自抄）

四、　足立清久

演者等ノ所謂TY_1並ニTY_2ハ抗酸性ヲ失ヘル場合ニモ尙動物實驗上模範的ノ解剖的病變ヲ呈シ得ルモノナリヤ詳細ナル御說明ヲ請フ。（自抄）

五、　熊谷安正

詳細ナル點ハ追テ雜誌「結核」ニ於テ發表致ス筈デアリマス、TY_1 TY_2ヲ接種シタ動物ニハ肉眼的所見デハ勿論組織切片標本ニ就テモ模範的結核病竈ハ認メズ、其大量ヲ接種シタモノニ就キ肺脾等ニ炎症性病變ヲ見マシタ。（自抄）

第二十九、「エピクロールヒドリン」ノ結核菌ニ及ボス作用

東京市療養所
故矢部辰三郎
小林吉人

余等ハ「エピクロールヒドリン」ヲ結核菌ヨリ「クロロホルム」ヲ以テ抽出シタル脂肪、「エーテル」ヲ以テ抽出シタル脂肪及ビ結核菌ニ作用セシメテ次ノ結果ヲ得タリ。

「クロロホルム」ヲ以テ抽出シタル結核菌ノ脂肪ヲ「エピクロールヒドリン」ノ中ニ入レ之レヲ孵卵器ノ中ニ放置スルトキハ其脂肪ノ一部分溶解ス、而シテ其溶解シタル脂肪ノ一部ハ之レヲ冷所ニ置ク時ハ無晶形ノ物質トシテ析出ス、此析出

シタル物質ハ暖ムルコトニヨリテ再ビ透明ニ溶解ス、又結核菌ヨリ「エーテル」ヲ以テ抽出シタル脂肪ニ於テモ同樣ノ結果ヲ得タリ。

純粹培養ノ結核菌ヲペトロフノ培地又ハ「グリセリン」肉汁ヨリ取リ之レヲ「エピクロールヒドリン」ノ中ニ入ル、時ハ菌ハ白金線ニ附著シ易クナリ之レヲ試驗管壁ニ摩擦スル時ハ菌ハ甚シク粘稠トナル、此粘稠ナル菌ヲ取リテチール・ガベット氏染色ヲナスニ菌體ハ「エピクロールヒドリン」ヲ作用セシメザル菌ニ比シテ赤染スル部分ガ甚小サクナリ菌體ノ一部分ガ溶崩シタルガ如ク見ユ、此ノ如ク「エピクロールヒドリン」ニテ處置シタルモノヲ二十四時間孵卵器ニ放置シ之レヲ濾過シテ不溶ノ結核菌ヲ取リ、其濾液ニ「アルコホル」ヲ加フル時ハ之レハ「アルコホル」トヨク混合ス、之レニ蒸餾水ヲ加ヘテ振盪スル時ハ「エピクロールヒドリン」ハ管底ニ沈降シ「アルコホル」ハ水ニ移行シテ白色ノ浮遊物ヲ析出ス、之レハ無晶形ニシテ色素ニ染色セザル物質ナリ、「エピクロールヒドリン」ニ溶解シタル結核菌ハカクノ如クニシテ又再ビ之レヲ取リ出ス事ヲ得。(自抄)

第三十、副腎機能ト結核感染

(イ)副腎切除ノ結核感染ニ及ボス影響

(ロ)副腎實質注射ノ結核感染ニ及ボス影響

竹尾結核研究所(所長佐多博士)

加藤謙一

緒言

結核ト副腎トノ關係ハ古來既ニアヂソン氏病ニ於テ人ノ知ル處ナリ、之レ唯副腎結核ノ影響卽チ副腎機能減衰ガ及ボス全身反應ニ外ナラズ、又一面ニ於テ他臟器ノ結核ガ副腎ニ如何ナル變化ヲ及ボスカ卽チ結核毒素ガ副腎機能ニ及ボス關

係ニ就イテハ最近大ニ注目セル處ナリ、之ハ一般結核病理學上前者ヨリモ稍〻重要事トシテ認メラル、モ尙一層重要ナルコトハ正反對ニ副腎機能ノ減衰 (Hypofunktion) 又ハ機能增進 (Hyperfunktion) ガ他ノ臟器結核ニ向ツテ如何ナル局所反應ヲ催起スルカ又結核毒素ガ全身的影響ニ如何ナル效果ヲ來スカノ點ナリ、不幸ニシテ從來此ノ著眼點ヨリ實行サレタル實驗研究少ナシ、結核病機ノ內分泌機能トノ關係ハ種々ナル事實ヨリ推定シ、最モ興味アル事ニシテ例ヘバ結核患者ニ常ニ現ハル、含水炭素物質、代謝變動ノ如キ又ハ結核ト甲狀腺機能トノ關係ノ如キ或ハ結核ト性慾ノ增進又ハ叡智ノ顯現ノ如キハ以ツテ結核ト生殖腺、腦下垂體トノ關係ヲモ推定ス可キモノアルガ如ク是等ノ觀察點ヨリ結核毒素ノ副腎機能ニ及ボス影響如何ヲ研究スルモ亦興味アル事實ナリト信ズルモ尙一層興味アリト見ル可キハ前述ノ如キ副腎機能ノ增減ガ結核病機ニ如何ナル影響ヲ及スヤニ在リ殊ニ況ンヤ副腎ノ臟器製劑卽チ「アドレナリン」ヲ初メ、更ラニ副腎ト密接ナル關係ヲ有スル他ノ內分泌臟器ノ製劑ガ其ノ臨牀的應用ノ多キヲ以ツテモシ副腎機能ノ增減ガ結核病機ヲ變動スルモノトモバ之レ治療上多大ノ效果アルヤ論ナシ、吾人ガ研究ノ目的ハ此ノ著眼點ヨリ發程ス、然レドモ實驗ノ困難ト觀察ノ複雜ハ其ノ進ムニ從ツテ益〻難澁シ、一定ノ研究成績ニ達セン事容易ナラザルヲ知リ得タリ先ヅ副腎機能ノ減退ヲ實現セシメントシテ初メ「モルモット」副腎ノ全切除ヲ行ヒシモ動物ハ其大部分ニ於テ數時間ニシテ死ノ歸轉ヲトルヲ以ツテ其ノ結核感染ノ影響ヲ見ルベキ無シ然ルニ其ノ幾何カノ大サヲ殘留セシムル時ハ動物ハ長時日生存セシメ得タリ依ツテ其ノ結核機轉ヲ觀察セントシテ次ノ實驗ヲ行ヘリ。

第一章　副腎切除ノ結核感染ニ及ボス影響

實驗第一　偏側副腎全切除後ノ結核感染試驗

「モルモット」ノ左側副腎ヲ全切除シ手術後、其ノ健康狀態ニ恢復セシト認メタル時期ニ於テ人型生結核菌ノ一定量ヲ皮下ニ接種シ、其後種々ナル時期ニ於テ撲殺解剖シ結核性病變ノ輕重ヲ非手術動物ノ病變ト比較觀察スルニ兩者ニ於テ特ニ差異的變化ヲ認ムル事ヲ得ズ、然カモ反對側ノ殘存セル副腎ハ代償肥大シ、重量增加、細胞ノ增殖ヲ認ム。

實驗第二　兩側副腎切除後ノ結核感染試驗

「モルモット」ノ兩側副腎ヲ各其ノ一部分ヲ殘留シ二次的ニ之レヲ切除シ、手術完了後其ノ健康狀態ノ恢復セシ時期ニ於テ之レニ人型生結核菌〇・二瓩ヲ皮下ニ接種シ六十日目ニ於テ撲殺解剖シ、手術動物ト非手術動物トノ結核性病變ノ程度ヲ比較スルニ前者ハ後者ヨリ大體ニ於テ輕度ナルヲ認メタリ。

第二章　副腎實質注射ノ結核感染ニ及ボス影響

總テ種々ナル臟器實質注射ガ同種臟器及ビ全身ニ作用スル關係タルヤ複雜ヲ極メ、例ヘバ其ノ注射液ノ製造方法、注射量ノ多少或ハ注射方法ノ如何ニ依リ其ノ效果ヲ異ニスルモノナリ、副腎ニ於テモ亦然リ之レガ結核感染ニ及ボス影響タルヤ種々ナル結果ヲ來タシ然カモ其觀察ノ複雜セルコトハ既ニ豫備試驗ニ於テ實驗セシ所ナリ、本試驗ノ詳細ナル報告ハ之レヲ後日ニ讓リ茲ニ其一部ヲ發表セントス。

第一實驗　牛副腎皮質乳劑注射後ノ結核感染試驗

牛ノ副腎皮質ヲ比較的低溫度ニテ乾燥粉末トナシ其ノ食鹽水乳劑ヲ造リコノ一定量ヲ「モルモット」ノ皮下ニ注射スル時ハ其注射量比較的大ナル時ハ動物ハ非常ナル衰弱ヲ來タシ遂ニ死ノ轉歸ヲトルモノナリ。今其ノ極小量、卽チ注射動物ニ大ナル影響ヲ與ヘザル程度ニ於テ、之レヲ一兩日ノ間隔ヲ置イテ八回注射シ後人型生結核菌ヲ接種シ、一定期間ニ於テ撲殺解剖シ其ノ結核性病變ノ輕重ヲ非注射動物ノソレト比較觀察スルニ前者ハ後者ヨリ臟器結核ノ發生大ナルヲ認メタリ。（自抄）

第三十二對スル附議

醫學博士　有馬頼吉

內分泌腺竝ニ生殖腺ノ生理的機能ト結核病ノ經過トノ關係ハ甚ダ重要ニシテ且ツ大ナル結核研究ノ分野デアリマス。只今承ハル所ニ據レバ副腎製劑ヲ注射スレバ接種結核ノ經過ヲ早メ卽チ生體ニ不良ノ影響ヲ與フルヤウデアリ、尙ホ詳細

ノ研究ヲナスノ興味ヲ有ルモノデ豫後ノ研究ニ於テ其由テ來ル所ノ理論ヲモ明カニサル、ナラバ大ニ有益ナル功業デアルト信ジマス。私共ノ研究室デモ四年前カラ甲狀腺ト接種結核ノ經過トノ關係ヲ研究シテ先ヅ甲狀腺剔出シタル家兎ニ就テ試驗ヲシマシタガ一致シタ結果ニ達シナイ、其原因ハ家兎ノ甲狀腺全剔出手術ガ困難ナノニ在ルト思ッテソレニモ苦心シテ居リマス。オ互ニ精細ノ研究ヲ勵ミマセウ。（自抄）

第三十一、結核感染トランゲルハンス氏島

竹尾結核研究所
松崎香住

結核感染ト含水炭素新陳代謝トノ間ニ一定ノ因果的關係アル可キハ略ボ想像ニ難カラザル處ナリ、殊ニ糖尿病ノ結核感染ニ及ボス惡影響ハ元來好經過ヲトルベキ老人肺癆ガ糖尿病患者ニ現ハレタル場合ニ限リ非常ナル惡結果ヲトルニ對照シテ重要ナル意義ヲ有スルモノト認ム。

一面ニ結核感染ト內分泌機能トノ關係ハ結核感染トランゲルハンス氏島。結核感染ト甲狀腺トノ關係、結核感染ト副腎トノ關係ニ關聯シ其ノ間重要ナル意義ヲ含ムモノト認ム。

偶々所長佐多博士ハ多年來ノ動物實驗中偶然結核罹患動物ガ常ニ膵臟組織檢査ノ際ニラ氏島ノ肥大增殖シツヽアル事實ヲ確認シ其精細ナル研究ヲ余ニ命ゼラレタルニヨリ、海猿ノ結核感染トラ氏島トノ關係ヲ健常動物ノ夫レニ比較シ病理解剖的竝ニ組織學的變態ヲ追究ス。

實驗方法

被檢動物ハ海猿ニシテ可成的體重ノ均一ヲ計リ約三百瓦內外ノモノヲ使用シ、ソノ頭數對照及被驗動物總數二十二頭ニシテ、而テ結核海猿ノ注射量ハ一頭ニ付キ皮下ニ生結核菌〇・三瓩ノ乳劑ヲ注射シ、一ヶ月二ヶ月三ヶ月五ヶ月ノ一定

時日ノ後對照及被驗動物各三頭(三ケ月ハ二頭)ヲ撲殺シ、可及的迅速ニ膵臓ヲ周圍組織ヨリ分離固定後、之ヲ大約同大ノ三部(十二指腸部腸間膜部及脾臓部)ニ分割シ、法ノ如ク「パラフィン」封埋ノ下ニ六「ミクロン」ノ切片ヲ造リ「ヘマトキシリンエオジン」染色ヲ施シテ之ヲ檢鏡セリ。

而シテランゲルハンス氏島ノ測定ニ向ツテハ、全例ニ於テ以上ノ三部別々ニ先ヅ二十視野ニ就テ其數ヲ檢シ、更ニ亦三部別々ニ五十個ノ氏島ニ就テ其ノ長徑幅徑ヲ「ライツ製接眼螺旋測微計」ヲ以ツテ測定シ、結核罹患動物及ビ對照動物ヲ比較シ而シテソノ時期的增減ヲ計量セリ。

總括

元來膵臓ラ氏島モ健常海猪ニ於テ明カナルガ如ク他臓器ト等シク發育ト共ニ一定度迄ノ肥大增殖ヲ伴フモ其割合僅少ナレドモ、一度結核ニ感染セルモノニ於テハ其ノ增大ノ割合健獸ニ比シ顯著ナルモノアルハ之ニ依ツテ結核感染ガ膵臓ラ氏島ノ肥大增殖ヲ催起スル事ハ疑ヒナキ處ナリ。此ノ理由ハ何故ナルカハ、

(第一)結核毒素ガラ氏島ヲ刺戟シテ之ヲ催起スルカ。

或ハ(第二)他ノ内分泌器(副腎甲狀腺等)ヲ障碍シテ其結果全身ノ含水炭素新陳代謝ニ變動ヲ起セル影響トシテノ代償的ニラ氏島ノ肥大增殖セルモノカ之尚研究ヲ要スルモノト信ズ。

唯從來ヨリ知悉セラレタル臨牀的ノ事實トシテ一般ニ四十歳以上ノ者ニハ肺結核ニ良好ノ影響ヲ及ボシ壯年者ノ肺癆ニ比シテ良ナルハ人ノ知ル處ナリ、唯一ツ破格アルハ老年ノ糖尿病患者ニ肺結核ノ現ハレタル場合ナリ、此ノ時ハ妊娠或ハ產後ニ肺結核ノ現ハレタルト等シク亞急性ノ經過ヲトル事ハ人ノ知ル處ナリ。一面亦糖尿病患者ニハ Furunkulose ヲ起シ一般ニ化膿性及壞疽性ノ增進ニ惡影響ヲ及ボス事モ人ノ知ル處ナリ、然ルニモシ結核感染ガ偶然ニラ氏島ノ增大ヲ誘起シ其結果含水炭素新陳代謝ニ一定ノ影響ヲ及ボシテ血中ノ糖分過生ヲ抑壓シタルモノトセバ、其效果ハ結核病機能增進ヲ抑壓スルニ近カル可キカトモ想像セラル、卽結核病機能ニ對スル一種ノ自然的反抗現像トモ認メ得ベキガ如シ。(自抄)

第三十一ニ對スル附議

一、

醫學博士　近藤乾郎

最モ興味アル御口演ニシテラ氏島ノ增殖及肥大ハ自然的防衛作用ナル可ク結核患者ト糖尿病トノ關係ヲ研究スルニ有益ナル仕事ト拜聽ス。（自抄）

二、

醫學博士　森田松兵衛

曾テ糖尿病屍七例ノ膵臟變化ニ就テ研索シ大正九年內科學會ニ報告セシコトアリシガ、ソノ際四例ハ高度ノ肺結核ヲ合併セリ、而シテコノ四例ニ於ケル膵變化ニ於テソノラ氏島ノ變形ハ非常ニ高度ニシテ殆ンドラ氏島消失シテ影ヲ止メザルモノアリ、又ハ非常ニラ氏島ノ形狀小サク、數減少シ中ニハ硝子樣變性等ヲ見タリ。

以上ノラ氏島變化ハ結核ノ爲メニ來レルヤ將タ又糖尿病ヨリシテ來レルヤ、興味アル問題ナリト思惟ス、勿論主トシテ糖尿病ニヨル變化ト思ハル、モ其經過中結核ヲ併發シテ「バンクレアス」ニ刺戟ヲ與ヘ、ソノ結果ラ氏島ノ變化ヲシテ一層高度ナラシメシモノナルヤモ知レズ、兎モ角結核ト膵ソノ他ノ內分泌機能トノ關係ヲ研索スルハ大ニ興味アルコトト思惟ス。（自抄）

三、

醫學博士　佐多愛彥

糖尿病性肺癆患者ニラ氏島ノ萎縮ヲ見ルコトアルハ本實驗ノ成績ト正ニ合致スルモノト信ズ、卽チラ氏島ノ萎縮ガ糖尿病ヲ催起シ、玆ニ肺癆ヲ續發シタルモノト認ム可シ。老人ノ肺癆ハ元來善性ナルモノ多ケレドモ唯糖尿病ヲ患フルモノニ限リ肺癆ヲ續發スルトキハ惡性ニシテ其經過モ亦急ナルコト多シ、卽チ糖ノ出現ヲ一般ニ化膿菌及結核菌ノ繁殖ヲ助

ケ或ハ其毒素形成ヲ促ス處アルベキカ、何レモニセヨ結核感染或ハ肺癆ト含水炭素新陳代謝トノ關係ハ其原因結果相應スルノ上ニ於テ一層ノ觀察研究ヲ要スルモノアルガ如シ。（自抄）

第三十二、肺結核初期變化群（Primärkomplex）

東京帝國大學病理學教室

岡　治　道

結核傳染ニ際シテ現ハル、組織變化ハ免疫ノ過程ニ因リテ異ル事實ハ佐多愛彦博士ガ十數年來主張スル所ナルガ、人體肺結核ノ初期感染ト再感染トガ局所淋巴節ニ對スル態度ト、其各ノ病理解剖的トニ相違スル所アル事ヲ詳細ニ研究シテランケガ（一九一六年）肺結核ノ分類ヲ試ミシ以來ゴーン、プール其他ニ因リテ解剖學的、並ニ臨牀的ニ初期感染ニ於ケルランケノ初期變化群ノ特殊的ナル成立ト其所見トハ追試セラレ、獨墺醫家ノ贊同ヲ得タリ。

著者ハ本邦人ニ於ケル初期變化群ヲ解剖學的ニ檢索シ、ランケ、プール等ノ所見ニ一致スル事ヲ知レリ。卽原發竈ノ、位置各肺葉ニ於テ主トシテ下部ニ多ク、大多數肋膜下又ハ深キモ二糎ニ過ギズ。肺尖ニ見タル事ナク、肺內部ニ見タルモノ稀ナリ。大サ最小麻實大ヨリ、最大櫻實ヲ越ユルモノアリ、多數ハ米粒乃至小豆大ナリ。

組織的變化ヲ原發竈ト再感染トニ於テ比較スルニ原發竈ニ於テハ滲出性病變ヲ主トシ、增殖性變化少ク、速カニ限局シテ特有ナル被膜形成ヲ營ミ、爲メニ多ハ肉眼的ニモ區別シ得可シ、又間質組織ノ破壞ノ度ハ再感染ニ比シテ一般ニ輕度ニシテ、高度ノ石灰沈著ヲ起セルモノニ於テモヨク彈力纖維ノ殘存セルヲ見ル。之レ大ナル原發竈ガ往々護謨腫樣ノ彈力性硬度ヲ有スル原因ナル可ベシト思惟ス。

豌豆大以上ノモノニアリテハ往々被膜ノ一部ヲ破壞シテ階段的ニ發育シ、貝殼狀ニ被膜ノ痕跡ヲ殘存セルヲ見タリ。而シテ周圍ニ多數ノ娘結節ヲ生ズル時ハ被膜ノ形狀必シモプールノ云ヘル如ク定型的ナラズ。

乾酪性變性ハ石灰沈著ニヨリテ白堊化シ遂ニ刀ニテ切ルコト能ハザル硬度ニ至リ、漸次骨化ス。脂肪髓ヲ有ス。初期感染ガ速カニ全身ニ傳播スル場合ニハ原發竈ノ鑑別困難ナリ。（自抄）

第三十二ニ對スル附議

尹　治　衡

肺結核ノ治療法ヲ考研スベク、動物ニ人工的ニ血行傳染ニ依ル結核ヲ成立セシメタル場合ニ於テ、討論者ノ實驗例ニ於テモ、又同教室ニ於テ他自的ニ結核ヲ成立セシメタル動物ニ於テ（キョルテ及トオッピヒ氏實驗例）モ、悉ク全數ニ亙リ肺門部淋巴腺ノ結核形成ナキヲ認メリ、（ブレスラウ大學病理學教室）間質殊ニ彈力纖維ガ血行傳染ノ場合ニ早期ニ溶解セラレ空氣傳染ノ場合ニ長ク保存セラレル事ハ討論者モ之ヲ認ム、即血行傳染ニ依ル肺結核病竈（乾酪變性ニ陷レルモノ）ニ於テ早期ニ溶解セラレ染色不良トナルカ又ハ全ク染色セラレザルヲ見ル。（自抄）

特別講演（三）

Untersuchungen einer klinischen Einteilung der Lungentuberkulose.

Von

Prof. Dr. med. **Siegfried Gräff**, Niigata.

Die beste-praktische Klinische Einteilung der Lungentuberkulose ist diejenige, welche brauchbare Merkmale angibt für die Prognose, Therapie und Prophylaxie eines Falles.

Eine solche Einteilung muss Quantität und Qualität der morphologischen Veränderungen berücksichtigen.

Quantitativ müssen die Lungen nach Teilen. nicht nach Lappen unterschieden werden.

Qualitativ sind exsudative und produktive Reaktion zu unterscheiden; wegen ihrer verschiedenen Folgeerscheinungen sind sie prognostisch und therapeutisch sehr verschieden zu beurteilen.

Die Kaverne trübt auf jeden Fall die Prognose sehr schwer und verlangt deshalb mögliche aktive Therapie (Pneumothorax).

Eine nach prognostischen Gesichtspunkten geordnete Einteilung wird angegeben (Münchn. med. Wochenschr. 1921 S. 445).

Die einzelnen Formen können klinisch durch physikalische Untersuchungsmethoden, durch Untersuchung des frischen Sputums und besonders durch die Röntgenplatte weitgehend erkannt werden. (Demonstration von Diapositiven zum Vergleich anatomischer und röntgenologischer Veränderungen aus dem Atlas: Gräff und Küpferle 1923.)

Zu den anatomischen Befunden treten in der Einteilung die Feststellung des Fiebers usw., und besonders des immunbiologischen Zustandes eines jeden Falles.

Hokkaido scheint wegen der ausserordentlichen Trockenheit der Luft und wegen einer günstigen Ernährungsverhältnisse (ausgezeichnete Milch, Butter usw.) besonders geeignet zur Anlage von Lungenheilstätten. *(Autorreferat.)*

第三十三　結核ノ自然感染試驗

竹尾結核研究所(所長佐多博士)
石黑貞正

結核ノ傳染方法並ニ感染經路ニ關シテハ今日迄幾多ノ業績アリ、其研究益々旺トナリ其眞相殆ンド明白トナレルガ如キ觀アルモ未ダ以テ何レノ侵入門戸ヲ最重要視スベキヤニ就キテハ今日尚不明ナル所多シ、演者ハ種々ノ接種法ニヨリテ感染セシメタル海猽ヲ他ノ健康動物ト共棲セシメ可成自然ノ狀態ニ於テ結核ノ感染如何ヲ實驗觀察シ其結果ヲ報告セ

リ。（自抄）

第三十四、頸腺結核並ニ腸間膜腺結核發生機轉ニ就テ

附免疫的素質ト淋巴腺結核發生機轉

竹尾結核研究所（所長佐多博士）
大野内記

余ノ研究ハ腺病(skrofulose)ノ發生觀(Pathogenese)ヲ一層精密ニ確定セントス。從來腺病ハ一種ノ體質病ナリト解釋セル時代モアリシガ近ク淋巴腺結核ガ意義ヲ有スルニ至レリ。茲ニ於テ余ハ所謂淋巴性體質ト淋巴腺結核トノ關係如何亦結核初感染ニ因ル過敏性體質ノ淋巴腺結核發生ニ對スル關係如何。卽先天的體質ト後天的體質（卽チ過敏性乃至免疫性ノ成立）ガ淋巴腺結核ノ發生ニ及ボス影響並ニ淋巴腺通過後ノ感染機轉如何ヲ觀察セン事本研究ノ目的タリ。

I、幼若ナル或ハ成長セル健康動物ニ種々ナル結核感染門ヨリ。

一、小量或ハ大量ノ生結核菌ヲ輸入シタル時淋巴腺ノ反應如何。

二、淋巴腺ヲ通過シタル後ノ感染機轉ハ如何ニ進步發展スルカ。

是ニ依リテ初感染後ノ淋巴腺結核ノ發生及肺結核發生機轉ヲ進及セントス。

II、一定年齡ノ健康動物ヲ結核菌粉皮下注入及內服ニヨリ又ハ死菌喰ニヨリテ一定度ノ過敏性或ハ免疫性ヲ成立セシメ此免疫動物ニ前同樣ノ感染試驗ヲ行ヒ、此場合ニ於ケル淋巴腺ノ反應ト內臟殊ニ肺結核ノ發生機轉ヲ追及シ實驗的ニ立證セントス。

余ガ多數ナル實驗ノ結果ハ如次（試驗動物海猪）。

I、腸間膜腺結核發生機轉。

口腔ノ舌根粘膜上ニ結核菌ヲ滴下シ或ハ喰餌試驗ニ依ルニ其多數ハ直チニ嚥下セラレテ腸間膜腺結核ヲ發生ス、此場合ニ於テ腸結核ヲ發生スル事アリ或ハ然ラザル事アリ此關係ハ但ウレミンスキーガ斷言シタル所ト一致セズ。

又一部ハ頸腺結核ヲ發生ス。

實驗動物中、

A、其小數ハ頸腺竝ニ腸間膜腺結核共ニ發生セズ。

B、稍〻多數ニ於テ頸腺結核ヲ發生シ腸間膜腺結核ヲ發生セズ。

C、大略同樣ノ數ニ於テ頸腺結核ヲ起サズシテ腸間膜腺結核ヲ發生ス。

D、一定數ニ於テ頸腺結核竝ニ腸間膜腺結核ヲ發生ス。

Ⅱ、頸腺結核發生機轉。

深口腔(扁桃腺)ヨリ或ハ鼻腔ヨリ結核菌ノ進入スルハ人ノ知ル所ナリ、近ク眼結膜感染機轉ニ就テコッホ、バウルガルテン、恩師佐多博士等ニヨリテ高潮セラレ人ノ注目ヲ惹クニ至レリ、諸外國ニ於テモカルメット、ランゲ等二三ノ報告ハアレドモ未ダ小數ニシテ完成セズ。依テ余ハ以上參個ノ進入門戸ガ頸腺結核發生ニヨリテ有スル所ノ意義ノ輕重如何ヲ測定セン事ヲ期シ大小種々ノ菌量ヲ同樣ノ關係ニ於テ或ハ舌根粘膜、鼻腔枯膜、或ハ眼結膜ニ點滴シ、以テ局所反應及部屬的淋巴腺ノ反應如何トヲ追及セリ。而シテ舌根粘膜點滴ノ結果ハ如前述其一部ニ於テ頸腺結核ヲ惹起シ重ニ顎下及淺、深頸腺ヲ侵ス鼻腔粘膜ノ場合ハ多ク深頸腺或ハ淺頸腺ヲ侵シ、眼結膜ノ場合ハ先ヅ側淋巴道ニヨリ大多數ニ於テ耳前腺ヲ侵ス、サレド一部ハ中心淋巴道ニヨリ或ハ一部ハ鼻腔內ニモ入ル可ク場合ニヨリ直接血管ニ入ル場合アルヤモ知レズ、此耳前腺ノ腫大ハハーブガ結膜結核鑑別診斷ノ目標ナリト云ヒシ所ナリ、次デ極メテ迅速ニ淺、深頸腺及鎖骨上窩腺ヲ侵ス。鎖骨上窩腺腫脹ハ舌根及鼻腔ノ時ハ諸頸腺腫脹後遙カニ遲レテ腫脹スルモ、眼感染時ニハ耳前腺腫脹ト共ニ淺、深頸腺、鎖骨上窩腺殆ンド同時ニ著明ニ急劇ニ腫脹スルヲ見ル、余ハ是ヲ以テ結核菌ノ內臟進入ニ對スル重要ナル意義ヲ想定セントス。

以上ノ感染歸轉ニヨリテ屢〻又氣管枝腺ノ腫脹スルヲ見ル此時ニ肺ハ全ク變化ナキカ或ハ漸クニシテ小數ノ幼若ナル結核節ノ新生ヲ見ル事アリ。

余ハ此事實ニヨリテ腫大セル氣管枝腺ハ結核菌感染ノ結果ニ非ズシテ結核菌上頸部進入ノ結果諸頸腺結核發生ニ續發シタルモノト認ム、殊ニ眼結膜感染歸轉ニ於テ眼點滴ハ鼻涙管ヲ通ジタ鼻腔點滴ト同結果ニ終ル疑アルヲ以テ一定數ノ動物ニ向ツテ完全ニ鼻涙管閉塞處置ヲ行ヒ組織的ニ閉鎖狀態ヲ檢査シテ後眼點滴ヲ爲シテモ依然トシテ迅速部屬諸頸腺結核ヲ起シ續テ氣管枝腺ノ著明ナル變化ヲ認メ、他方ニ於テ點滴後一日ニシテ眼結膜下淋巴濾胞細胞內ニ結核菌攝取像ヲ證明セルモ肺臟ノ變化ハ極メテ輕微ナルニ於テオヤ。

故ニ從來人結核ノ病理學的處見ノ結果ヨリ氣管枝或ハ氣管淋巴腺結核ハ必然結核菌ノ氣管枝或ハ肺胞進入ニ由來スルモノナリトノ推斷ハ必ラズシモ正鴻ヲ得タリト信ズル能ハズ。

更ニ研究ヲ要スルハ上述ノ初感染ニヨル諸頸腺結核ノ發生後如何ナル期間ニ於テ此結核菌ガ此淋巴腺ヲ突破シテ腦管ヨリ上大靜脈ニ至リ肺動脈毛細管ヲ經テ肺胞中隔及氣管ノ周圍ニ到著繁殖シ以テ結核節ヲ發生スルカニアリ。

余ガ實驗ノ結果ハ右上頸腺結核發生後何レモ長期間ニ於テ肺結核節ノ發生ヲ惹起スルハ既知ノ如タナルモ又屬ニ短期間ニ發生スル事アリ、殊ニ眼感染ノ場合僅々二十日間ニシテ既ニ結節ノ發生ヲ見タリ、而シテ若シ動物ノ長生スル場合ハ淋巴腺結核ヨリモ反ツテ肺結核ノ高度ニシテ一見肺結核ヲ初感染トシ淋巴腺結核ノ續發ト見ラル、場合モアリ、此時ニ當リ頸腺結核ハ高度ナル程速カニ肺結核發生スルヲ常トスルモ若シ小量ノ菌進入シタル時ハ頸腺結核モ甚ダ輕度或ハ殆ンド無變化ニシテ通過シ比較的急速ニ肺結核ヲ發生スル事アリ、余ノ實驗ニ於テ十萬分ノ一瓩ヲ眼結膜ニ點滴セル場合ニ於テスラ頸腺ニ何等異狀ヲ認メズシテ一ケ月半ノ後ニ肺ニ立派ナル結核節ヲ形成セルヲ見尙百萬分ノ一瓩眼點滴ニ於テモ同樣ニシテ肺臟ニ結節ノ初徵ヲ組織標本ニヨリ證明シタリ。

尙進入門戸ニ於テ常ニ特殊ノ變化ヲ起スヤ否ヤハ更ニ研究スベキ重大問題ナリ、舌根及鼻粘膜點滴ノ場合ハ是ヲ精密ニ檢査スル事至難ナリ、ザレド眼點滴ニアリテハ容易ニ且精確ニ是ヲ觀察シ得ルモノナリ、余ノ實驗ニヨレバ大量ニ於テ

ハ八〇乃至九〇％百分ノ一瓩ニシテ約半數千分一ノ瓩以下ノ場合ハ變化少ナク一萬分ノ一瓩以下ニ於テハ殆ンド無變化ニ通過シテ然カモ一定分量(千分ノ一瓩)以上ハ直チニ淋巴腺結核ヲ起スヲ常トス。而シテ眼結膜結核性ノ變化ノ重ナルモノハ「フリクテン」樣結節、肉芽腫結核性潰瘍等ナリキ。

而シテ成幼年齡的ノ關係ハ尙詳細ナル檢査ヲ要スルト雖余ノ百餘例ノ實驗ニ於テハ一般ニ幼若ナル動物ハ淋巴腺ノ腫脹高度ニシテ肺結核節形成ハ成年動物ニ多シ、サレド例外ハ遁レザル所ニシテ殊ニ幼若ナル動物ニ甚ダ急劇ナル速度ヲ以テ進行性ノ結核ヲ見ル事アリ目下研究中ニシテ斷定シ得ズ。

以上ハ健康動物ニ結核菌ヲ入レタル反應的變化ニシテ卽結核初感染ニ對スル反應的態度ヲ檢知シタルモノナリ。

更ニ進ンデ樞要ナル研究ノ目標ハ結核ノ過敏性或ハ一定度ノ免疫性成立後ノ試獸ガ同樣ノ感染機轉ニ對シテ如何ナル反應及變化ヲ惹起スルカ而シテ此反應ト變化トハ過敏性或ハ免疫性ヲ賦與セラレザル初感染時ノ態度如何ナル點ニ於テ差異ヲ認ムルカヲ比較研究スルニアリ、此差異ヲ詳細ニ觀察セン事ハ極メテ重要ニシテ且興味アル問題ナリ、サレドモ乍遺憾時間ノ關係上要點ノミヲ列擧スルニ止ム。

卽免疫性賦與ノ結果上頸部感染ニ對スル頸腺結核發生ハ健獸ヨリモ一般ニ甚ダ迅速ニ且顯著ナリ殊ニ淋巴腺ノ腫大著ルシク且容易ニ酪變シ又屢〻化膿セルモノサヘアリ、余ノ實驗ニ徵シテモ十五日ニシテ既ニ高度ノ化膿ヲ現セルモノ少ナカラズ、肺結核ノ發生ニ於テモ亦大約是ニ一致ス。(自抄)

第三十四ニ對スル附議

一、

醫學博士　有馬英二

只今ノ御演說ニ就テ御伺致シタイ。ソレハ此ノ感染後肺臟ニ病竈ノ生ズル際ニ頸部淋巴腺ニ何等ノ變化ヲ起サズシテ通過スト信ゼラルヽヤ、或ハ淋巴腺ニハ必ズ病變ヲ起シ然ル後肺臟ニ達スルモノト信ゼラルヽヤ。(自抄)

二、

醫學博士　佐多愛彦

大野學士ノ實驗ハ結核ノ感染機轉ト淋巴腺結核及臓器結核發生ノ關係トヲ精査追究セントスル廣汎ナル研究ヲ目的トスルモノ、一部ニシテ、今茲ニ余等ノ最モ興味アリト信ズルハ上頸部感染門ト頸部諸腺及胸内氣管枝腺トノ關係ヲ精觀シ得可キニアリ、例之バ眼結膜點滴ニ際シ其極メテ少量ヲ以テスレバ往々ニシテ殆ンド部屬淋巴腺ノ腫脹ヲ見ルコト無クシテ直ニ肺ニ結節ヲ生ズルコトアルガ如キ、亦或ハ頸腺ヨリ下行シテ鎖骨上腺及胸腔内氣管枝淋巴腺ノ結核ヲ起シテ後ニ肺結核ヲ發生スルノ狀況ノ如キ、若シ該動物ニシテ永ク生存シ而シテ其肺結節ガ慢性化スルトキハ其以前ニ發生シタル氣管枝腺結核ガ却テ後ニ生ジタル肺結節ニ續發シタルガ如ク誤認セラルヽコト無キヲ保セズ、斯ルハ最近ノ所謂肺結核原發群ノ觀察ニ資スベキ處尠カラズト信ズ。

其他結核菌ノ眼點滴ガ其量ニ應ジ又動物ノ體質ニ應ジテ或ハ侵入門ニ特殊ノ變化ヲ起シタル後淋巴腺ニ侵入シ、或ハ斯ル變化ヲ起スコト無クシテ淋巴血道ニ侵入スルコトアルガ如キ、何レモ皆一層ノ研究ヲ要スル重要ノ問題ナリト信ズルナリ。（自抄）

第三十五、結核菌食餌後ノ腸管通過及血液移行竝臓器感染機轉ノ追究

竹尾結核研究所
大串利一郎

結核感染ノ門戸ハ Koch 以來空氣傳染ニヨル原發肺感染ヲ以テ最重要トシ腸感染ノ最モ輕視セラレタル事人ノ知ル所ナリ。唯 Behring ガ一定ノ想像ヲ以テ腸管侵入機轉ノ輕視スベカラザル事ヲ唱導シタルモ直チニ原發腸結核ノ非常ニ稀有

ナル病理解剖的統計成績ニヨリテ否定セラレ病理學者モ臨牀家モ Behring ノ所說ニ重キヲ置クモノナシ、其ノ當時 Orth ハ Ravinowitz ト共ニ生菌食餌後數時間ヲ經テ其ノ門脈血ヲ採取シ之レヲ海猪ニ接種シ陽性ノ成績ヲ收メタル事アリテ結核菌食餌後腸管ヨリ門脈血ニ移行スルノ事實ヲ立證セル事アリシモ爾來此研究ヲ反復セルモノ尠ク唯數年前 T. Koch u. B. Meller 等ノ研究アリシノミ。

佐多博士ハ數年以來此問題ニ興味ヲ有シ先ニ榎、清水兩氏ヲシテ大量ノ結核菌食餌後門脈血中ニ結核菌ガ出現シ來ルヤ否ヲ「アンチホルミン」法デ檢査セシメタルニ比較的多數ニ於テ結核菌ト類似セル小桿狀體ヲ發見シタルモ漸次觀察ヲ重ヌルニ從ツテ該桿狀體ハ必ズシモ結核菌ト認メ難キ事實アルヲ肯定セザルベカラザルノ事實ニ至リ一度其ノ研究ヲ放棄セリ。然ルニ我熊谷博士ハ更ラニ之レニ屈セズ佐多博士ノ奬勵ニヨリ大量結核菌食餌後ノ腸壁組織的檢査ヲ反復シ遂ニ屢〻發表セルガ如キ確報ヲ得卽チ結核菌食餌後少時間內ニ結核菌ガ上皮細胞ヲ通過シ濾胞內組織間隙腔ニ甚ダ多數ニ侵入シ且ツ組織球ノ爲メニ抱擁セラレツヽアルノ狀ヲ確認シタリ。

依而佐多博士ハ更ラニ進ミテ該結核菌ノ其後ノ運命如何ヲ確實ニ追究セン事ヲ余ニ慫慂セラレタリ。

抑〻結核初感染ニ當リ其健康ナル粘膜ノ侵入門ニ先ヅ原發竈ヲ形成セル後其結核菌ガ淋巴管ヨリ吸收セラレ部屬淋巴腺結核ヲ催起シ、後之レヲ突破シ、胸管ヨリ大靜脈ニ移リ後肺動脈ヨリ肺ノ毛細管ヲ經テ氣胞中隔又ハ氣管枝周圍ノ組織ニ到達スルト認メラルヽハ既往確定ノ意見トナスベキモ、佐多博士ハ久シク既ニカヽル健康粘膜初感染期ノ結核菌侵入ニ際シ該菌ガ必ズシモ其ノ侵入門ニ原發竈ヲ形成スル事ナク殆ンド無反應ニ或ハ極メテ輕易ナル反應ヲ以テ之レヲ突破シ而カモ其ノ少量ガ淋巴管ヨリ吸收セラルヽモ必ズシモ部屬淋巴腺結核ヲ發生スルコトナクシテ之レヲ通過スルニアラルカ或ハ又其侵入門ヨリ直チニ血中ニ侵入スルノ機會アラザルカヲ疑ヒ、少クモ腸管吸收後ノ結核菌ノ運命ヲ追究スルザコトニヨリテ之レヲ推定スルノ機アルコトヲ待テルヤ久シ。

從來病理解剖的及臨牀的觀察ヨリ發シテ原發腸結核ノ甚シク稀ナルコトハ疑フベクモナシ。然レドモ此事實ハ未ダ必ズシモ結核菌腸管侵入ガ常ニ如斯稀有ナルベシト云フノ根據トハナラズ、若シ結核菌ガ佐多博士ノ推定ノ如ク腸管ヨリ吸

收セラレ直チニ門脈ニ侵入スルモノトセバ、必ズシモ腸管ノ原發結核ヲ起スコトナクシテ結核感染ノ機會ヲ起シ得ルモノト認メザルベカラズ。

從來又小兒ニ於テハ屢〻食餌結核菌ガ腸結核ヲ起スコトナク直チニ腸間膜腺結核ヲ誘發スルコトアルベキヲ推定セラレザルニハアラザルモ、之レスラ屢〻人ニ疑ハレ其ノ腸管通過ニ際シ他日瘢痕ヲ以テ治癒スベキ原發結核ヲ起セル後淋巴管ヲ經テ腸間膜腺ニ達スルモノ多シト。

是等ノ推定ヨリ考フレバ結核菌食餌後ノ感染機轉ヲ研究スルニ際シ、數十日ノ期間ヲ經タル後、或ハ腸結核ノ發生ヲ見或ハ腸間膜腺結核ノ發生ヲ見ルガ如キ方法ニ依リテ結核菌侵入後ノ感染機轉ヲ追究セントスルガ如キハ極メテ迂遠ナル方法ニシテ確實ノ根據ヲ與フルニ足ラズ豈ンゾ知ラン結核菌ノ一部ハ同時ニ侵入セル結核菌ガ腸粘膜ニ殘留シテ原發結核ヲ發生スルノ前既ニ短時間内ニ其ノ同伴者ヲ後ニ止メテ長驅急進シ門脈血ヲ經テ肝臟ニ達シ其ノ少數者ガ更ラニ之レヲ突破シ肺臟ニ達シ其ノ極メテ好良ナル培養地ニ到著シ此處ニ原發肺結核ヲ起スノ機會ニ遭遇スルコトアラントハ。

故ニ余ノ研究ニ於テ生死結核菌ノ大量ヲ成熟セル家兎ニ食餌セシメ二十四時間乃至七十二時間後ニ於テ其ノ門脈血乳糜ヲ採取シ獨リ疑惑ノ結果ヲ收メ易キ「アンチホルミン」法ニヨルノミナラズ確實ナル顯微鏡的所見ノ成績ヲ收メ得ベキ塗抹染色法ニヨリテ實證ヲ擧ゲンコトヲ豫期シ、更ラニ進ミテ肝臟及肺臟ノ切片ニヨリ或ハ其ノ毛細管腔、毛細管内皮細胞、毛細管外組織細胞ニ結核菌ノ一定數ヲ確認スルコトアルヲ豫期シ、豫期ノ成績ヲ收メタリ。

余ノ實驗成績ニアリテモ先ニ熊谷博士ガ報告セシ如ク、結核菌ノ侵入門戸ハ粘膜淋巴濾胞ニシテ殊ニ盲腸部及蟲樣突起ノ上皮細胞ヲ通過シテ容易ニ侵入シ、組織球或ハ網狀織細胞ニ多數攝取セラレ、而カモ侵入部ニ何等ノ反應ナキハ特ニ注目ニ値ス、是レ健康ナル腸粘膜ノ結核初感染期ニ於テハ結核菌ハ侵入門ニ原發病竈ヲ造ラズト云フ佐多博士ノ考察ヲ證スルニ足ル可シ。

門脈血ハ「アンチホルミン」法及塗抹染色法ニ於テ既ニ二十四時間後ニ結核菌ヲ確認セリ、而シテ尙血中ノ菌ノ有無ヲ確定センガタメ、門脈血ヲ海猽ノ皮下ニ接種セシニ、明カニ腺結核ヲ惹起セリ。乳糜及淋巴腺ニ於テモ時々結核菌ヲ證明シ

得タリ。

肝臓ハ二十四時間後ニ於テハ恒ニ之レヲ證明シ、星芒細胞ハ多數結核菌ヲ攝取シ日ヲ經ルニ從ツテ菌體ハ變形ヲ呈セリ又肝細胞ニモ結核菌ノ侵入セル像ヲ確認シ得タリ。之レ肝細胞ハ其ノ機能上血液ヨリ膽汁ヲ造リ膽管ニ排泄スルガタメ血液肝細胞間ニ一定ノ液體交流アリト見ルヲ得ベク爲メニ血中ノ結核菌ガ肝細胞ニ侵入シ得タリト解スベキナリ。

肺臓ノ組織切片ニ就キテ精細ナル檢査ヲ遂行シタルモ四十八時間後ニ於テモ菌ヲ檢索シ得ズ七十二時間後ニ至リテ毛細血管腔ニ存スルヲ確認シタリ。

要之、健康ナル腸粘膜ノ結核初感染ニ於テハ、結核菌ハ侵入門ニ原發竈ヲ造ラズシテ無反應ニ突破シ、而カモ結核菌ノ少部ハ淋巴道ニ侵入シ得ルモ、大部ハ門脈血中ニ移行シテ一種ノ結核菌敗血症ヲ惹起ス、而シテ血中ノ菌ハ日ヲ經ルト共ニ減少シ肝ノ星芒細胞ハ之レヲ攝取シ滅殺スルノ傾向ヲ有セリ。然レドモ肝ヲ突破セル少數ノ菌ハ長驅急進シテ肺ニ達シ、コノ極メテ良好ナル培養地ニ到著シ此處ニ原發肺結核ヲ起シ得ルノ機轉ヲ造リタリ。即本研究ニ由リテ明カニ結核菌ノ腸感染ニ因スル血行性肺結核ヲ起シ得ルコトヲ確信シ、肺癆發生上ニ一新知見ヲ得タリト信ズルモノナリ。

（自抄）

第三十五ニ對スル附議

一、

醫學博士　有馬賴吉

結核感染門問題ハ結核研究ノ中デモ殊ニ重要ナル部分デアリマスカラ此方面ノ研究ノ結果ニ據ル主張ハ殊更愼重デナケレバナラヌモノト思ヒマス。私共ノ所デモ數年來種々ニ考察致シマシテ扁桃腺及ビ其附近ノ淋巴裝置ガ此ノ關係デハ特ニ重要ナル役目ヲ演ズルモノデアラウトイフ見當ノ下ニ靑山ガ主トシテ之ヲ研究シ、既ニ一再發表モ致シタコトデアリマス。大串君ノ唯今ノ業績ハ熊谷博士以來ノ竹尾研究所ニ於ケル繼續研究デアツテ非常ニ結構ナ研究デアルコトハ申ス

マデモナク、其內容ト事實ニ就テハ私一言モ異議ハアリマセンガ、『此業績ニヨツテ「フチゼオゲ子イチッシュ」ニ結核感染門問題ヲ解決シタルモノト謂ツテヨイ』トイフ御主張ハ少シクオ控ヘニナツタ方ガヨクハナイカト思ヒマス。（自抄）

一、

尹　治　衡

一、家兎ノ口腔粘膜ニ病變ヲ起ス事ナクシテ深部ニ結核菌ガ達シ得ル事ハブレスラウ大學ヘンケ氏教室ノ業績ニ依リ明確トナレリ。

二、血中ニ流入シタル結核菌ノ分布竝ニ發病狀態ガ肺ニ於テ著シク殆ンド全數ニ於テ兩肺ニ結核ヲ成立シ極ク稀ニ然モ晩期ニ肝、腎ニ結核ノ成立ヲ認メタリ（實驗事實）。卽チ他ノ藥物或ハ異物ノ分布ト異リ、肺組織ハ結核ニ對シ特殊ノ「アフィニテート」ガアル如シ（濾過沈澱ノ理學的作用ノ外）、又人類結核ノ成立ノ場合ヲ考フレバ、淋巴流或ハ靜脈流ニ依リ右心室ヲ經由シテ肺ニ達スルモノデアツテ肺ニ病變ナクシテ左心臟若クハ動脈血ニ結核菌ノ現ハル、事ハ殆ンドナイノデアル。從ツテ耳靜脈感染ハ自然ノ場合ニ近シト思フ。

三、肺門部淋巴腺ノ結核ハ血行傳染ノ肺結核ヲ有スル者ニ於テ全部之レヲ缺如セルヲ認メタリ。依ツテ佐多博士ノ如ク私モ肺門部淋巴腺結核ハ肺結核ト因果的關係ハアルニシテモ、決シテ肺門部腺結核ガ肺結核ノ原因ニアラザル事ハ確實ナリト思フ。之レ肺門部結核ナクシテ兩肺ニ原發性結核ヲ成立セシメ得タレバナリ。（自抄）

三、

醫學博士　佐　多　愛　彥

余等ハ曩ニ熊谷氏等ノ研究ニ依リテ有形成分殊ニ結核菌ガ食餌後極メテ短時間內ニ腸管壁ヲ透過シテ粘膜ノ上皮細胞間及粘膜、濾胞等ニ侵入停在スルノ狀況ヲ確定シタリシモ、當時該侵入菌ノ將來ノ運命如何ヲ決定スルコト無クシテ止ミタリ。大串氏ノ研究ハ此缺陷ヲ補ヒ肺癆發生觀上一定結論ヲ獲得セントスル余ノ希望ニ副フモノニシテ、曩ニ余等ハ大

量結核菌食餌後ノ門脈血ヲ「アンチホルミン」法ニ依リテ結核菌ヲ檢査シテ比較的短時間内ニ結核菌様體ノ出現アルコトヲ證明シ得タルモ、精觀ノ結果ハ該結核菌様體ハ眞ノ結核菌ニ非ザルヤノ疑アルニ至リ終ニ一度其研究ヲ放棄シタリ。依テ新ニ大串氏ニ研究ヲ開始セシムルニ當リテハ、結核菌胃腸内輸送後ノ門脈血檢査ハ一切「アンチホルミン」ヲ採用セズ、極メテ多數ナル塗抹標本ノ「チール」染色ニ依リテ堅忍努力必ズヤ疑フベカラザル結核菌ヲ確認セズンバ已マザルノ慨ヲ以テ進ムベキヲ奬メ、斯クシテ終ニ食道「ブ、ジー」ヲ以テ胃中ニ多量ノ結核菌ヲ送リタル家兎ノ門脈血中ニハ短時間内ニ正確ナル結核菌ノ出現アリ、亦同ジク短時間内ニ肝臓ノクッペル氏細胞内ニ多數ナル結核菌ノ包擁アリ、次デ亦肺胞中隔ニモ結核菌ノ沈著アルコトヲ確實ニ組織標本ニ依リテ證明スルコトヲ得タリ。

人ノ知ル如ク結核菌胃腸輸送後ノ門脈内侵入ニ關シテハ往時オルト及ラビノウヴィチノ實驗アリ、亦近時メルラー等ノ研究アリ、比較的短時間内ニ其侵入アルコトヲ證明シタルガ如キモ、該實驗ノ一部ハ其結核菌ヲ開腹術ヲ行ヒタル後胃ニ穿刺送入シタルモノニ係リ、斯ノ如キハ其穿刺ノ創口ヨリ極メテ速ニ血管内ニ吸收セラル、ヲ以テ、其後ノ門脈出現ハ決シテ腸管吸收ノ證トスルニ足ラザルコトバイッチガ明確ニ切論シタルガ如シ、此點ニ於テ大串氏ノ研究ハ論難ノ餘地無キモノトス。

又結核菌ノ上頸門侵入及腸管侵入ニ關シ、「モルモット」ニテハ速ニ淋巴血中ニ侵入シ、家兎ニテハ其哺乳期ノ幼兎、或ハ饑餓ニ陷リタルモノ及疲勞セルモノ、外ハ「モルモット」ノ如ク急速ニ侵入スルモノニ非ズト、從來ノ文籍ニ於テ認定セラレタルコトバイッケノ指摘スル處ナレドモ、余等ノ研究ハ熊谷氏ノ研究以來全然是等ノ成績ト異ナリ、結核菌ノ腸管侵入ハ「モルモット」ニ於テ觀察スルコト難ク、亦幼兎ニ於ケルヨリモ成長家兎ニ於テ確認シ易キヲ見ル。

斯クテ大串氏等ノ研究ハ幾多先進ノ研究ト其結果ヲ異ニシ而シテ少クトモ肺癆發生觀ノ一部ニ確實ノ支持點ヲ提供シタルモノト認ム。

（自抄）

第三十六、結核菌成分ノ内服ニ依ル免疫性ノ發生

竹尾結核研究所長
醫學博士　佐多愛彦

余ハ多年「ツベルクリン」ノ内服療法ヲ實施シテ一定ノ效果アルヲ信ズルモノナリ。

勿論「ツベルクリン」ノ腸管内吸收ニ關シテハ相當多數ノ實驗ト、臨牀的觀察トアリテ其間略〻疑フノ餘地無キガ如シト雖ドモ、同學者間尚ホ其間ニ疑惑ヲ插ムモノ無キニ非ズ。

依テ他ノ研究ニ據ルコト無ク自己ノ研究實驗ニ依リテノミ確實ノ證據ヲ提供シ以テ他ノ疑惑者ニ問フ處アルノ必要ヲ感ジタリ。

偶〻余ハ既ニ再三發表シタル余ノ所謂生態粉狀結核菌ヲ以テセル免疫ノ生成ノ實驗ニ際シ、該粉菌ヲ反復皮下或ハ血中ニ注射シタルモノト同樣ニ之ヲ内服セシメタルモノニ就テモ、其數十回數週或ハ數日間内服ノ後ニハ必ズ一定度ノ舊「ツベルクリン」過敏性ノ成立スルコトヲ、健康動物ニ於テハ皮下注射ニ依リテ發熱セザル微量(〇・〇〇五)舊「ツベルクリン」ノ皮下注射ニ依リテ、該粉菌食餌免疫ノ「モルモット」ニ確實ナル體溫昇騰アルコトヲ證明シタリ。

次ニ亦死菌ノ一定量ヲ數週間或ハ數日間反復セシメタルモノニ就テモ必ズ同樣ナル「ツベルクリン」過敏性ノ發現アルコトヲ證明シタリ。

茲ニ示ス處ノ二表ハ該粉菌及死菌食餌「モルモット」ノT。反應ガ粉菌皮下注射後ノ「モルモット」ト大差無キノ關係ヲ示スモノニシテ既ニ再三余ガ各學會ニ於テ揭示シタルモノヽ一部ナリ。依テ余ハ此成績ヲ補ハンガ爲メ左記二樣ノ實驗ヲ企テ本問題ニ向テ全然關知スルコト無キ研究助手古田看護婦長ヲシテ之ヲ實施セシメタリ。

甲、「モルモット」十頭ニ付キ舊「ツベルクリン」〇・五宛ヲ毎日食餌ニ混ジテ十日間内服セシメ後十日間ヲ經過シテT。〇・〇

○五ヲ皮下ニ注射シテ熱反應ヲ見對照獸ト比較ス、十頭中七八頭迄ハ確實ニ熱反應ヲ現ハシ對照獸ハ之ヲ現ハサズ。

乙、「モルモット」十頭ニ少量ノ生菌ヲ接種シ約一ケ月ヲ經タル後該「モルモット」ニT。○・五ヲ頓服セシメ以テ發熱如何ヲ觀察シタルニ確實ノ反應ヲ現ハサズ、依テ更ニ稍〻多量ノ生菌ヲ接種シ一ケ月ノ後一層著明ノ結核ニ罹ラシメタル後T。一・○ヲ一頓ニ內服セシメ以テ熱反應ヲ觀測シタルニ該動物中ノ多數ニ就テハ必ズ確實ノ體溫昇騰ヲ認メ健康獸ニ就テハ之ヲ見ルコト無シ。

右甲乙ノ實驗ヲ比較スルトキハ「ツベルクリン」ハ其反復セル內服ニ依リテ以テ特異ノ抗原作用ヲ動物ニ賦與シ、以テ確實ナル「ツベルクリン」過敏性ヲ成立セシメ而シテ結核感染獸ハ大量「ツベルクリン」ノ內服ニ向テ確實ニ特異ナル反應ヲ催起セラル、モノトス。

然レドモ以上ノ反應發現ハ動物ノ個性ニ依テ差別アルヲ免レズ、各動物必ズ同樣ノ程度ニ於テT。ノ腸管吸收ガ現ハル、ニ非ザルヲ察スベシ。卽チ余ハ以上ノ實驗ニ依リ「ツベルクリン」ノ內服療法ハ確實ノ根據ヲ有スル一種ノ「ツベルクリン」療法タルコトヲ疑ハズ。（自抄）

第三十六ニ對スル附議

一　南　廣　憲

恩師佐多博士ガ十數年以來ノ結核免疫試驗ノ一端トシテ最近結核菌體及舊「ツベルクリン」ノ內服ニヨリテ過敏性ノ發生ヲ立證セラレタルニヨリ、余ハ佐多先生ノ慫慂ニヨリ之レガ比較研究ヲ「チフス」菌ニヨリテ實驗セルモノナリ。

卽チ余ハ多量ノ死「チフス」菌ヲ一定ノ間歇ヲ置キテ內服セシムル時ハ大部分ノ動物ニ於テ高度ナル全身免疫ヲ惹起セシムル事ヲ得タリ、而モ其ノ高度ナル者ニ於テハ死乃至生菌ヲ皮下乃至靜脈內ニ注入シテ高度ナル全身免疫ヲ賦與セシメタルト全ク同樣ナル高度ナル免疫ノ發現ヲ證明シ、其ノ血淸ノ有スル試驗管內諸現象ハ勿論ノ事働的免疫ノ發現トシテ

生及死「チフス」菌ノ靜脈内致死量注入ニ向ツテモ尙ヨク完全ナル免疫性ヲ賦與セシメ得タルコトヲ證明ス。

右ノ事實ニヨリテ余ハ菌種ノ如何ニヨリテハ動物ノ感受性ト相待ツテ内服的免疫ノ成立モ大ニ有意義興味アル結果ヲ齎スコトヲ信ズルモノナリ。

（自抄）

一

醫學博士　川村六郎

豫メ「ツベルクリン」ヲ注射シタル動物ニ「ツベルクリン」ヲ内服セシムルトキハ多少ノ過敏性ヲ證明セラレタリト云フ、然ラバ其際腸粘膜ニ於ケル局所反應ノ有無ハ如何、若シカヽル場合多少ニテモ腸粘膜ニ反應炎症ヲ惹起スルトセバ、「ツベルクリン」劑ノ内服療法ニ當リ注意ヲ要スルモノト考フ。

（自抄）

三

川上理作

余ハ肺結核患者ヲ日常治療ニ從事致シテ居ルモノデアリマスガ、先般大阪血清藥院ノ「グァヤコツベルクリン」ヲ肋膜炎ヲ經過シタル患者ニ一日量〇・五瓦ヲ用ヒテ毎常三八・〇度以下ノ發熱ヲ伴ヒ、コノ藥ヲ服用スルコトヲ停止スレバ無熱トナリ、再ビ用ヒルト又再ビ三七・五度ノ發熱ヲ見、繼續シテ服藥スレバ次第ニ平熱ニ移行スルヲ見タリ。コレハ腸管ヨリ明カニ抗體ノ吸收サレタルモノナリト信ズルモノデアリマス。

（自抄）

第三十七、結核免疫ノ研究（第八報）

豫防接種試驗（其三）

大阪市立刀根山療養所
青山敬二

前回ノ實驗成績ニ鑑ミ、「モルモット」七〇頭ヲ五組(內一組ハ對照)ニ別チAO第二十五號ヲ以テスル結核豫防實驗ヲ企テタリ。其ノ結果ハ未ダ檢鏡ヲ了セザルガ故ニ遽ニ確斷シ得ザレ共、肉眼的ニ既ニ明カナル事實ニ就テ報告ス。

本實驗ニ當ツテハ豫防接種苗ハ前回ト同一ナレ共、其接種回數ト分量ヲ變更シ、感染接種苗ハ前回ノモノヨリ强毒ナル刀根第八號ヲ用ヒテ製セリ。

病變ヲ見ルニ感染接種局所(腹壁皮下)ニ生ジタル潰瘍ノ概シテ豫防接種ヲ施シタル試獸ニ於テハ比較的速ニ治癒シ對照群ニ於テハ然ラズシテ感染後二十週目ノ撲殺時ニ在ツテモ大多數ハ著明ノ潰瘍、稀ニハ膿瘍ヲ有ス。而シテ部位腺ノ病變モ略〻之ト類似ノ關係ヲ示シ、豫防ヲ施セルモノニ在ツテハ比較的速ニ治癒シ對照群ニテハ然ラズ。

豫防處置適當ナリシト思ハル、A組ノ內臟病變ハ概シテ輕度ナルモ時ニ稍〻著明ノ結核ノ侵襲ヲ被レルモノモアリ。又豫防接種方式ノ不適當ナリシト思ハル、モノニ於テハ內臟病變ガ對照ノ大レト大差ナキ程度ニアル所見ヲ往々見タリ。

然レ共此場合ニ於テモ、感染接種局所ト部位腺ノ所見ハ對照ノ夫レニ比シテ多クハ遙カニ良好ナリ。

全體ヲ通ジ、之ヲ前回實驗ノ成績ニ比ベテ甚ダ良好トナスヲ得ザレ共、是ハ主トシテ感染菌ノ毒力ニ因ルモノト信ズ。

然レ共能ク一程度ノ豫防效果ヲ認メシムルモノ尠カラズ。(自抄)

第三十八、「AO」治療試驗動物供覽

大阪市立刀根山療養所
太繩壽郎
谷口修一

家兎二六頭ヲ準備シ、其眼前房內ニ法ノ如ク、人型結核菌刀根第八號株ノ弱酸性寒天培養ヲ、〇・〇〇五瓩、〇・〇〇二瓩、〇・〇〇一瓩ヲ接種シ一週乃至二週ヲ經テ、前房內溷濁虹彩充血、或ハ結節形成ノ徵アルニ至リ、此感染家兎ノ一

部ニハ、「AO」○・一瓩一回或ハ二週ヲ經テ第二回ヲ血管内ニ接種シ、其經過ヲ觀察シタルニ、治療家兎ハ前房内ノ溷濁虹彩炎症容易ニ消散シ結節形成ニ至ラザルモノ多キニ反シ、治療的處置ヲ施サヾルモノハ炎症漸次增進シ、虹彩ノ結節形成顯著トナリ、遂ニハ眼球癆ニ陷ルニ至リタルヲ實驗シ、其家兎ノ一部ヲ供覽セリ。余等ハ尙ホ本試驗ヲ反復實驗中ナリ。(自抄)

第三十九、結核免疫(過敏性)發生ト網狀内皮細胞系統トノ關係

竹尾研究所
南　廣　憲

各種傳染病ニ對スル免疫體發生母地ノ研究ハ今日ノ處諸家ノ研究ニヨリ大體造血臟器ナルコトヲ推斷セラレ、又結核ニ向ツテハ局所的組織反應殊ニ結核節形成ニ關與スル細胞ハ主トシテ組織球及白血球屬ニ屬スルコトハ明白ナリ、又結核毒素ノ全身作用ニ及ブ臟器組織ヲ考フルニ淋巴系殊ニ淋巴腺竝ニ脾臟ナルコトハ明カナル事實ニシテ是等臟器ハ局所結核ノ發生無キ時ニモ屢〻大ナル肥大ヲ起スモノト見ラル、之レ我々ガ結核研究ニ際シ其ノ解剖上往々目擊スル處ナリ、一面又血液像ニ於テモ白血球ノ增多症ヲ見ルガ如ク密接ナル關係ヲ有スルコトヲ知ラル。右ノ諸事實ヨリシテ結核免疫ノ發生ニ向ツテハ他種傳染病ニ於ケルガ如ク網狀内皮細胞系統ガ重大ナル意義ヲ有スルコトハ大略想像ニ難カラズ、殊ニ近來生體染色ノ實驗的研究ニ應用セラル、ニ到リテ以來是等網狀内皮細胞系ノ機能明白トナリ、是等細胞屬ハ體内ニ侵入セル異常及過剩ナル種々ノ物質ヲ攝取シ更ニ之レヲ排除シ、或ハ其ノ一部ヲ細胞内ニ存スル醱酵性成分ニヨリテ分解消化スルノ性能ニヨリ細胞其ノ他ノ抗體之ヲ捕捉シ之レヲ破壞シ無害ナラシムル機能ヲ營ムト同時ニ、更ニ進ンデハ之レニ屬スル反應物質アル抗體形成トナリ得ルコトハ又蓋シ考ヘ得ベキ事實ナリ。

近來漸ク特ニカヽル關係ニ注目セル二、三學者アルモ余モ亦カヽル見地ヨリ發程シテ、此ノ網狀内皮細胞系ト結核免疫

性乃至過敏性ノ發生トノ關係ヲ研究セルモノナリ。

先本研究ノ前段ハ一定ノ方法ニヨリテ網狀細胞系ヲ襲擊侵害シテ其ノ然ラザルモノトノ間ニ現ハル、處ノ免疫發生機轉ノ減弱如何ヲ證明スルノ點ニシテ、此ノ豫想ニ向ツテハ見事ニ立證セラレタリ。卽チ膠樣銀溶液及墨汁ノ靜脈內反復注射ニ依リテ網狀內皮細胞ノ機能ヲ侵害セシムル時ハ、次ニ說明スルガ如ク過敏性發現ガ初メハ非常ニ弱ク且ツ非常ニ遲延シ次ニ漸ク現ハル、コトガ極メテ著明ニ現ハル、モノナリ。

實驗方法トシテハ膠樣銀溶液及墨汁二種ヲ選ビ(之レハ現ニ諸學者ノ研究ニヨリテ網狀內皮細胞系ヲ最モ完全ニ障碍シ以外ノ細胞ニハ變化ヲ與フルコトノ少キモノナリ)之レヲ二群ノ家兎靜脈內ニ反復注射シ是等細胞群ニ一定ノ障碍ヲ與ヘタル後、然ラザル對照動物ト共ニ生結核菌ノ可ナリ大量(一・五瓩)ヲ皮下ニ接種シ尙試獸ニ向ツテハ全試驗期間ヲ通ジ約五日目又ハ七日目每ニ絕エズ注射ヲ續行シ、生菌注入後、二十日、三十五日、八十日、百五十日目等ノ四回ノ期間ニ分チ每期三群ニ對シ〇・〇一瓩ノ舊「ツベルクリン」ヲ皮下ニ接種シ(本量ハ健康動物ニ對シ無反應ナル最大量ニシテ自家特製品ナリ)、其ノ際ニ於ケル「ツベルクリン」過敏性ヲ比較研究セルモノナリ。卽チ生菌接種後二十日目ノ反應ヲ比較スルニ、墨汁及銀液注入群ハ其ノ反應對照ニ比シ遙カニ弱ク三十五日、八十日、百五十日等日數ヲ經ルニ從ヒ全動物ハ一樣ニ其ノ過敏性ヲ增進セシムルモ、試獸二群ハ其ノ過敏性ノ發現非常ニ緩慢徐々トシテ進行スルヲ見ルモ、對照ニ至リテハ過敏性ノ發生他二群ニ比シ非常ニ强ク且ツ速ニ發現スルコト立證セラル。

卽チ百五十日目ニ至テハ對照動物ノ如キハ〇・〇一瓩ノ注入量ニ對シテハ反應非常ニ弱ク卽チ本注入量ニ對シテハ相當强キ過敏性ヲ發現セルコトヲ證明セラル、然レドモ試獸二群ニ在リテハ辛ジテ對照動物ノ二十日乃至三十五日目當時ノ過敏性度ヲ示スニ過ギザルモノニシテ、兩者ノ間過敏性發現狀態上多大ナル懸隔アルコトヲ立證スルモノナリ。

尙本試驗ニ附帶シ各期ニ於ケル血淸內凝集力及補體結合反應等ヲ比較スルニ之レ亦大略過敏性ノ發現現象ハアル程度一致スルモノアルヲ知ルナリ。

以上ノ實驗ニヨリテ網狀內皮細胞ノ機能減弱ガ結核過敏性ノ發現乃至補體結合竝ニ凝集素ノ發現ニ重大ナル關係ヲ有ス

ルコトヲ證セラル。

尙第二段ノ研究トシテハ反對ニ網狀內皮細胞ヲ刺戟スベキ卽チ機能昇進スベキ一定ノ要約ノ下ニ、此ノ試驗ヲ反復スルコトニヨリテ此ノ免疫乃至過敏現象ガ如何ニ昇進スベキモノナルヤヲ立證セントスルモノナリ。

本年以後更ニ此ノ方面ニ向ヒ各種ノ藥物ヲ使用シテ本研究ノ步ヲ進メントスルモノナリ。（自抄）

第四十、結核免疫ト眼感染機轉

竹尾結核研究所（所長佐多博士）
天野勳

結核病變ガ必ズシモ單ニ原型ナル純結節ノミヲ發揮セズシテ時ニ複雜變態ナル滲出型ヲ惹起スル機轉ニ關シテハ種々解說ヲ下サルヽモ何レモ皆未ダ實驗的立證ヲ缺ギ確立スル處ナカリキ。然ルニ佐多博士ハ既ニ古ク初感染ガ再感染ニ及ボス病型變化ニ著目セラレ解剖的及ビ組織的ニ研究シ、其ノ由來ヲ結核初感染後一定度免疫發生卽チ過敏反應ニ歸シ確實ニ動物實驗的ニ證明セラレタル處ニシテ、多年佐多博士ガ高調セラレタル結核感染三期分類觀ノ根柢タリ。此ノコトハ延イテ複雜變態ナル結核性眼疾患ヲ容易ニ解決セシメタリ。

演者ハ數年來結核ノ血行性感染ニ因ル諸臟器ノ菌ノ分佈ト組織反應ヲ比較探究セン目的ニ向テ公平ナル生結核菌心臟左室注入試驗ヲ選ビ觀察中、臨牀上眼疾患ノ甚ダ多ク惹起セルニ驚キ就中虹彩結核及「フリクテン」ノ發生ハ最モ興味ヲ引キタル事實ナリ。然レドモ健常獸ニ惹起セシメタル該「フリクテン」ハ治癒消失ノ徵ナク永ク遺殘シ人類ノソレト甚ダ趣ヲ異ニセル疑義ニ向ツテ、演者ハ人類「フリクテン」ノ發生機轉ヲ想到スレバ或ハ一定度免疫發生ガ病型變化成立ニ向ツテ重大意義アルモノニアラザルヤト想定シ、生態粉狀結核菌及舊「ツベルクリン」ニ依ル免疫獸ト對照獸トヲ使用シテ、演者元來ノ上記目的ニ向ツテ突進研究中殊ニ諸臟器ハ勿論ナルモ、就中眼結核ニ於テ臨牀的竝ニ組織的ニ余ノ考察ノ事

實ナルコトヲ證明シコヽニ其ノ實驗成績ヲ報告セントス。

(イ)健常「モルモット」ノ全部ハ虹彩ニ散在性粟粒大ノ結節ヲ發見セルニ反シ、一定度免疫セル「モルモット」ニ於テハ大多數滲出物其ノ主要症候ニシテ結核節ヲ認メズ(十八例中二例ニ滲出物ト同時ニ結節ヲ發見セリ)。

(ロ)健常「モルモット」ノ「フリクテン」樣結節ハ治癒消失ノ徵ナク永ク殘留シ人類「フリクテン」樣結節ト其ノ趣ヲ異ニセルモ、一定度免疫セル「モルモット」ハ出現後數日中ニ消失シ且「フリクテン」ノ發現頭數健常ニ比シテ遙カニ勝ル。

(ハ)檢鏡上該健常「モルモット」ニ惹起セル「フリクテン」樣結節及葡萄膜結核節ハ主トシテ上皮樣細胞及ビ多數ノ淋巴球ソノ成分ナルニ反シ、一定度免疫「モルモット」ニ於テハ「フリクテン」樣結節ハ單核圓形大細胞主要ナルモ多核白血球亦著明ニシテ淋巴球ハ殆ンド見當ラズ、而シテ浸潤竈ノ內外ノ血管ハ充血甚ダシク而シテ「フリクテン」組織中ニ結核菌ヲ證明シ臨牀上迅速消失ノ招來セル所以ヲ想起セシムル組織像ヲ呈ス、葡萄膜ハ瀰蔓性ノ浸潤ノタメニ肥厚シ且血管擴張充血一般ニ炎性症候極メテ强烈ニシテ、而シテ該浸潤ハ主トシテ單核圓形大細胞ニシテ全ク健常「モルモット」ノ病機ト異リ滲出及增殖兩程相竝ビ行ハル、モ主トシテ滲出機ニシテ急性炎ノ像ヲ呈ス。

(ニ)免疫「モルモット」ヲ剖檢スルニ催起セル滲出機ハ單ニ眼ノミニ限ラズ同時ニ他ノ臟器肺(乾酪性肺炎)肋膜(纖維素性、出血性炎)ニモ同樣病機ヲ證明ス。

以上實驗的事實ニ據リ、

一、佐多博士ノ同一病原菌ガ同一組織ニ定型(結節)以外ニ特異型ナル滲出型ノ由テ來ル所以ハ一定度免疫發生卽チ過敏反應ノ結果ナリトノ實驗的實證ニ基ク主張竝ニ博士ノ結核感染三期分類中ノ第二期滲出期ニ於ケル滲出性素質ノ出現ヲ眼ニ於テ臨牀竝ビニ組織的ニ確實ニ證明シ得タリト信ズ。

二、該上免疫處置ニヨリテ健常動物ヲ結核過敏性素質ニ變態スルコトニヨリ臨牀竝ニ解剖上人類「フリクテン」ト同樣ノ「フリクテン」樣結節ヲ惹起スルコトヲ得タリ、而シテ該組織中ニ結核菌ヲ證明セリ、尙結核性眼疾患ニ於テ結節及浸潤二型ノ由テ來ル機轉ニ向ツテ實驗的ニ解決ヲ與ヘ得タルモノト信ズ。

三、此ノ研究ハ免疫ガ一定度過敏性反應ヲ起セル故ニ佐多博士ノ第二期滲出性型タリ、更ニ此ノ免疫ヲ高上シ第三期肉芽期ヲ來ス程度ニ到ラシムル時ハ眼反應ガ更ニ滲出性ナラザル纖維性增殖ヲ來ス樣ノ反應ヲ呈スモノナル可キヲ信ズ。

（自抄）

第四十一、結核免疫成立ニ關スル實驗的研究（第一回報告）

東京帝國大學傳染病研究所
仲田一信

著者ハ結核菌ノ毒力ニ對スル後天的ノ抵抗力ニ就テ研究セント企テタリ。實驗的ニ著明ナルハ彼ノコッホ氏現象ニシテ幾多ノ人ニ依リテ試ミラレタリ。而シテ結核感染ナクシテ免疫ヲ得ントスル企テハ只徒勞ニ終ルノミナリキ。而シテ生菌免疫ガベーリング、フリードマン、ウーレンフート、ゼルター等多クノ人ニヨリテ試ミラレ近日有馬博士等ハ「サポニン」培養ニヨリテ多年研究セラレ既ニ數回ノ報告アリ。然レドモ死菌ニヨリテモ免疫ヲ得ルトノ報告モ少カラズ。惟フニ何ガ故ニ生菌ガ必要ナルカ、イカニシテ免疫ガ成立シ、イカナル機轉ニ於テ免疫ナル現象ヲ表示スルカ、又ソレガ如何ニシテ結核病竈ニ影響ヲ與ヘ得ベキカ、コレラノ根本問題ニ關シテハ未ダ確實ナル觀念ヲ得ル能ハズ。

余ハ第一ニ初感染ノ菌量ト其レニヨリ生ズル免疫トノ關係、第二ニ初感染後ノ經過時日ニ就テ實驗セル所ヲ第一回報告トシテ述ベントス。

先ヅ免疫測定法ニハ從來完全ナル者ナシ。通常行ハル、第二次感染ニヨル全身臟器ノ結核性病變ノ輕重ニ依リテ之ヲ定メントスルコトハ判斷困難ナルハ實際ニ研究ニ從事スル者ノ等シク認ムル所ニシテ、更ラニ、第二次感染ニ依リテモ免疫ハ成立スル者ニシテ、關係ハ複雜ナリ、尙、全身的變化ニ依リテ免疫ヲ見ント欲スレバ、第一次感染ニ極メテ弱毒ノ者ヲ用ヒザル可カラズ。傳染病研究所ニ於テ弘重氏ハ結核動物ニ於ケル「レフラクタリテート」ヲ測定シテ以テ免疫測定

ヲ行ヒタリ、余モ之ヲ追試シテ全然一致セル結果ヲ得タリ。

而シテ初感染ノ菌量ト經過ニ就テ詳細ナル關係ヲ知ラントシテ○・一瓩以下各種ノ菌量ヲ注射シテ後、二週間、八週間、六ケ月後ニ於テ再感染ヲ行ヒタルニ、二週間後再注射ノ場合ニハ十分一瓩百分一瓩初感染ノ者ハ高度ノ免疫ヲ示シ千分一瓩初感染ノ者ハ幾分抵抗大ナレドモ、一萬分一瓩以下初感染動物ニテハ免疫ヲ認メ得ズ、八週間、六ケ月後ニ於ケル者ニテハ余ガ用ヒタル青山ニテハ千萬分一瓩以上ニテハ感染シテ著明ナル抵抗ヲ示セドモソレ以下ニテハ對照ト差ナシ。

余ハ更ラニ大量ノ初感染ノ後ニ極メテ早期ニ再感染ヲ行ヒタルニ初感○・一瓩ヲ注射セル動物ニテハ二十四時間後、三日目ニハ免疫ヲ認メザルモ、第四日目ヨリ認メ得タリ、而シテ五・○瓩ヲ注射セル動物ニテハ二十四時間以内ニ高度ノ免疫ヲ生ゼル者ヲ認メタリ。而シテコノ際ニハ未ダロェーメル氏反應ハ陰性ナリキ。（自抄）

特別講演（四）

結核免疫觀ト肺癆發生觀ノ近況

醫學博士　佐多愛彦

一、反應病變トシテノ肺癆

余ハ昨年ノ總會ニ於テ肺癆發生觀ノ變遷ヲ舒シ、其進境ヲ述ベテ余ガ十餘年來ノ結核感染三期分類觀ト對照シ、肺癆ハ結核初感染ノ結果ニ成ル滲出性素質及纖維性素質ニ因スル結核菌再感染ノ反應的病變ト看做スベキモノニシテ、決シテ單純ノ結核肺感染一次的病變ニ非ザルコトヲ詳論セリ。

當時余ハバイッケ等ガ原發肺癆ト續發肺癆ノ名ヲ擧ゲタルヲ非難シ眞ノ肺癆ハ唯ダ續發肺癆ニ限ルベク、其所謂原發肺

癆ナルモノハ眞ノ肺癆ト見ル可ラザル小兒肺結核ナルコトヲ論斷セリ。

果セル哉學界ノ趨勢ハ漸次バイッケノ原發肺癆ノ名ヲ排棄シテランケ等ノ所謂肺ノ結核原發群ノ名ヲ以テ之ヲ指稱スルモノ多キニ至リ、今ヤ眞ノ肺癆ガ結核初感染ノ反應病變タルコトハ何人モ疑フモノ無キニ至リ、アショッフノ如キモ其最近ノ米國雜誌及日獨學藝ニ寄セタルノ論文ニ於テハ明ニ反應的滲出機轉ノ文字ヲ用ヒ、而シテ亦更ニ進ミタル抗力增進ノ結果結核病變ノ變動ヲ來スベク揚言スルニ至リ、余ガ多年ノ主張ニ合致スルニ至レリ。然レドモ其滲出性反應機轉ヲ認ムルノ論者ハ今ヤ甚ダ多キニ拘ハラズ、余ノ所謂纖維性素質ヲ說クモノ未ダ多カラズ、余ハ余等ノ免疫度ヲ一層增强シテ更ニ明ニ之ヲ示說スルノ要アリト信ズ。

二、結核菌ノ進入門

結核菌ノ進入門ヲ呼吸道ニアリト認ムルコッホコル子ット、フリュッゲ等ト、又消化器ニアリト斷ズルバウムガルテンベーリング、而シテ亦之レヲ眼結膜ニ歸セントスルカルメット、バウムガルテン等ト其論ズル處今ニ至リテ必ズシモ合致セズ。可能性ハ共ニ之レヲ認メンモ何レガ最モ優越セルノ進入門ナルヤ、將タ何レガ最モ重要ナルモノナルベキカヲ精究センコトハ今モ尙ホ甚ダ必要ナリ。余ハ切ニ腸管進入血道感染ノ要衝ト、而シテ眼感染淋巴血道移轉ノ緊要トヲ覺知シ實驗シ證明シッヽアリ、更ニ研究ヲ重子テ其肺癆發生ニ及ボス意義如何ヲ一層精密ニ決定スル處アランコトヲ期ス。

三、結核免疫ノ本態

結核ニ眞ノ免疫ヲ發生スルヤ否ヤハ今モ猶學者ノ所見一致セズ。

ノイフェルドハ之ヲ天然痘或ハ實扶的里ニ見ルガ如キ免疫性ヲ全然結核ニ於テ見ルコト無シト云ヒ、卽チ結核菌ニ對スル防禦作用モ亦抗體形成ヲモ否認セリ。

ワッセルマンハ結核菌ニ感染シ主働性病變ヲ形成シッヽアル間ハ「ツベルクリン」過敏性ト結核菌ニ對スル抗性トヲ見ルモ、共ニ極メテ動搖シ易キ不鞏固ノモノニシテ結核病變ガ治癒ニ赴ク中ハ直ニ消失スルモノナリトシ而シテ血淸中ノ抗體ハ更ニ現存セズト謂ヘリ。

ハイエク及クレーメルハ結核過敏性及免疫性ノ成立ト抗體ノ發現トハ否定セズ、健體ハ「ツベルクリン」ニ對スルコト鈍性ニシテ所謂「アヲルギー」ヲ現ハシ感染ノ後過敏性ヲ現ハシ「アルレルギー」トナリ而シテ後更ニ鈍性トナリ「アヲルギー」トナルハ免疫增進ノ結果ナリトシ、「ツベルクリン」療法ハ此「アヲルギー」催起ヲ目標トスル一種ノ免疫療法ナリト斷ゼリ。

又「ツベルクリン」反應ノ本體ニ關シテハウオルフ、アイスヲル等ガ溶解素觀ニ對シワッセルマンノ結核病變組織過敏說アリ。近頃又ゼルテル等ノ刺戟素說アリ其他諸說久シク對峙スルモノ多キ人ノ知ル所ナリ。

更ニ又此「ツベルクリン」過敏性ヲ目スルニ特殊結核免疫ノ一特徵ナリトスルモノ、竝ニ亦全然結核免疫ト關係スル處無キ「ペプトン」樣蛋白性物質ニ對スル過敏反應ナリトスルモノトアルコト亦人ノ知ル處ナリ。

四、結核免疫ノ成因

結核免疫ノ生成ヲ豫想シテ結核毒素例ヘバ各種「ツベルクリン」類ノ反復注射ニ依リテ一定ノ免疫ヲ作成シ得ルト信ズル人アリ、舊「ツベルクリン」ヲ用ユルモノ新「ツベルクリン」ヲ用ユルモノ結核菌乳劑ヲ用ユルモノ既ニ久シ、近來ムッフ一派ノ分析セル各種毒素ヲ抗原素トシテ免疫ヲ企圖シタリ。

ウーレンフートハ初メ死菌ノ大量應用ニ依リテ一定ノ免疫生成ヲ企圖シ其ノ成立ヲ信ジタルモ近頃其不可能ヲ悟リシガ如シ。

余ハ曩ニ死菌皮下注射ノ吸收セラレ難ク而シテ屢〻化膿ニ陷ルヲ惱ミ、血管內注射ヲ施シテ肺胞等ニ一定ノ結節ヲ形成セシメ而シテ弱度ノ免疫ヲ企テ得タリト信ゼシコトアリシモ、後亦余ノ生態粉狀結核菌ノ作成ニ依リ此皮下注射或ハ內服ヲ反復シテ確實ニ「ツベルクリン」過敏性ノ發生ヲ證明シ、而シテ之レニ生結核菌ヲ接種シテ其結核感染ノ經過ト病變ト初感染ト異ナレル特徵ヲ帶ビ來ルコトヲ證明シ、余ノ粉狀菌ニ依リテ一定度ノ結核免疫ヲ惹起スルコトノ不可能ナラザルコトヲ立證シ既ニ屢〻之レヲ發表シタリ。

ゼルテルモ亦結核菌ヲ濕潤ノ儘磨碎シテ其毒性ヲ奪ヒタルモノヲ「ヴィタール、ツベルクリン」ト名ケ一定ノ免疫ヲ成立

セシメ得ルト信ジタルコトアリキ。

往時ベーリング及コッホハ其人結核菌種ヨリ成ル「ボヴオワクチン」或ハ「タウルマン」ヲ牛ニ接種シ、特殊ノ病變ヲ起スコト無ク或ハ最輕微ノ病變ヲ起サシメタル後强力ノ牛型菌ニ對スル免疫性ヲ惹起セシメ得ルコトヲ信ジタリシガ、後エーベル等ガ精密ナル再試驗ノ結果ハ此「ワクチン」ノ豫防力ハ甚ダ不充分ニシテ採ルニ足ラザルヲ知ルニ至リ、近時ウーレンフート及ゼルテルハ何レモ强力ノ牛型菌種ヲ「ワクチン」トシテ採用スル必要ヲ唱フルニ至レリ。

更ニ又カルメット及グエリンハ其膽汁加培養或ハ馬鈴薯培養ノ無力結核菌ヲ血管內ニ注射スレバ其動物ハ特殊ノ結核變化ヲ起スコト無キモ、該生菌ガ體內ニ存スル間免疫性ヲ發生維持シ然モ該菌ハ暫時ニシテ動物體ヨリ排泄セラレ此排泄ト共ニ成立セル免疫性ノ消滅スルコトヲ報ジタリ。

吾有馬博士等ノ特殊培養結核菌モ亦或ハ斯ル類ノモノニハ非ザルベキカ更ニ研究ヲ要スベシ。

更ニ又ノイフェルドハ傳染病原中特異ノ免疫ヲ形成シ難キ一屬トシテ黴毒「ロッツ」連鎖菌病等ヲ擧ゲ結核モ亦這類ニ屬スルニ非ズヤト斷ジタリ。

要スルニ結核ノ免疫性ハ更ニ成立セザルモノトシテ全然其成立ヲ否定スルノイフェルドノ如キアリ、或ハ一定度ノ抗力ヲ認定スルモ其成立ハ結核病竈ニ發現ニ限局シ且ツ極メテ移動的ニシテ病變ノ治癒後直ニ消失スルト認ムルワッセルマンノ如キアリ、或ハ無力結核菌ノ體內生存中ノミ免疫ノ現存ヲ認ムルカルメットノ如キアリ、或ハ强力ノ菌種ヲ以テノミ免疫ヲ企圖シ得ベシト信ズルガ如キウーレンフート及ゼルテルノ如キアリ、或ハ亦結核感染ノ治癒後猶ホ一定期間ノ免疫性ノ存續ヲ認ムルハイエク及クレーメルノ如キアリ、其間更ニ一致スル處無シ。

五、初感染ト再感染(外的及內的)

肺癆ガ初感染ニ因スル免疫的素地ニ行ハル、再感染ノ續發病變タルコトハ今ヤ疑フノ餘地無キモ、其初感染ト再感染ノ關係如何而シテ其初感染ハ何レニ起リタルヤハ之ヲ決定センコト容易ナラズ。

ランケ、コーン等ノ研究ニ依リ亦プールノ觀察ニ依リ彼等ノ所謂原發群ノ變化特徵ハ今ヤ大ニ闡明セラレタルモ、其原

發群ガ果シテ全身感染ノ第一歩ナルベキヤ否ヤ、或ハ之レニ先チ既ニ眼或ハ腸等ニ輕ク經過シテ治癒シタル或ハ輕易ノ瘢痕ヲ殘シタル原發感染竈アラザリシヤハ之レヲ窺知スルニ由無シ。否余等ノ歩一歩進ミツヽアル實驗ノ結果ハ寧ロ肺以外ニ初發感染門或ハ原發感染竈ノ現存アルコト疑フ可ラザルニ似タリ、吾人ハ今年以後ノ研究ヲ以テ本問題ヲ決スルノ機アランコトヲ希フ。

又其再感染ヲ內的感染卽チ轉移ノ一種ト認ムルベーリング、ロエーメル、グラッス、ゴーンノ如キアリ、他面亦其外的再感染ヲ重視スルバイッケ、アショッフノ如キアリ、亦必ズシモ一致セズ。

六、結核(肺癆)患者及結核死亡者ノ減少及其因由

此統計的事實ニ著目シタルアショッフハ肺癆ノ外發的再感染說ニ重キヲ置キ、文明的ノ結核豫防施設ガ此外發再感染ノ重複セル危險ヲ輕減シタル結果ナリトセリ。

又クルーゼ等ハ此減少率ハコッホノ結核菌發見前ヨリ既ニ發現セル現象ニシテ結核豫防施設ノ結果ニ依ルニ非ズ、寧ロ文明國民ノ衞生思想ノ發達ト國民健康程度ノ增進トヲ此眞因ナリト斷ジタリ。

余ヲ以テ見ルトキハ寧ロ或ハ結核ノ播布大ニ加ハリ文明人ノ多數ハ一定度ノ豫防接種ノ洗禮ヲ受ケ、小兒期時代重劇トナリ或ハ死ヲ免レタルモノハ成人ニ至リテ肺癆ニ罹ルモ、其一部ハ既ニ小兒期ヨリノ感染免疫ノ成立ニ依リテ慢性トナリ善性トナリ而シテ治癒スルモノ漸次多キヲ致セルノ結果ニ非ズヤト信ゼラル。(自抄)

閉會ノ辭

會長　醫學博士　佐多愛彥

第二回總會ハ會員各位殊ニ出演者諸君ノ熱心ト努力トニ依リテ幸ニ其行程ヲ終了シ、多數ノ興味アル演說及意義アル討論ヲ完了セリ、殊ニ特別講演ハ余自身ノモノヲ除キ他ハ何レモ極メテ價値アル有益ノ演說ニシテ會員ヲ裨益シ學界ニ貢

獻スル處尠ラズ、本會ノ名ニ於テ佐藤秀三、藤浪剛一及グレッフノ諸博士ニ向テ謹デ感謝ノ意ヲ表ス。

本年度ノ演說討論ハ何レモ結核ノ感染、免疫及肺癆ノ發生竝豫防及治療、結核菌ノ生物學的研究及結核ノ臨牀的觀察竝治療法ヨリ其實驗的研究ニ及ビ內分泌ヨリ化學的研究ニ至リ、何レモ最近結核研究ノ趨勢ト合致シテ其方針ヲ示スニ足リ、獨リ本學會ノ進境ヲ示スノミナラズ亦以テ一般學界ニ貢獻スル處尠ラズト信ズ。

特ニ來年度ノ宿題トシテ最近ノ重要問題タル初感染ト再感染トノ關係及意義ヲ病理解剖學的方面、臨牀的方面及實驗的方面ノ三方面ヨリ綜合研究シ、而シテ亦此宿題擔當者ノ外一般會員中特ニ此問題ニ就キテ研究セルモノニ向テ宿題報告者ニ近キ時間ヲ與ヘ、汎ク演說討論ノ參加ヲ促サントスルノ新方針ヲ立テタルハ最モ喜ブベシ。庶幾クハ會員各位ノ熱心ナル協力ニ依リテ效果ヲ齎スニ至ランコトヲ。

來年度ノ開會地ハ九州ノ主都九州大學ノ所在地福岡市タリ、會長ハ同大學敎授武谷博士タリ、必ズヤ斡旋宜シキヲ得テ前二會ニ優ルノ盛況ヲ見ルナルベシ。

會員諸君自重加餐一層ノ勢ヲ以テ來年ノ學會ニ參加セラレンコトヲ祈リテ已マザルナリ。

統計

災後ニ於ケル結核患者數ニ就テ

內務技師　佐藤　正

這般ノ震災ニ因ル過勞睡眠不足榮養不良生活環境ノ非衞生物資ノ缺乏精神ノ過勞等ノ災害事變ニ伴ヒテ發生スル諸種ノ非常生活現象ガ身體及ビ精神上ニ極メテ不凶ナル影響ヲ與ヘシハ何人モ否ムベカラザル處ニシテ災後ニ於ケル公衆衞生上ノ對象ヲ講ズルニ當ツテハ此等生活狀態ヲシテ非衞生的ニ陷入ラシムル因子ニ遡リテ周到ナル攻究ヲナス要アリ、結核症ノ如ク病根ノ比較的汎ク各年齡級ニ蔓布スル疾患ニアリテハ一旦病勢發生ニ對スル內外ノ素因ヲ增强セシムルガ如キ動機ノ存續センカ最容易ニ潛存セル病禍ノ發顯ヲ見ルニ至ルベキハ自然ノ數ナルベシ既ニ震災救療事務ノ實績ニ徵スルモ災後日ヲ重ネ月ヲ經ルニ隨ヒテ臨時的ナル外傷患者ハ逐次漸減シ之レニ換フルニ內科的疾患ノ增加セルヲ觀タリ此ノ事實ニ徵スルモ敍上ノ諸生活條件ハ漸次各種ノ病理現象ヲ誘發セシムル素因トシテ影響セルアルヲ知ルベシ結核症ノ如キ慢性的疾患ハ比較的長時期ニ亙リテ其經過ヲ觀察シソノ發顯ヲ知悉スベキモノナレバ今遽カニ是等災害ニヨル諸誘因ノ結核症蔓延ニ及ボス影響ヲ推知スルコト困難ニシテ尋ロ向後數年ノ間ニト知スベキヲ妥當ナリト信ズ然レドモ現在ノ如キ諸所ニ於ケル治療機關施設ノ殆各救療團體ニヨリテ行ハル、狀態ニアリテハ諸種取扱患者ニツキ結核症ト診定セラレタル患者數ヲ調査スルニ於テ病勢調査上比較的統一セル成績ヲ得ル便宜ノアルベク且ツ病毒蔓延ニ對スル考察上幾多ノ意義アルモノナルヲ知リ玆ニ警視廳、東京市、濟生會等ニ於ケル救療施設ニツキ簡單ナル患者數調査ヲ試ミタリ、素ヨリ非常混亂ノ秋特ニ各種ノ條件ヲ具備セル統計的調査ニ非ズ單ニ參考ノ一端ニ供センノミ。

一、警視廳施設診療班ニ於ケル取扱患者

警視廳ハ災後ニ於ケル救療施設ヲ時日ノ經過ト四周ノ狀勢ニ鑑ミ漸次組織的ニシ九月二十五日頃ヨリ約百個ノ診療班完成ヲ見、十一月末日ニハ之ヲ閉鎖スルニ到レリ今此ノ百個ノ「警視廳診療班」開始ヨリ閉鎖ニ至ル約二ケ月間ニ於ケル取扱患者(外來診療患者)病歷ヨリ調査スレバ、

	診療各種患者總數(自大正十二年九月二十五日至大正十二年十一月二十五日)	(總患者ニ對スル千分比)
男	一四八、〇六五人	五四九・六九
女	八一、三九〇人	四五〇・三一
一、肺結核患者數	六六、六七五人	六・七一
男	九九四人	三・六一
女	五三四人	三・一一
二、爾他結核患者數	四六〇人	五・六〇
男	八二九人	三・一七
女	四六九人	二・四三
三、結核患者總數(一)(二)ヲ合計セルモノ	三六〇人	一二・三一
男	一、八二三人	六・七七
女	一、〇〇三人	五・五四
	八二〇人	

是レニ由ツテ觀ルニ警視廳診療班ヲ中心トシテ九月ヨリ十一月ノ二箇月ニ亙リ觀察セル結核症外來患者數ハ一、八二三名ニシテ此期間ニ於ケル各種患者總數一四八、〇六五名ニ對シテ對比ヲ見ルニ後者各種患者千名ニ對シ結核患者ハ一二・三名存在ス其ノ內肺結核患者實數ハ九九四名(總患對千分比六・七一)爾他ノ各型結核ヲ合計セルモノ八二九名(總患

者對千分比五・六〇）ナリ。

（百班ノ各診療班ニ於ケル患者明細表ハ之ヲ略ス）。

二、東京市外來診療所ニ於ケル調査

東京市衞生課ハ市内ノ各區適當ナル場所ニ市外來診療所ヲ開設シ各種ノ外來患者診療ニ從事セリ、此等外來診療所ノ數ハ全市ヲ通ジテ五十餘ニ上レリ、依リテ各診療所ニ依頼シテ昨年十二月上旬ヲ期シ適當ナル日時二日間ニ亙リ外來患者ノ一齊調査ヲ行ヒ其中ヨリ外來結核患者ノ數ヲ集輯セリ期日ノ選定ニ就テハ各診療所周圍ノ情況ニヨリ再來患者ノ重復ヲ避ケンコトニ努メタリ、元來市外來診療所ハ主トシテ各區ニ於ケル公營假設住宅（各集團「バラック」）ヲ中心トシ該「バラック」生活者及ソノ附近住民ノ診療ニ從事セルナリ。

市外來診療所ハ全數ニテ五十一箇ナルガ其中調査未成ノモノ三箇所ヲ除キ四十八箇所ニ於ケル成績概括次ノ如シ。

診療各種患者總數（十二月七日ヨリ十二日ニ至ル一週日中適宜選定セル二日間ノ取扱實數）　一一、六六二人

一日平均　五、八三一人

一、肺結核患者數　七三人

二、喉頭結核患者數　七人

二、爾他結核患者數　四九人

四、結核患者總數（(一)(二)(三)ヲ合計セルモノ）　一二九人

一日平均結核患者總數　六五人

結核患者總數ノ診療各種患者總數ニ對スル千分比　一一・一五

故ニ本調査ニヨレバ結核患者ガ便宜ナル市外來診療所ヲ訪問治療ヲ講ズル狀況ヲ窺知シ得ベク各種患者總數ニ對シテ千分比一一・一五ヲ算ス、本調査ハ上述ノ如ク再來患者ヲ避ケ且ツ若シ再來患者ナルコトノ明瞭セルモノハ悉ク之ヲ除外ス

ル樣注意セルモノナレバソノ數ハ二日間ニ於ケル取扱新患者ニシテ大體ニ於テ患者分布ノ概勢ヲ察知シ得ベキ一齊調査ナリト信ズ故ニ市外來診療所ニテ取扱ヘル結核新患者ハ一日約六十五名ニシテ一日ノ各種疾患者數ハ五、八三一名ナリ、是等ノ結核患者ハ家庭ニアリテ治療ヲ講ゼントスルモノニシテ比較的輕症患者ト見做シ得ベク市設ノ無料診療所アルヲ幸トシテ訪問治療ヲ乞ヘルモノナリ。

（各個診療所ニ於ケル實數表省略）。

尙ホ市內ニハ前記各市外來診療所ノ外ニ下谷池ノ端、大塚等ニ設ケタル東京市簡易診療所、上野臨時產院等アリテ診療施設モ比較的完備シ又場所的關係等ヨリ相當多數ノ患者ヲ診療シ且ツ收容スルノ便ヲ得タルガ是等收容患者ノ間ニハ多數ノ結核性患者アリ是等ハ總テ療養上ノ關係ヨリ府下中野ナル東京市結核療養所ニ送致シ療養ノ方法ヲ講ジツヽアリ、今斯カル患者ノ情勢ヤ如何左表ニ於テ略其ノ概況ヲ察知シ得ベシ。

羅災收容結核患者數（大正十二年十二月十五日現在）

府下中野　東京市結核療養所收容

性別＼年齡別	乳兒	自二歲至五歲	自六歲至十歲	自十一歲至十五歲	自十六歲至二十歲	自二十一歲至二十五歲	自二十六歲至三十歲	自三十一歲至四十歲	自四十一歲至五十歲	五十歲以上	計
男			一	八	四二	四四	三五	三四	二一	九	一九四
女			二	八	一九	二四	七	一四	一一	六	九一
計			三	一六	六一	六八	四二	四八	三二	一五	二八五

東京市結核療養所ニ於ケル結核收容患者ハ震災以前ヨリ常ニ入所療養ヲ求ムル者多數ニシテ是等希望者ノ凡テヲ收容シ能ハザル處ナルガ震災ヲ中心トシテ收容患者ニモ多少ノ異動ヲ生ジ殊ニ注目スベキハ震災後ヨリ漸次入所希望患者ノ增加ヲ伴ヒ療養所當事者モ收容シ能フ限リ之レガ希望ヲ充タシ遂ニ「バラック」病舍ノ增設ヲ行フニ至レリ。

次ニ同療養所ニ於ケル大震災ノ勃發シタル九月一日以降ノ患者移動ヲ見ルニ九月十日前後ヨリ患者ノ入所ヲ希望スル者

激増シ毎日五、六名ヨリ十名、十數名ニ及ビ災前自家療養ヲナセシ患者モ震災ニヨリ遽カニ療養ノ途ヲ失ヒ來訪セルニ至レリト推想シ得ベシ。カクテ漸次增加シテ十月二十日現在ノ入所患者、六百七名ニ及ビ之レヲ震災前九月一日收容患者四百六十二名ニ比セシニ百四十五名ノ增加ヲ見タリ(移動表ノ詳細ハ省略)。

三、恩賜財團 濟生會東京府下ニ於ケル調査

恩賜財團 濟生會ガ東京府下ニ開設セル臨時病院診療所等ノ救療機關ハ約四十二ケ所ナリ是等四十二ケ所ニ就テ十二月二十四日及ビ二十五日ノ二日間ニ亙リ外來患者數ノ調査ヲ行ヒ其中肺結核患者及ビ其ノ疑ヒアル患者(コレ外來診察ナレバ直チニ診定シ難キ場合アリト知ルベシ)ヲ調査セルニ左表ノ如キ結果ヲ得タリ。

恩賜財團 濟生會東京府下診療患者及肺結核患者數(大正十二年十二月二十四、五日)

月日	種別	性別	新患者 各種患者	新患者 其内肺結核及其疑アル者	再診以上 各種患者	再診以上 其内肺結核及其疑アル者	入院患者調 各種患者	入院患者調 其内肺結核及其疑アル者
十二月二十四日		男	四五八人	一六人	二、二三〇人	一五四人	四四六人	四五人
		女	四一五	一八	二、一四七	一三七	三〇三	三五
		計	八七三	三四	四、三七七	二九一	七四九	八〇
十二月二十五日		男	四五一	二二	二、一二〇	一三九	四四九	四六
		女	三六九	一八	一、九五八	一三六	二九九	三四
		計	八二〇	四〇	四、〇七八	二七五	七四八	八〇

取扱新患者總數(十二月二十四、五日ニ於ケル) 一、六九三人

一日平均取扱新患者 八四七人

取扱新來肺結核患者 七四人

一日平均取扱新來肺結核患者 三七人

統計

一日ニ於ケル各種新患者數ニ對スル新肺結核患者數ノ千分比　四三・七四

再來各種患者數（一日平均）　三、七二七人

再來肺結核患者數（一日平均）　二八三人

右千分對比　七五・九三

卽チ濟生會ノ施設ヲ中心トシテ觀察スレバ一日ニ同會診療施設ヲ訪問スル各種新患者總數ニ比シテ肺結核新患者數ハ前者千名ニ對シテ四三・七四名ナリ是等患者診定ノ標準ハ大體外來診察ニ於ケルモノナレバ肺結核ト著明ニ診定セラルヽモノ乃至ハ之ニ疑ヲ置クベキ程度ノ輕症者トヲ包含スベシ之レヲ市外來診療所ニ於ケル診療患者數ト比シテ多數ニ上レリ之レ時期ノ差、診療所位置及ビ施設上ノ差、來訪スル患者ノ診療施設ニ對スル心理狀態ノ差、震災後ノ秩序經過ト共ニ慢性的疾患ニ對スル顧慮等種々ナル複雜セル要約ノ關與セル結果ナルベシト推想ス、濟生會ニ於ケル入院患者數ハ素ヨリ限アル施設牀數ニ關係スルモノナレバ實狀ト一致セルモノニアラズ參考ノ爲ニ揭グルノミ。

附錄

恩賜財團　濟生會神奈川縣臨時診療患者及肺結核患者數（大正十二年十二月二十四、五日診療施設十ヶ所ニツキ）

月日	種別	性別	新患者 患者	新患者 其內肺結核及疑似	再診以上 患者	再診以上 其內肺結核及疑似	入院 患者	入院 其內肺結核及疑似
十二月二十四日		男	一五二人	四人	五四三人	三六人	七二人	七人
		女	一五六	三	五九七	二五	七八	二
		計	三〇八	七	一、一四〇	六一	一五〇	九
十二月二十五日		男	一二一	二	五六七	二七	七三	七
		女	一三六	三	六三一	二七	七八	二
		計	二五七	五	一、一九八	五四	一五一	九

要之。以上ノ事項ハ調査方法、場所、時期及時間等不統一ニシテ不確ナル概數調査ニ過ギザレバコレヲ以テ正鵠ヲ得ルモノニアラザルコト勿論ナリ警視廳ニ於ケル調査ヲ除外シテ濟生會、市外來診療所ヲ中心トセル二日間ノ一齊調査ニ觀ルニ大體ニ於テ各科疾患患者千名ニ對シ約十名内外ヨリ四十名内外ノ結核(主トシテ肺結核)患者ノ來訪治療ヲ乞フ者アリト認ムル結果ヲ得タリ其ノ數ノ如何ニ就テハ茲ニ明確ナル論議ヲ避クベシ。

尙ホ震災前ノ調査事實ナレド對照參考トシテ次ノ事實的數ヲ列記シ參照ニ便セン。

結核豫防法ニヨル健康診斷成績

東京府(主トシテ古着、質商、貸本屋等ノ業態者ヲ含ム)

健康診斷ヲ受ケタル人員	一一、三〇一人
同前中患者ト決定セラレタル人員	一五八人
受診者ニ對スル患者千分率	一四人

大正九年中ニ於ケル東京市結核死亡

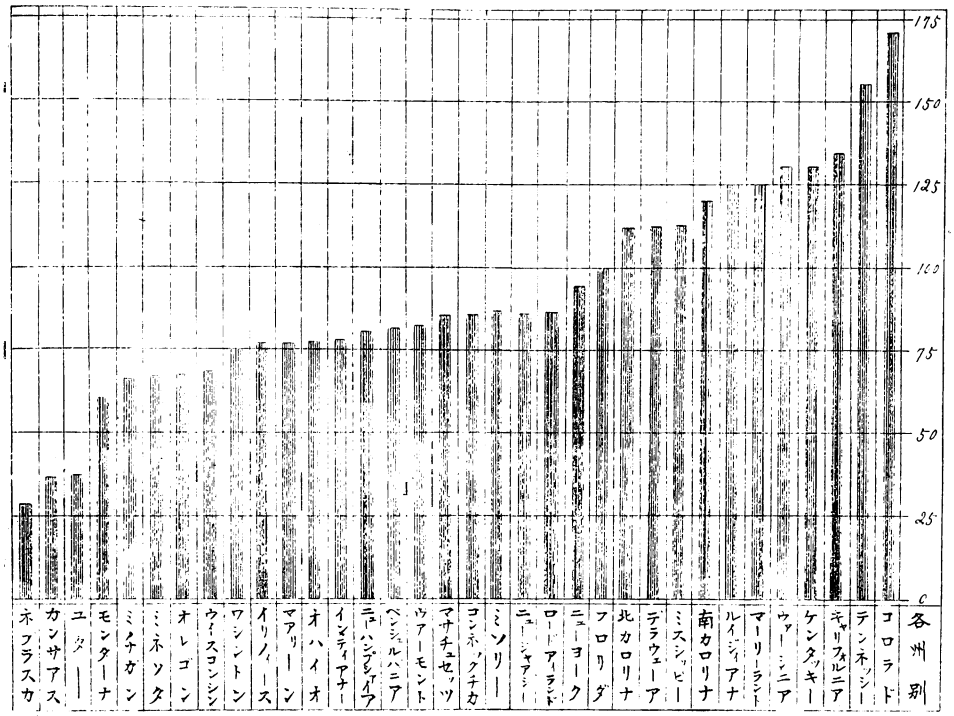
	結核性患者死亡	人口萬ニ付
東京市	八、五二一人	三九、二一
澁谷町	二九三人	三六、二六

米國ニ於ケル結核死亡(一九二二年調査)

北米合衆國商務省「センサス」課

衞生局豫防課譯

北米合衆國商務省「センサス」課ノ調査ニ據レバ一九二二年合衆國登錄地域ニ於ケル結核患者死亡數ハ總計九〇、四五二人デアッテ人口一〇〇、〇〇〇ニ付九七・〇八ノ比率デアル。之ヲ一九二一年ニ於ケル人口一〇〇、〇〇〇ニ對スル比率九九・四〇ニ比スルト二・四ノ低減ヲ示シテ居ル。



結核全型死亡比率表　北米合衆國(一九二二年・大正十年)

此ノ比ヲ一九二一年ノ比率ニ對照スルト十二州ハ死亡增加ヲ示シテ居ルガ他ノ二十二州ハ減少シ一般ノ傾向ノ漸次遽減ノ狀ニアル。次ニ人口一〇〇、〇〇〇ニ對スル死亡率ヲ單位トシテ各州ノ結核死亡狀態ヲ比較スルニ一九二二年ニ於ケル最高死亡率(結核)ハコロラド州ノ一七二・六人デアッテ最低ナルハ子ブラスカ州デアル。コロラド州ノ高率デアルノハ人ノ論ズルガ如キ氣候ノ非衞生的デアルタメデハナクテ寧ロ其ノ氣象風土ガ結核羅患者若シクハ結核性素因ヲ有スル者ヲ集注セシムルヤウナ實際狀況ニアルカラデアラウ。

或ル二三州ニ於テハ斯種ノ比較考察ハ白色及有色人種別ニ觀察セラレテ居ル。テンネッシー州ニテハ白色及有色兩人種共ニ最高率ノ死亡ヲ有シ(白色人種ハ人口十萬ニ付一二一・八デ有色人種ハ二九九・八デアル)白色人種ニ於ケル最低率ハミスシッピー州ノ五四・五デアッテ此州トフロリダ州トハ有色人種ニ於テモ最低率ヲ示シ人口一〇〇、〇〇〇ニ對シ一七一・五デアル。尙各州ニ於ケル比率ハ上ノ圖表ニ於テ明カデアル。

(佐藤正扱)

結核豫防事業ヲ目的トスル團體ニ關スル調査（大正十三年一月一日現在）

廳府縣名	名稱	事務所所在地	創立年月日	會員數	資産ノ總額
北海道	函館結核豫防協會	函館市役所内	大正八年九月二日	八一	資産ナシ
	稚内町結核豫防會	稚内町役場内	大正五年三月四日	五〇	ナシ
東京	旭川市結核豫防會	旭川市聯合衛生組合内	大正二年十一月十一日	三四八	ナシ
	保安會	東京府豐多摩郡澁谷町大字下澁谷二二七番地	明治四十二年一月一日	正會員一、〇二〇 准會員二〇〇	約六〇〇〇圓
	社團法人白十字會	太郎方松野菊神田區中猿樂町十七番地	明治四十四年二月十日	一、二一一	四四、七六〇、八一圓
京都	京都府結核豫防會	京都府警察部衛生課	大正六年七月十六日	二七〇	一〇、八五三、五二
大阪	大阪結核豫防協會	大阪市東區高麗橋一丁目二三番地	大正元年十二月十一日		
神奈川					
兵庫	兵庫縣結核豫防會	兵庫縣神戸市橘通一丁目二番地	大正四年六月十九日	一、〇四八	六、八三四、六一
長崎	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
新潟	ナシ	ナシ	大正十年一月二十六日	四六	一五八、六六五圓
埼玉	埼玉縣健康診斷醫會	埼玉縣北葛飾郡吉川町大字平沼七五番地			
群馬	中里結核豫防組合	多野郡中里村役場内	大正四年中	四四〇	ナシ
千葉	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
茨城	茨城縣結核豫防協會	茨城縣廳内	大正五年六月十日	七五〇	二、〇〇〇圓
栃木	栃木縣結核豫防協會	栃木縣廳衛生課	大正十年十月二日	一〇、六〇二	五〇、〇〇〇圓
奈良	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
三重	三重縣結核豫防協會	三重縣警察部衛生課内	大正九年一月二十七日	一八、一一八	八八、四九一、三三圓
愛知	社團法人愛知結核豫防會	名古屋市中區南鍛冶屋町三ノ二一	大正二年八月六日	三、六四六	一三、七四〇圓

靜岡						
山梨	山梨縣結核豫防協議會		山梨縣警察部衛生課內	大正三年二月	二一	五七三、三八圓
滋賀	滋賀縣結核豫防會		滋賀縣警察部衛主課內	大正八年十月五日	二、二六四	二〇、〇〇〇、〇〇圓
岐阜	岐阜縣結核豫防會		岐阜縣警察部衛生課內	大正三年十二月一日	一一、八七一	一七、三三九、〇〇圓
長野						
宮城	仙臺市結核豫防會		仙臺市東三番町一四八番地	大正七年十一月十六日	五三一	ナシ
福島	ナシ					
岩手	ナシ					
青森	青森縣結核豫防會		青森縣警察部衛生課內			
山形	山形縣結核豫防會		山形縣警察部衛生課內	大正三年八月二十日	四、九八九	一一、一五〇、〇〇圓
秋田	秋田縣結核豫防協會		秋田縣廳衛生課內	大正九年八月二十六日	一定ノ會員ナシ	五〇、〇〇〇、〇〇圓
福井	福井縣結核豫防會		福井縣警察部衛生課內	大正五年四月十六日	會員數正確ナラズ	二六、〇三七、三四九圓
石川	石川縣結核豫防會		石川縣警察部	大正四年十一月十五日	名譽會員 三 特別同 一 正同 四 贊助同 二七三	八、六二〇、〇〇圓
富山	ナシ					
鳥取	鳥取縣結核豫防會		鳥取縣警察部	大正十二年七月十四日		
島根	優詔飯石郡結核記念豫防協會		飯石郡役所內	明治四十四年五月二十日	目下募集中	寄附金募集中
岡山						
廣島	廣島縣結核豫防協會		廣島縣衛生課	大正十一年六月一日	一八、五五八	一一二、五六一、〇〇圓
山口	山口縣結核豫防會		山口縣衛生課	大正九年五月	五、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇
和歌山						
德島	德島縣結核豫防會		德島縣衛生課	大正九年十二月一日	九五〇	五、一四二、七八圓

香川	財團法人香川縣結核豫防會	香川縣廳衛生課內	大正七年七月一日	名譽會員	一、九五四	一三、二九一、九五圓
愛媛	愛媛結核豫防協會	愛媛縣警察部	大正四年十二月三日	特別同正	九、七五六、五二〇	五〇、〇〇〇、〇〇
高知	高知縣結核豫防協會	高知縣廳	大正十一年五月			
福岡	福岡縣結核豫防協會	福岡縣衛生課	大正七年四月		二、八七三	三、三八七、二四三圓
大分	大分郡醫師會結核早期診斷所佐賀縣廳構內日本赤十字社佐賀支部施療委託病院佐賀立縣病院好生館	大分郡瀧尾村字富岡四四〇番	大正六年四月一日		五八	ナシ
佐賀		佐賀縣廳內	大正三年二月十日		二〇、〇八一	一〇六、四四〇、三五
熊本	熊本縣結核豫防協會	熊本縣衛生課	大正四六月十一日		三、〇三三	二一、三二四、〇〇圓
宮崎	宮崎縣結核豫防協會	宮崎郡宮崎町	大正八年十一月十日	名譽會員	五、二二七	一六、〇〇〇、〇〇圓
鹿兒島	鹿兒島縣結核豫防會	鹿兒市平之町	大正四年五月二十日	特別同正	一三、六一一	七、九八四、〇二
沖繩	沖繩縣結核豫防會	那覇市上泉町三丁目六八ノ一	大正七年八月十五日	贊助同正	二、〇八九	一七、〇〇〇、〇〇
				特別名譽會員同	一、二二八	
				贊助同	三、一五二	

抄錄

肺結核ノ分類ト治療方針

醫學博士　有馬英二

（北海道醫學雜誌第一年第二號）

著者ハ病理學者殊ニフライブルグ派（アショフ、ニコル、グレフ及キュフェレ等）ノ唱導ニ依ル肺結核ノ質的分類ガ從來ノ部位的分類ニ遙カニ優レルヲ說キ、之レニヨリテノミ肺結核ノ豫後推定ト治療方計ヲ確實ニ定メ得ルトシ、病理解剖的特長ト、X線像ヲ簡單ニ記述シタル後、著者自身ノ多數患者ニ付テ得タルX線像ノ觀察ト病理組織學的研究ニヨリ、從來ノ病理學者ノ設定ニ係ル分類ニ不足ヲ感ジ、著者自身ノ分類ヲ示セリ。

一、硬化性肺結核（Zirrhotische Phthise）
　(a)純硬化性肺結核（Rein Zirrh. Ph.）
　(b)結節性硬化性肺結核（tuberkulär-zirrhotische Ph.）
　(c)硬化性結節性肺結核（Zirrhotische-tuberkuläre Ph.）

二、結節性肺結核（Tuberkuläre Ph.）
　(a)結節性肺結核（Nodöse-tuberkuläre Ph.）
　(b)粟粒結核（Miliar-tuberkuläre Ph.）

Produktive Prozess
增殖性轉機

三、小葉性肺炎性肺結核（Lobulär-Pneumonische Ph.）
　(a)結節性小葉性肺炎性肺結核（Tuberkulär-lobulär-pneumonische Ph.）
　(b)小葉性肺炎性肺結核（lobulär-pneum. Ph.）

(四)大葉性肺炎性肺結核（Lobär-pneumon. Ph.）

Exsudative Pr.
滲出性轉機

本分類ハ大體ニ於テニコル—アショフ、グレフ—キュフェレ及フレンケル—グレフ等ノ分類ニ一致スルモ、是等ノ分類ト異ル點ハ、結節型ト小葉性肺炎型トノ混合型或ハ移行型ヲ加ヘタルト、竝ニ命名ハ凡テ臨牀上ノ立脚點ニ基キタルニアリ、實際X線像ニ於テモ一側若シクハ兩葉ノ肺ニ、結節ト小葉性肺炎ト混在スルモノ稀ナラズ、而シテ斯ノ如キ場合ニハ著者ノ結節性小葉性肺炎性結核ヲ分類セザレバ豫後推定上及治療方針ニ不便ヲ感ズルコト大ナリ。

最後ニ著者ハ肺結核ノ治療方針トシテ現今用ヒラル、凡テノ治療法中如何ナル卓越セル方法モ、肺ノ局所的抵抗竝ニ全身抵抗ヲ高ムル能力アルモノナラバ、其ノ用法ヲ誤ラザル限リハ、硬化性肺結核或ハ結節性肺結核ニハ必ズ有效ナル可ク光線療法、蛋白療法等ノ非特殊療法モ、「ツベルクリン」療法ノ如キ特殊療法モ、皆增殖性肺結核ニ應用セラレタル場合ニ有效ナルモノナリト述ベタリ。

會報竝ニ雜報

日本結核病學會第二回總會記事

時勢ノ要求ニ應ジテ出現シタ本會トシテ當然ノ事デハアルガ、創立後未ダ日ノ淺イニモ拘ラズ、會員モ著シク增シ、又結核研究者ノ數モ殖エタノデ、總會演說ノ申込モ從テ多カツタ上ニ、興味アル特別講演ヲ四題マデモ加ヘタノデ、一日テハ到底足ラズ四月五、六兩日ニ亘ルコトトナツタ。

會場ハ大阪醫科大學ノ新築病院ノ大講堂、第一日ハ半前八時開會、先ヅ佐多會長ノキビ〳〵シタ開會ノ辭ニ始リ田澤幹事ノ庶務會計報告ガアツテ、直チニ學術演說ニ入ツタ、渡邊、紙野、兩君ノポテロ反應ノ報告ガ濟ムト、川上君ト鈴木君トガ前後シテ血壓ニ關スル演說ヲシタ處ガ問題ガ問題故、追加ヤ討論ガ續出シテ、仲〻賑カデアツタ。

第七番ノ枚田君ノ演說ノ頃ハ會員モ充分出揃ツテ會場ハ立錐ノ餘地モナイ盛況デアツタノデ、一時學術演說ヲ中止シテ議事ニ入リ、(一)會則ノ改正トシテ幹事十名ニ增員ノ件ヲ可決シ(二)評議員改選ノ件ハ佐多會長ガ詮考委員ヲ指名スルコトナリ、近藤、有馬(英)田澤、永井、有馬(賴)五君ガ指名ヲ受ケ(三)次回開會地ノ件ハ福岡ト決シ(四)宿題ノ件ハ別項ノ如ク定マリ(五)米國ヨリ本邦ヘ寄附セラレシ金ノ用途ハ對結核事業ニ向ケル樣建議シテハ如何トノ提案モ可決シ、其實行方法ヲ役員ニ一任スルコト、定マツタ。

以上ノ議事ヲ終ツテ小憩ノ後、十一時カラ佐藤(秀)學士ノ「小兒結核ニ對スル施設ニ就テ」ノ興味アル特別講演ガ始マリ、佛國ニ於ケル模範的ノ諸施設ヲ紹介シテ、從來殆ンド何等ノ施設モ有セヌ吾國ノ今後取ルベキ方向ヲ示シ十二時半喝采裡ニ壇ヲ下ツテ休憩トナリ、午後一時半再開、演說ハ順序ヨク進行シテ午後二時藤浪博士ノ特別講演「結核ノレントゲン線療法」ニ移ツタ、何ニシテモ斯界ノ權威者タル同君ノ講演故一同ヲシテ充分傾聽セシメタ。

次デ佐多會長カラ役員改選ノ結果(別項)ニ就テ報告ガアリ、再ビ學術演說トナリ、有馬(賴)君其他ノ「AO」ニ關スル演說ニ對シテハ渡邊(義)君ノ質問ヤ近藤(乾)君ノ討論ガアリ、岩佐君ノ化學的療法、糸川君ノ「ヴィタミン」A、池口君ノ「ヒヨレステリン」是等ノ演說ニモ夫々追加ヤ討論ガ出テ有益デアツタ、第二十四番ノ川村君ガ缺席サレタノデ五時二十分閉會。

第二日ハ宮本君ノ演說ニ始リ、次デ太繩君ガ立チ、其次ニ故矢部君ノ變性結核菌ニ關スル報告ヲ門下ノ柴田君ガ代讀シ、夫カラ故矢部君及柴田、熊谷、小林三君ノ共同研究ノ演說ニ移ツタノデアルガ、之ニ先チ時ノ座長近藤(乾)君ハ故矢部君ノ有益ナル業績ニ對シ特ニ敬意ヲ表シ、規定以上ノ時間ヲ提供スルコトヲ全會員ニ謀ツテ滿場ノ同意ヲ得、代演者熊谷君ヲシテ充分ニ演了セシメタバカリデナク、有馬(賴)ノ討論、足立君ノ質問、熊谷君ノ答辯等ノ終ツタ後、座長ノ提議デ會員一同起立シテ、篤學ナル故矢部閣下ニ謹ンデ吊意ヲ表シ、會場ハ暫シ崇嚴ノ氣ニ充タサレタ。

グレフ君(新潟醫大教授)ノ特別講演(獨逸語)ハ患者生前ノX線寫眞ト解剖所見ノ比較ヲ「ヂアポジチーフ」デ示說シテ臨牀家ニモ仲〻興味ガ多ク、少シモ聽衆ヲ倦マシメナカツタ。

午後モ有益ナル演說ガ次々ト進行シ、討論モ追加モアツテ花々シク、イヨイヨ本會ノ最後ヲ飾ルベキ佐多會長ノ特別講演ニ移ツタガ、其蘊蓄ト其雄辯ト相俟ツテ遺憾ナク會衆ヲ醉ハシ、午後五時會長閉會ノ辭デ目出度終リヲ告ゲ、會員ハ折カラノ雨ヲモ物トモセズ懇親會會場今橋「ホテル」ヘト急イダ。

次回總會ニ關スル決定事項

開催地　福岡市

宿　題　結核ノ原發感染(初感染)ト續發感染(再感染)

宿題擔當者

一、實驗的方面　醫學博士　佐多愛彦君

二、病理解剖的方面　同　緒方知三郎君

三、臨牀的方面　同　有馬英二君

宿題追加演說、豫メ申込マルレバ成ルベク充分ノ時間ヲ提供ス、

役員改選

會長（第三回）　醫學博士　武谷廣君

評議員　死亡其他ノ理由ニヨリ二名削除、新タミ左記十名推薦セラル。

有馬英二君　小野寺直助君　金井章次君
小林六造君　佐藤秀三君　中村豐君
三戸時雄君　竹山九朗君　鈴木信義君
三野原愛四郎君

幹事（イロハ順）

今村荒男君　渡邊義政君　田澤錄二君
小野寺直助君　遠藤繁清君　有馬賴吉君
淺山忠愛君　坂口康藏君　佐藤正君
溝淵忠雄君

會計報告（大正十二度分）三月末日調

收入之部

一金壹萬百參拾七圓七拾九錢也

內譯
- 金六百六拾七圓拾四錢也　前年度越金
- 金七千百貳拾七圓六拾五錢也　會費及廣告料其他
- 金貳千參百四拾參圓也、　借用金

支出之部

一金九千七百六拾壹圓八拾參錢也

內譯
- 金千貳百九拾參圓也　借用金返濟
- 金五百五拾六圓也　通信費
- 金七千百四拾參圓九拾八錢也　印刷費
- 金貳拾壹圓參拾八錢也　消耗費
- 金四圓四拾錢也　保有費
- 金六百九拾六圓也　手當及旅費
- 金四拾七圓七錢也　雜費

差引殘金參百七拾五圓九拾六錢也

（負債　千五百圓也）

（十二年度未納會費　金貳百六拾貳圓五拾錢也）

各療養所長會議

一昨年始メテ各療養所長會議ナルモノガ內務省衞生局ノ肝入リデ東京ニ開カレ、東京、大阪、京都、橫濱、神戸、長崎等ノ療養所長ヤ折柄上京中ノ各市衞生課長ナドガ列席シ、內務省側ハ潮衞生局長ヤ湯澤豫防課長、佐藤技師ナドガ出席シ、潮局長ガ座長席ニ著イテ色々ノ決議ヤ意見交換ガ行ハレテ存外有益デアツタガ、就中最モ目ニ立ツ大キナ結果ハ日本結核病學會創立ノ機運ガ其際ニ醸成サレタコトデアル、而シテ本會ノ第二回總會ガ今後大阪デ開カレタ機會ニ、此療養所長會議モヤハリ第二回ヲ開クコトトナツタノハ極メテ自然ノ成リ行キデアツタ。

五日、六日ノ學會ガ終ツタ翌七日、午前八時カラ大阪市役所デ開カレ、列席者ハ內務省ノ高野豫防課長、佐藤技師、岡本屬、田澤（東京）有馬（大阪）三戸（京都）森田（名古屋）高橋（橫濱）前田（神戸）ノ各療養所長及ビ福島縣ノ療養所長其他東京ノ遠藤副所長、大阪ノ太繩醫長等デ、左記議案ニツキ夫々意見ヲ戰ハシタガ、療養所議案第九及內務省案第三等ニ關シテハ外國ノ施設ヲ參考スルノ必要ガアルノデ豫メ列席ヲ需メ置イタ傳研ノ佐藤秀三氏（最近歸朝）カラ佛國ニ於ケル實況ヲ聽キ、又田澤氏ノ米國視察談ナドモアリ、結局本邦トシテハ虛弱兒童ノ保育機關及ビ結核兒童ノ收容所ノ役置ノ外、結核患家ノ乳兒ヲ隔離スル具體案ヲ攻究スルコトヲ急務トナストノ意見ガ一致シタ。

又結核處女地問題ニツキテハ有馬氏ガ實例ヲ擧ゲテ力說スル所アリ、國立研究所設置ノ件モ無論異議ナク、其運動ニ著手スルコトトナツタ。

猶又各療養所トモ擴張ノ必要ヲ主張シテ居ツタ。

各療養所提案

一、前回ノ會議ニ於ケル議題ニツキ報告又ハ再協議スベキ件
二、有料患者ヲ收容スル場合ノ障碍ニ關スル攻究ノ件
三、各療養所ノ經營ニ關スル件
イ、賄關係
ロ、糞尿、汚水ノ處理方法
ハ、各種ノ熱源
ニ、非常時ニ於ケル救急施設
ホ、給與品ノ範圍
四、各療養所相互ノ聯絡ニ關スル件
（年報豫算、收容、新施設等ノ通告）
五、法令ニヨル患者家族ノ生活補給費ノ活用ニ關スル件
六、從務員ノ優遇法ニ關スル件
七、國家及ビ社會ヲシテ結核撲滅ヲ重視セシムル方法攻究ノ件
八、結核病者屆出ニ關スル件
九、結核撲滅事業ノ事實的進歩ヲ促ス方法攻究ノ件
十、療養所ノ附屬事業トシテ市内ニ結核相談所ヲ設ル件
十一、他救濟機關トノ聯絡ニ關スル件
十二、各市療養所ノ收容患者數ニ關スル件
十三、地方ニ於ケル結核處女地ノ疫學的調査ヲ内務省ニ建議スルノ件
十四、國立結核研究所設置ヲ建議スル件
十五、次回開催ニ關スル件

衛生局豫防課提案

一、結核療養所ヲ中心トセル結核豫防ニ關スル具體的方法如何
二、各療養所ノ擴張計畫ニ關スル意見如何
三、各療養所ニ於ケル兒童結核ノ治療及豫防ニ關スル現況如何

評議員矢部軍醫中將ノ逝去

本會評議員東京市療養所顧問海軍軍醫中將矢部辰三郎君ハ豫テ病氣デアラレタガ、三月二十九日ニ終ニ逝去セラレ、四月二日青山齋場ニ於テ崇嚴ナル葬儀ガ營マレタ、本會カラモ謹デ吊辭ヲ呈シタ、因ニ嗣子升君ハ故人ノ遺志ヲ繼ギ東京市療養所ノ醫局ニ入リ、結核研究ニ從事スルコトヽナツタ。

「ガーデンホーム」ノ竣工

既報ノ通リ、東京市療養所ノ隣地ニ輕症結核患者收容機關トシテ「ガーデンホーム」ナル療養所ガ出來不日警視廳ノ許可モ有ル筈故、患者收容ノ開始モ遠カラヌコトデアラウ。

醫員トシテハ主ニ市療養所ノ村尾、熊谷兩學士ガ當局諒解ノ下ニ公務ノ餘暇診療スルコトヽナツテ居ル。

患者トシテハ最初極輕症ノ婦人ノミ二三十名收容スル豫定デアル。